山形県埋蔵文化財センター報告書第43集

後田遺跡
大道下遺跡
第2次発掘調査報告書

1997

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

後田遺跡
大道下遺跡
第2次発掘調査報告書

平成9年10月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

後田遺跡A区全景(空中写真)

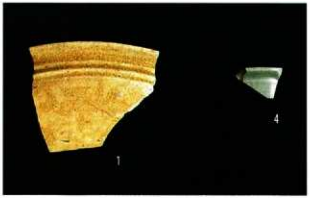
6(RW836)出土状況(南から)

後田遺跡出土笹塔婆

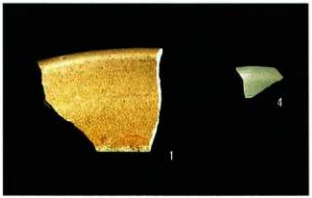
笹塔婆5・6裏面

後田遺跡出土青磁・かわらけ片

後田遺跡出土青磁・かわらけ片



大道下遺跡出土遺物



大道下遺跡出土遺物

後田遺跡出土土器

後田遺跡出土土器

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査した、後田遺跡・大道下遺跡の調査成果をまとめたものです。

後田遺跡・大道下遺跡は山形県の北西部に位置する鶴岡市にあります。西は日本海に面し、南には月山・湯殿山・羽黒山の出羽山々が連なります。豊かな自然に恵まれた米づくりが中心の伝統のある町です。

この度東北横断自動車道酒田線建設に伴い、工事に先立って後田遺跡・大道下遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、後田遺跡から古墳時代の竪穴住居跡、平安時代から中世の建物跡・井戸跡・溝跡、近世以降の溝跡が確認され、土器とともに多量の木製品が出土しました。また、大道下遺跡からは近世以降の溝跡が確認されました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発、普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成９年10月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は東北横断自動車道酒田線(朝日～酒田間)建設工事に係る「後田遺跡」「大道下遺跡」の発掘調査報告書である。今回は第2次調査となる。

2　調査は日本道路公団仙台建設局(現東北支社)鶴岡工事事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	後田遺跡(ATOUD－II)　遺跡番号　昭和63年度登録	
所在地	山形県鶴岡市大字寺田字後田	
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化センター	
調査期間	平成6年4月1日～平成8年3月31日	
現地調査	平成6年5月9日～平成6年9月8日	
調査担当者	調査研究課長	佐々木洋治(現研究課長)
	主任調査研究員	野尻　侃(現調査第二課長)
	調査研究員	丸山　晶子
	嘱託職員	青山　崇
遺跡名	大道下遺跡(ATOOS－II)　遺跡番号　昭和63年度登録	
所在地	山形県鶴岡市大字寺田字大道下	
調査期間	平成6年4月1日～平成8年3月31日	
現地調査	平成6年5月9日～平成6年9月8日	
調査担当者	調査研究課長	佐々木洋治(現研究課長)
	主任調査研究員	野尻　侃(現調査第二課長)
	調査研究員	丸山　晶子
	嘱託職員	青山　崇
整理担当者	調査第二課長	佐藤　庄一(現調査第一課長)
	主任調査研究員	野尻　侃(現調査第二課長)
	調査研究員	丸山　晶子
	調査研究員	森谷　昌央
	嘱託職員	青山　崇
	嘱託職員	黒坂　広美

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、日本道路公団仙台建設局(現東北支社)鶴岡工事事務所、鶴岡市教育委員会、山形県教育庁文化財課、庄内教育事務所の協力を得た。現地調査と報告書作成にあたって、市田京子、大坪聖子、川崎利夫、桑原幸則、田代郁夫、千々和到、戸川安章、新野一浩、平川　南、曽田慶信(五十音順)の各氏からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5　本書の作成・執筆は野尻　侃、丸山晶子、青山　崇、黒坂広美が担当した。編集は尾形與典、丸山晶子、森谷昌央が担当し、全体については佐藤庄一が監修した。

6　委託業務は下記のとおり実施した。

遺構の写真実測　　株式会社シン技術コンサル

遺構・遺物の理科学的分析　　株式会社パリノ・サーヴェイ

7　出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡	ＳＢ…掘立柱建物跡	ＳＥ…井戸跡
ＳＫ…土坑	ＳＤ…溝跡	ＳＰ…ピット
ＥＫ…遺構内土坑	ＥＰ…遺構内ピット	
Ｐ……土器	Ｗ……木製品	Ｓ……礫
ＲＰ…一括・登録土器	ＲＷ…一括・登録木製品	

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3　報告書執筆の基準は下記のとおりである。

(1)　調査概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2)　グリッドの南北軸は後田遺跡がＮ－1°－Ｗ、大道下遺跡がＮ－6°－Ｅを測る。

(3)　遺構実測図は1/20・1/40・1/60・1/200・1/600の縮図で採録し、各挿図毎にスケールを付した。

(4)　遺物実測図・拓影図・図版は各々同じスケールで採録し、遺物実測図・拓影図にスケール・及び縮尺値を示した。

(5)　挿図土層断面図中の●印は平面図の遺物を投影したものである。

(6)　笹塔婆の釈文に加えた記号は下記のとおりである。

□□□　　欠損文字のうち字数の確認できるもの。

□□□　　欠損文字のうち字数が推定できるもの。

［　］　　欠損文字のうち字数の数えられないもの。

〔カ〕　　執筆者が加えた文字で疑問の残るもの。

(7)　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・図版とも共通のものとした。

(8)　出土遺物観察表中の(　)内の数値は、図上復元による推定値、または残存値を示している。

(9)　遺構覆土の色調の記載については、1987年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の方法と経過 …… 1
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1　遺跡の立地 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3
Ⅲ　後田遺跡 …… 7
　1　調査の概要 …… 7
　2　遺構・遺物の分布 …… 7
　3　検出された遺構 …… 11
　4　出土した遺物 …… 46
Ⅳ　大道下遺跡 …… 98
　1　調査の概要 …… 98
　2　検出された遺構 …… 98
　3　出土した遺物 …… 98
Ⅴ　まとめと考察 …… 103
　1　後田遺跡のまとめ …… 103
　2　大道下遺跡のまとめ …… 104
　3　笹塔婆について …… 105

報告書抄録 …… 112

付編 …… 巻末
「後田遺跡　自然科学分析」

表

表 1　発掘調査工程表 …… 2
表 2　後田遺跡土器観察表(1) …… 88
後田遺跡土器観察表(2) …… 89
後田遺跡土器観察表(3) …… 90
後田遺跡土器観察表(4) …… 91
表 3　後田遺跡木製品観察表(1) …… 92
後田遺跡木製品観察表(2) …… 93
後田遺跡木製品観察表(3) …… 94
後田遺跡木製品観察表(4) …… 95
後田遺跡木製品観察表(5) …… 96
表 4　後田遺跡土製品・石製品・鉄製品・古銭観察表 …… 97
表 5　山形県内の出土例 …… 105
表 6　各地出土笹塔婆時期分布表 …… 106
表 7　全国各地の主な笹塔婆出土遺跡(1) …… 109
全国各地の主な笹塔婆出土遺跡(2) …… 110
全国各地の主な笹塔婆出土遺跡(3) …… 111

挿　図

第 1 図　遺跡位置及び周辺の遺跡 …… 4
第 2 図　調査区概要図 …… 5
第 3 図　後田遺跡周辺の字切り図
明治26年 …… 8
第 4 図　後田遺跡遺構配置図
月記遺跡遺構配置図
遺物分布図 …… 9
第 5 図　ＳＴ１竪穴住居跡 …… 18
第 6 図　ＳＢ６掘立柱建物跡 …… 19
第 7 図　ＳＢ７掘立柱建物跡 …… 20
第 8 図　ＳＢ８・９掘立柱建物跡 …… 21
第 9 図　ＳＢ10掘立柱建物跡 …… 22
第10図　ＳＢ12掘立柱建物跡 …… 23
第11図　ＳＥ２井戸跡 …… 24
第12図　ＳＥ４井戸跡 …… 25
第13図　ＳＥ27・28井戸跡 …… 26
第14図　ＳＥ30・313井戸跡 …… 27
第15図　ＳＥ45井戸跡 …… 28
第16図　ＳＫ23・41・47・48・49土坑 …… 29
第17図　ＳＫ50・51・52・61・76土坑 …… 30
第18図　ＳＫ264・345・358・359土坑 …… 31
第19図　ＳＫ68・279土坑
ＳＤ69・278溝跡 …… 32
第20図　ＳＰ84・124・129・170
151・222・392ピット …… 33

第21図　ＳＤ３溝跡全体図 …… 34
第22図　ＳＤ３溝跡(1) …… 35
第23図　ＳＤ３溝跡(2) …… 37
第24図　ＳＤ３溝跡(3) …… 39
第25図　ＳＤ３溝跡(4) …… 41
第26図　ＳＤ３溝跡(5) …… 43
第27図　ＳＤ271溝跡 …… 45
第28図　遺物実測図(1)土器 …… 54
第29図　遺物実測図(2)土器 …… 55
第30図　遺物実測図(3)土器 …… 56
第31図　遺物実測図(4)土器 …… 57
第32図　遺物実測図(5)土器 …… 58
第33図　遺物実測図(6)土器 …… 59
第34図　遺物実測図(7)土器 …… 60
第35図　遺物実測図(8)土器 …… 61
第36図　遺物実測図(9)土器 …… 62
第37図　遺物実測図⑽土器 …… 63
第38図　遺物実測図⑾土器 …… 64
第39図　遺物実測図⑿土器 …… 65
第40図　遺物実測図⒀土器 …… 66
第41図　遺物実測図⒁土器 …… 67
第42図　遺物実測図⒂木製品 …… 68
第43図　遺物実測図⒃木製品 …… 69
第44図　遺物実測図⒄木製品 …… 70
第45図　遺物実測図⒅木製品 …… 71
第46図　遺物実測図⒆木製品 …… 72
第47図　遺物実測図⒇木製品 …… 73
第48図　遺物実測図(21)木製品 …… 74
第49図　遺物実測図(22)木製品 …… 75
第50図　遺物実測図(23)木製品 …… 76
第51図　遺物実測図(24)木製品 …… 77
第52図　遺物実測図(25)木製品 …… 78
第53図　遺物実測図(26)木製品 …… 79
第54図　遺物実測図(27)木製品 …… 80
第55図　遺物実測図(28)木製品 …… 81
第56図　遺物実測図(29)木製品 …… 82
第57図　遺物実測図(30)木製品 …… 83
第58図　遺物実測図(31)木製品 …… 84
第59図　遺物実測図(32)木製品 …… 85
第60図　遺物実測図(33)木製品 …… 86
第61図　遺物実測図(34)土製品・
石製品・金属製品・古銭 …… 87
第62図　大道下遺跡遺構配置図 …… 99
第63図　大道下遺跡周辺の字切り図
明治26年 …… 100
第64図　ＳＫ29・31・32・33・34
40・62土坑 …… 101
第65図　ＳＤ22溝跡土層断面図
遺物実測図 …… 102

図　版

巻頭図版１　後田遺跡Ａ区全景(空中撮影)
巻頭図版２　笹塔婆出土状況
　　笹塔婆墨書・裏面下端朱塗り
巻頭図版３　後田・大道下遺跡出土遺物
巻頭図版４　後田遺跡出土遺物
図版１　後田遺跡全景(空中写真)
図版２　後田遺跡検出状況　他
図版３　ＳＴ１完掘状況　他
図版４　ＳＢ６完掘状況　他
図版５　ＳＢ７完掘状況　他
図版６　ＳＢ８・９完掘状況　他
図版７　ＳＢ10完掘状況　他
図版８　ＳＢ12完掘状況　他
図版９　ＳＥ２完掘状況　他
図版10　ＳＥ４・30完掘状況　他
図版11　ＳＥ27・28完掘状況　他
図版12　ＳＥ45完掘状況　他
図版13　ＳＥ313完掘状況　他
図版14　土坑検出状況　他
図版15　土坑完掘状況　他
図版16　土坑完掘状況　他
図版17　土坑完掘状況　他
図版18　溝跡土層断面　他
図版19　ピット完掘状況　他
図版20　ＳＤ３遺物出土状況
図版21　ＳＤ３遺物出土状況
図版22　ＳＤ３完掘状況　他
図版23　ＳＤ３土層断面
図版24　大道下遺跡全景(空中撮影)
図版25　溝跡・土坑土層断面　他
図版26　出土遺物(1)土器
図版27　出土遺物(2)土器
図版28　出土遺物(3)土器
図版29　出土遺物(4)土器
図版30　出土遺物(5)土器
図版31　出土遺物(6)土器
図版32　出土遺物(7)土器
図版33　出土遺物(8)土器
図版34　出土遺物(9)土器
図版35　出土遺物(10)土器
図版36　出土遺物(11)土器
図版37　出土遺物(12)土器・木製品
図版38　出土遺物(13)土器・古銭
図版39　出土遺物(14)土器
図版40　出土遺物(15)木製品
図版41　出土遺物(16)木製品
図版42　出土遺物(17)木製品
図版43　出土遺物(18)木製品
図版44　出土遺物(19)木製品
図版45　出土遺物(20)木製品
図版46　出土遺物(21)木製品
図版47　出土遺物(22)木製品
図版48　出土遺物(23)木製品
図版49　出土遺物(24)木製品
図版50　出土遺物(25)木製品
図版51　出土遺物(26)木製品
図版52　出土遺物(27)木製品
図版53　出土遺物(28)木製品
図版54　出土遺物(29)木製品
図版55　出土遺物(30)木製品
図版56　出土遺物(31)木製品
図版57　出土遺物(32)
　　石製品・金属製品・土製品

Ⅰ　調査に至る経緯

1　調査に至る経過

山形県教育委員会は、昭和63年に日本道路公団より東北横断自動車道(朝日～酒田間)建設に伴う分布調査を依頼された。これを受けて行ったA調査(表面踏査)の結果、東西250m、南北200mの後田遺跡、東西240m、南北400mの大道下遺跡が確認され新規登録された。

この段階で、後田遺跡は平安・鎌倉時代の集落跡、大道下遺跡は平安時代の集落跡とされている。その後、平成元年に県営ほ場整備事業(鶴岡西部地区)の関連で路線内および隣接区域の緊急発掘調査が行われ、後田遺跡では柱穴・溝跡・旧河川跡等の遺構を検出し墨書土器、風字硯片等の遺物を採取した。また、大道下遺跡では、掘立柱建物跡・土坑・溝跡等が検出された。

平成2年には、坪掘りやトレンチ掘りによるB調査が行われ、後田遺跡においては、柱穴、溝跡、旧河川跡等の遺構を検出し平安時代の須恵器、赤焼土器等を採取している。大道下遺跡では、平安時代と中世の柱穴、溝跡等の遺構が検出されている。

平成5年度には建設工事が具体化し、以上の経過を踏まえて関係機関との協議を重ねた結果、建設工事に係る19,500平方mについて、平成6年度に財団法人山形県埋蔵文化財センターが委託を受けて記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。

2　調査の方法と経過

グリッド設定は、後田遺跡では、建設予定道路幅のセンター杭とその幅杭を結んでY軸としこれに直交する線をX軸とした。これを起点として5m四方のグリッドを設定した。大道下遺跡でも、同様にグリッドを設定した。

調査面積は後田遺跡で14,500平方m、大道下遺跡は5,000平方メートルである。なお後田遺跡では北側をA区、南側をB区とした。

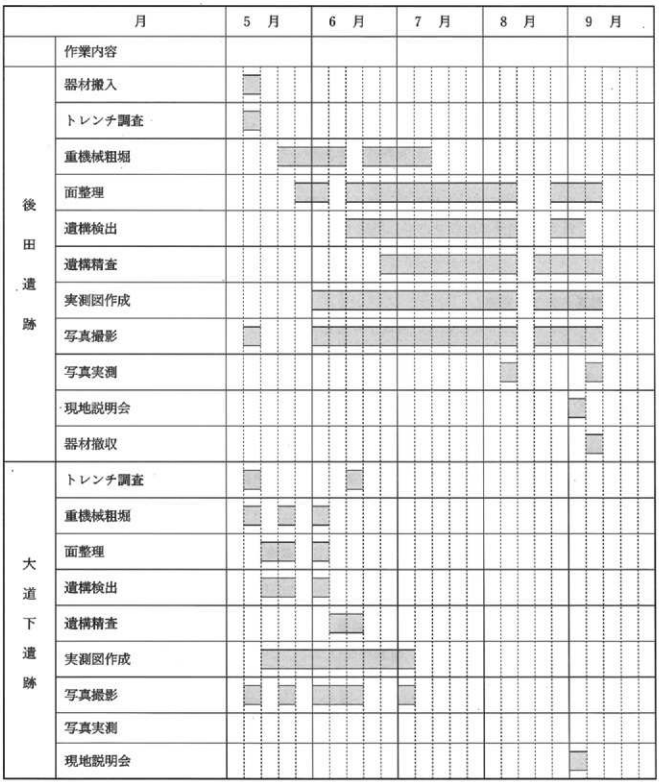
後田遺跡と大道下遺跡は、約400mと近接しているため並行して調査を進めた。

大道下遺跡は、5月16日より遺跡範囲の工事予定部分に重機で南北に5本のトレンチ(1.8m×110m 1本・1.8m×290m 4本)を設定した。遺構の検出作業の結果、遺構・遺物が少ないことが確認された。このことから、溝跡・土坑等が集中している30～36－C～Eグリッドまでの約1,800平方mを調査対象区とし、精査を行った。6月24日に遺構精査を終了し、完掘状況の平面図(20分の1)を作成し、7月1日に終了した。

後田遺跡は、5月10日から人力によりトレンチ(1m×2m)調査を行った。その後、5月26日～6月16日まで分布調査とトレンチ調査の結果を基に、重機で表土から30～40cm程掘り下げた。次に5m×5mのグリッドを設定し、面整理を行った。その結果、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・川跡等、古墳時代～近世までの多数の遺構が確認された。A区はB区に比較して遺構が多かったため、やや時間がかかり、8月8日まで調査を行い、その後、B区の調査を行った。その間、猛暑が続いたため調査区内の土は堅くしまり、面整理や遺構精査は困難を極めた。

遺構精査、実測図作成、写真撮影等を並行して実施し、8月9日(A区)、9月7日(B区)に空中写真撮影・測量を行った。9月1日に58名の参加を得て、現地説明会を行い、9月8日、両遺跡の83日間の調査を終了した。

表－1　後田遺跡・大道下遺跡　発掘調査工程表



II　遺跡の立地と環境

1　遺跡の立地

後田遺跡・大道下遺跡は、鶴岡市街地から南西方約2.5kmにある大泉地区の鶴岡市大字寺田字大道下、同後田にあり、庄内平野の南西端に位置する。この地区は、東方を北流する赤川と母狩・金峯山地西斜面から流下する大戸川、大山川、湯尻川、千安川等によって形成され、南から北へ、標高17m前後から12m前後に緩やかに傾斜する沖積地である。

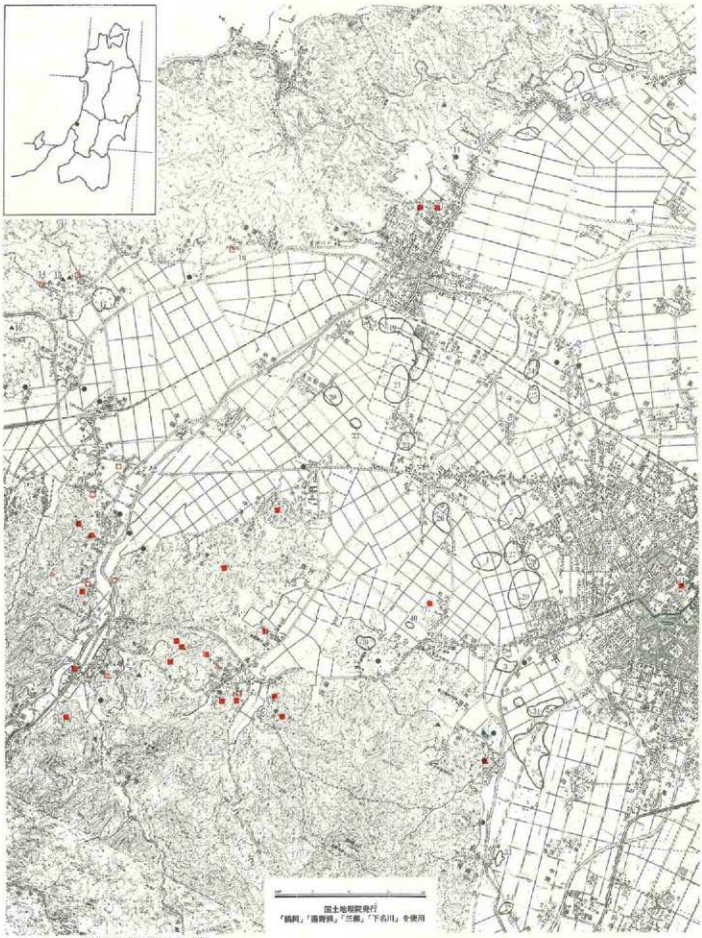
地形は、現在は耕地整理で水田となり平坦化されているが、かっては自然堤防・後背湿地・扇状地・河間低地で構成され、起伏に富み微高地、池沼、湿地が複雑に入り込む景観を呈していたと推定される。本遺跡は、そのなかの標高15～16mを測る微高地の自然堤防上に立地する。近くの山上から眺望すると、まさに「大泉」の地名にふさわしく、水田が湖沼に、集落が島々と化したと思われる風景が眼前に展開する。このような地理的環境は水稲農耕発展の適地であり、古代から開発が進み現在も穀倉地帯といわれる庄内平野の中核的農業地区となっている。

2　歴史的環境

大泉地区とその周辺には、旧石器時代から中世にかけて各時代の遺跡が数多く分布している。第1図は、本遺跡年代とかかわる古墳時代から中世の遺跡の分布状況を示したものである。まず、本遺跡の西・北方約5km以内に助作・矢馳A・矢馳B・清水新田・山田・畑田・中野等古墳時代の集落跡が続き、それらを見下ろすように山麓に菱津古墳がある。菱津古墳は、庄内で唯一明かな古墳である。東方には、月記・大東・地ノ内・塔の腰等平安時代から中世の集落跡がある。さらに北方約7km、庄内の名刹善寶寺がある下川地区には、西谷地・五百刈等古墳時代から中世のまとまった集落跡がある。そして、これらの集落に須恵器・赤焼土器を供給したと思われる荒沢・越中台等平安時代から鎌倉時代の窯跡が、南西を取り囲む金峯・高館山地の山麓に点在する。つぎに、南西方約5km、古来北陸と庄内を結ぶ田川街道の出入り口で要衝の地であった湯田川・田川地区には、多くの城館跡と墳墓、経塚がある。田川館跡、七日谷墳墓、湯田川経塚等である。平安時代末期から鎌倉時代初頭に奥州藤原氏の家臣田川太郎行文が領有したところで、田川館跡は田川氏の居館跡と推定されている。近くの山腹に、源頼朝の部将に討たれた彼の墓と伝えられる五輪塔がある。

さて、後田遺跡の河川跡から笹塔婆・呪符・人形等の祭祀遺物が多数出土した。平成元年度発掘調査が行われた隣接の月記遺跡でも、同一と考えられる河川跡から祭祀遺物が数点出土している。河辺での祭祀後廃棄されたものか、寺院等での祭祀後廃棄され流れてきたものか検討を要するが、歴史上の信仰環境を念頭におく必要があろう。南方約1km、井岡の和田岡に井岡寺と遠賀神社がある。井岡寺は、大日山と号し真言宗寺院で、平安時代の創建と伝えられ、盛時には後田遺跡周辺を寺領とし塔の腰から30有余の堂宇が並ぶ霊地だったという。遠賀神社の創建年代は不祥であるが「延喜式」にみえる田川郡三社の「遠賀(オガノ)神社」に比定される古社である。また、南西方約2kmに森山があり、庄内随一のモリ供養の山として新潟・秋田両県をも信仰圏として今も賑わいをみせている。

後田遺跡



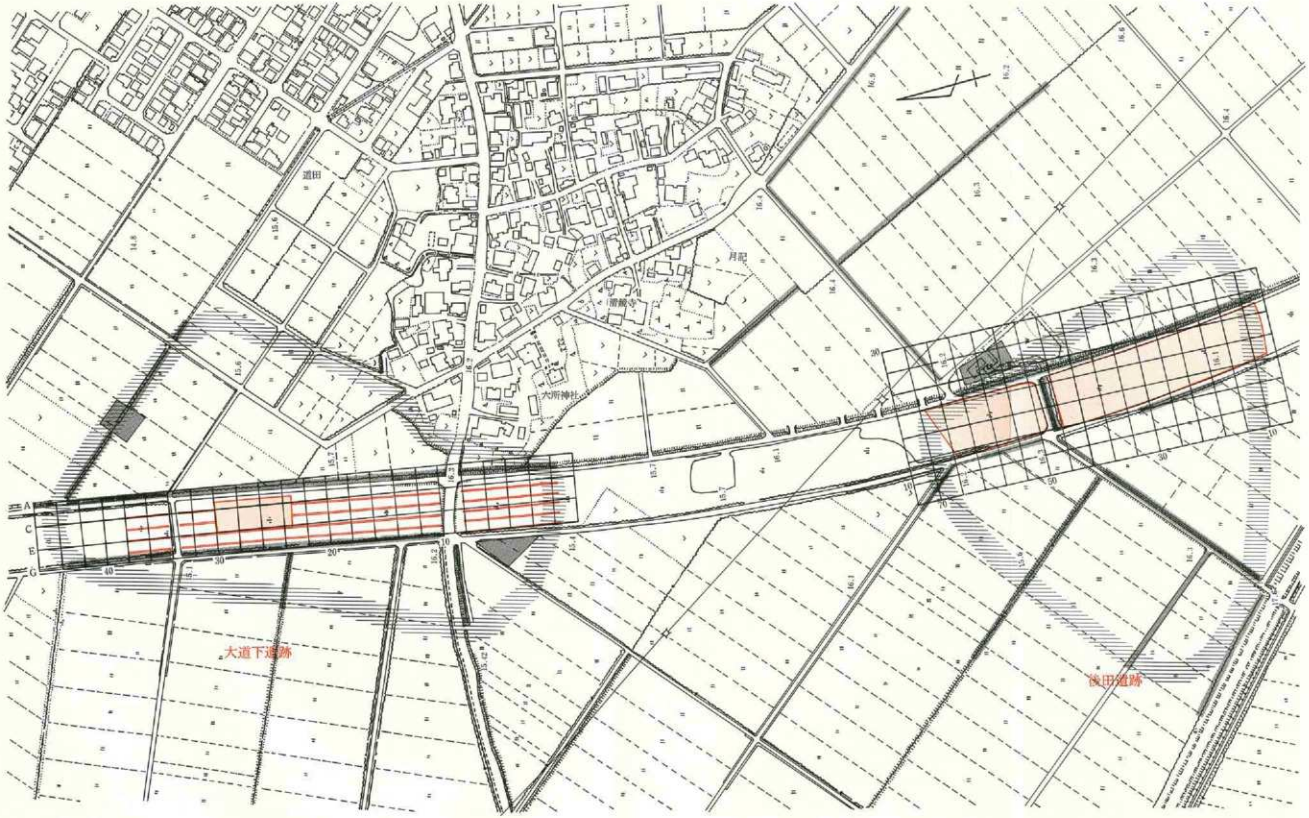
遺跡位置及び周辺の遺跡(古代～中世)

1後	田	2大	道	下	3塔	の	腰	4西	谷	地	5西	ノ	川	6樋	渡	7越	中	台	8西	田	面	9八	幡	田	10五	百	刈	11駒	繋	12尾	浦	城
13大	山	櫻	14金	山	B	15金	山	A	16荒		沢	17山		口	18菱津古墳	19山		田	20清水新田			21矢	馳	A	22矢	馳	B	23助	作	24中		野
25畑		田	26岡	地	田	27月		記	28大		東	29池	ノ	内	30三ヶ水口	31島	居	上	32天	王	原	33青	龍	寺	34濠		原	35地蔵堂山		36田	川	館
37七	日	台	38湯	田	川	39岡	山	A	40井		岡	41鶴ヶ岡城																				

● 集落跡　▲ 窯跡　□ 墳墓　■ 城館　△ 経塚

昭和63年度以降分布調査及び発掘調査が行われた遺跡

第１図　遺跡位置及び周辺の遺跡(1　:　50,000)


道田
月記
大所神社
大道下遺跡
後田遺跡
A
C
E
G
分布調査及び
平成２年度発掘調査範囲
調査区
グリッド
遺跡範囲
0
100m
1 : 4,000

第２図　調査区概要図

Ⅲ　後田遺跡

1　遺跡の概要

発掘調査前のこの地は圃場整備による区画が整然と組まれていたが、明治26年に作成された旧字切図(第３図)によると、当時は現在よりもかなり細かい区画が成されていたことが窺われる。また、Ａ区にあたる部分には東西に走る溝が認められ、これはＳＤ３溝跡に相当するものと考えられる。この溝の他にも大小の溝が交錯して認められるが、現在まで残存していた溝は認められない。

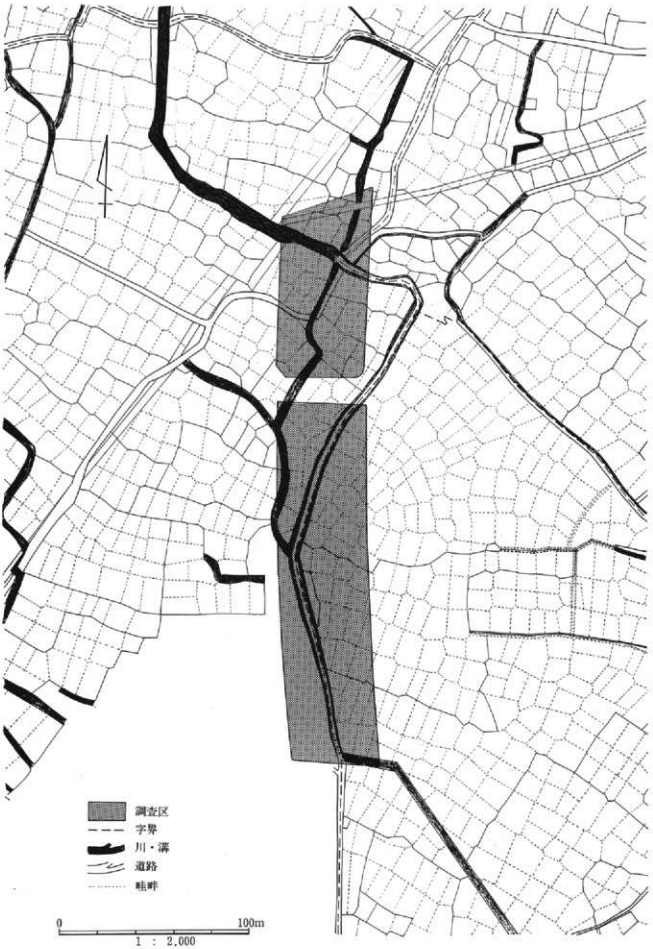
表土から検出面までの深さはＡ区で50㎝、Ｂ区で40㎝を測る。Ａ区は暗灰黄色微砂の地山の上に10㎝程の炭化粒を含む包含層が堆積する(第26図)。Ｂ区は表土のある部分とない部分があり、20㎝程の包含層が堆積し、地山には白色の火山灰が粒状に混入する(第19図)。また、遺構の覆土は、平安～中世は黒褐色から黄灰色等を基調とするシルトからなり、地山との識別が容易であるが、古墳時代は地山の土に炭化粒が分布するという識別が非常に困難な土である。これは、この辺り一帯の古墳時代の遺跡に共通するもので、度重なる河川の氾濫による堆積のためと考えられている。

2　遺構と遺物の分布

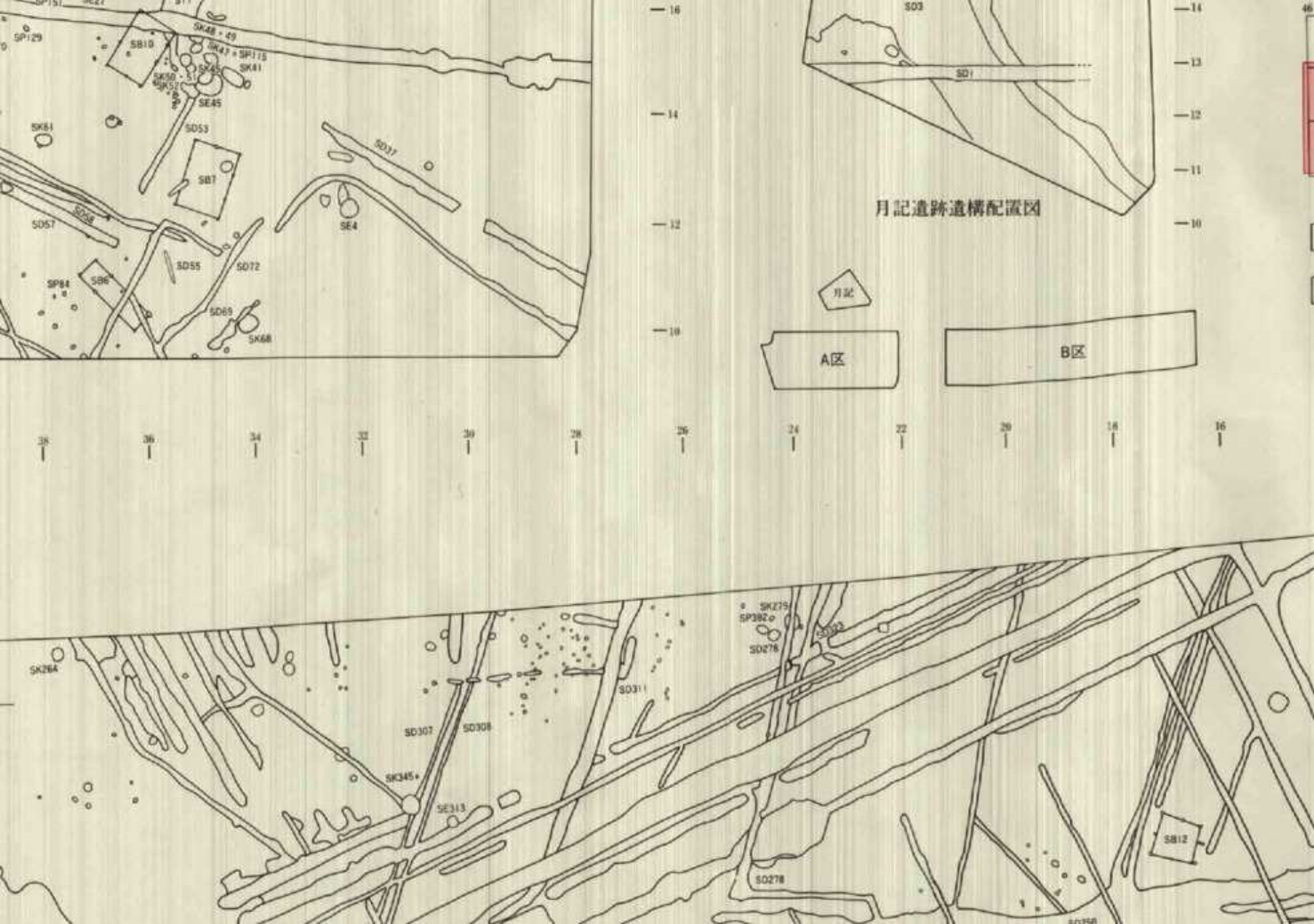
遺構は竪穴住居跡１軒・掘立柱建物跡５棟・井戸跡７基・土坑44基・溝跡97条・ピット106基が検出された。その殆どはＡ区に集中しており、Ｂ区は希薄である。Ａ区を概観すると北側にＳＤ３が調査区を東西に横断するように検出され、それと平行するように３棟の掘立柱建物跡が認められる。また、中央部分には竪穴住居跡・土坑・井戸跡等が集中して検出されている。ＳＤ３以外の溝跡は幅が狭く浅いものばかりで規則性は認められない。Ｂ区は調査区北側に河川跡、東側に数条の細い溝跡が認められ、それを切るように無数の溝跡が南東から北西にまたは南西から北東に走っている。これらの溝跡には近代のものや暗渠等が含まれる。溝跡が検出されない部分にはわずかな数の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑等がＡ区よりも良好な状態で残る。

それぞれの遺構からの遺物の出土状況は、あまり良好な状態とは言えない。遺構底面からの出土が少なく、殆ど堆積土中に含まれるものである。そのため、古代の土器と中世陶磁器が混在している遺構が多く一括性に乏しい。しかし、ＳＴ１住居跡の床面から土師器が良好な状態で検出されたり、ＳＫ359土坑のように火山灰が含まれる覆土中に良好な赤焼土器の坏が出土している例も若干認められる。遺物の分布をグリッド毎に見ると、10～17－63～66と14～17－55～66グリッドに多く認められ、ほぼ遺構の密度に比例する。またその中でもＳＤ３溝跡からの出土量が全体の約70％を占めている(第４図)。

調査区東側には「月記遺跡」が隣接しており、平成元年度発掘調査の際に南北に走る溝跡が検出されている(第４図)。溝跡の規模や出土遺物がＳＤ３溝跡にほぼ同様であるため、ＳＤ３につながるものと推定される。



第3図　後田遺跡周辺の字切り図　明治26年


SP129
SK48・49
SB10
SK47・SP115
SK41
SK50・51
SK52
SK45
SE45
SK81
SD53
SD37
SB7
SD58
SD57
SE4
SD55
SD72
SP84
SB6
SD69
SK68
SD3
SD1
月記
A区
B区
SK264
SD311
SD307
SD308
SK345
SE313
SK275
SP382
SD278
SB12
SD278

月記遺跡遺構配置図

3　検出された遺構

（1）竪穴住居跡

ＳＴ１(第５図)　57～58－16グリッドに位置し、北西側を近代の溝に切られる。かろうじて残存する東辺は、約3.7mを測り、平面は正方形と推定される。主軸方向はＮ－25°－Ｅである。検出面から床面までの深さは10cm前後で覆土は自然堆積と考えられる。覆土は２層からなり、炭化粒と土師器片を含む。この炭化粒は、周囲にも分布しておりその範囲で土師器が認められるが、周囲に同時期と考えられる遺構は検出されなかった。床面はほぼ水平で、貼床を施した痕跡はなく、壁は緩やかに立ち上がる。南西側には保存状態の良い土師器の坏・甕・壺等が集中して出土した。小ピットが５基検出されたが、深さ５cm程で支柱穴とするには規模が小さい。炉跡・貯蔵穴等の施設は認められない。

北辺はＳＤ31に切られており、ここからは須恵器や珠洲系陶器が出土している。a－a'の断面においては確認できなかったため、検出段階で既に底面に達していたと考えられる。ＳＴ１南西側に僅かに残る溝はＳＤ31の繋がりと考えられる。

（2）掘立柱建物跡

ＳＢ６(第６図)　57～59－10～11グリッドに位置し、ＳＤ56・71に切られる。東西３間、南北１間の東西棟で、梁行は2.1m、桁行は7.2mを測る。かなり細長い建物のため、住居以外に使用されたと考えられる。主軸方向はＮ－47°－Ｅである。

各柱穴は、直径20～50cmの円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは10cm前後と浅い。覆土は、ほぼオリーブ褐色砂質シルトを基本としており、炭化粒を含む１～３層からなる。遺物は、土師器・須恵器・赤焼土器が出土している。柱間は梁行・桁行ともに約2.1mを測る。ＥＰ214・87間、ＥＰ89・88間の柱穴が検出できなかったが、ＳＤ56・71に切られたものと推定される。周囲には、ＳＰ85・86・213等が認められ、ＳＢ６との関連が考えられる。ＳＰ85・86はＳＢ６の柱穴とほぼ同様であるが、ＳＰ213は４層からなり、しっかりと掘り込まれている。

ＳＢ７(第７図)　55～57－12～13グリッドに位置する。東西３間、南２間の東西棟であるが、規模は梁行4.4m、桁行6.4mを測り、柱穴間は1.9～4.3mと一定していない。西辺ＥＰ92～93間には柱穴が認められなかった。主軸方向は、Ｎ－72°－Ｗである。ＥＰ91と92の間にはＳＤ80が認められ、柱穴を確認することができなかった。

各柱穴は直径15～30cmを測り、ほぼ円形を呈する。検出面からの深さは全て５～10cmと浅く、覆土は黄灰色または黒褐色を基調とする砂質シルトの１層からなる。ＥＰ91から赤焼土器が出土している他は、遺物の出土は認められない。

周囲からは、ＳＤ80・ＳＫ81・ＳＰ209・210が確認された。ＳＤ80とＳＫ81は深さ10cm程で、覆土は黒褐色シルトを基本とする。ＳＰ209・210は深さ23cmを測り、やや深く掘り込まれており、黒褐色微砂を基本とする２～３層からなる。

ＳＢ８(第８図)　62～63－12～13グリッド、ＳＧ３のすぐ南側に位置する。東西２間、南北１間の東西棟で、梁行3.75m、桁行4.85mを測る。桁行の柱穴間は、1.8～2.5mと一定せず東側に比較して西側が狭い。主軸方向はＮ－74°－Ｗである。各柱穴は直径20～35cmの円形または楕円形を呈し、深さは15～40cmとＳＢ６・７に比較して深い。覆土は褐色微砂を基本とする１～３層からなる。遺物の出土は認められない。

ＳＢ９(第８図)　63～64－12～13グリッドに位置する。ＳＢ８より軸がやや北に傾き、ＥＰ112・113がＳＢ８の北東隅に入りこんでいる。梁行は2.1～2.4m、桁行は4.6～4.8mを測り、東西・南北共に１間である。主軸方向はＮ－45°－Ｗである。

各柱穴の平面形は直径30～55cmのほぼ円形を呈し、ＳＢ８に比較してかなり大きい。深さは南側は10cm前後であるが、北側は15～20cmとやや深めである。ＥＰ113は112に切られているが、柱穴の規模からＥＰ113がＳＢ９の柱穴と考えられる。覆土はオリーブ褐色シルトを基本とする１または２層からなり、若干炭化粒を含む。遺物はＥＰ110と111から赤焼土器片が数点出土している他は認められない。

ＳＢ８とＳＢ９の新旧関係は判然とせず、ＳＤ３とほぼ平行するように確認されたことは興味深い。

ＳＢ10(第９図)　57～59－14～15グリッド、ＳＫ群の北側に位置する。東西３間、南北２間の東西棟で、東辺の柱穴２基が確認できなかったが、東側の新しい溝に切られたものと考えられる。またＥＰ112はこの溝を跨いで位置する。規模は梁行3.75m、桁行６mを測り、柱穴間の距離は1.6～3.0mと一定していない。主軸方向はＮ－52°－Ｗである。概観すると、ＳＤ31・33・64に囲まれており、これらの溝が区画溝であった可能性も考えられる。

各柱穴の直径は15～28cmの円形または楕円形を呈し、深さは５～10cmと小規模である。覆土は、ＥＰ116～120はオリーブ褐色または黒褐色の砂質シルトの１層からなり、ＥＰ121・122は２層からなる。ＥＰ117には、柱痕の一部と考えられる腐植した木が含まれる。出土遺物は須恵器・赤焼土器が大半を占めるが、ＥＰ118からのみ珠洲系陶器が出土している。

周囲には、ＳＰ191・196が検出された。直径40cmの円形を呈し、深さは20cm程である。ＳＰ196から土師器・内黒土器が出土している。

ＳＢ12(第10図)　Ｂ区の南側、16～18－14グリッドに位置する。Ｂ区唯一の掘立柱建物跡である。東西、南北共に２間で、北辺4.1m、南辺3.6m、東辺3.85m、西辺4.05mのやや台形を呈する。柱穴間の距離は1.5～1.9mと一定していない。主軸方向はＮ－75°－Ｗである。ＥＰ409と413はそれぞれ若干外側に張り出している。

各柱穴の直径は25～37cmを測り、ほぼ円形を呈する。深さは15～20cmとＡ区の掘立柱建物跡に比較すると深く、暗灰色を基調とするシルトまたは粘土の１～３層からなる。また、柱痕が腐植したと考えられる有機物も認められる。ＥＰ409と411からは柱痕が確認されている。土器の出土は認められないが、Ａ区の掘立柱建物跡に比較すると平面形や柱穴の深さ等が異なるため、時期を異にするものと考えられる。

（3）井戸跡

ＳＥ2(第11図)　62－17グリッド、ＳＤ3のすぐ南側に位置する。掘り方は直径1.7m前後のやや歪な円形を呈する。ほぼ中心に井桁が組まれ、井桁内は東西70cm、南北60cmを測る。井桁の外側には検出面から40cm程下層に縦板が認められ、添板の役割も果たしていたものと考えられる。側面の状態から、縦板を10cm程打ち込んだ後、井桁を設置したことが窺える。横桟・井筒等の施設は、認められない。横板は長さ1.1m程、幅20cm前後を測り、4～5段に組まれている。縦板は長さ60cm、幅15cm程で下部のみ削られている。

検出面から底面までは85cmほどで、井桁内の①・②層に集中して土器または井戸枠の木材片の出土が認められる。①層には赤焼土器の杯が良好な状態で数点出土しており、②層からは墨書土器・内黒土器・珠洲系陶器片等が出土している。最底部の湧水層は、砂層からなる。

ＳＥ4(第12図)　54－12グリッド、細い溝跡の屈曲部に位置する。掘り方は直径2.1m程のほぼ円形を呈する。井戸枠は、掘り方に比較して規模が小さく、60cmの方形に縦板が設置されている。縦板の長さは1.1m、幅は10～15cm程を測り、一辺に5枚程設置されている。60cm程下層からは、4cm幅の角材を使用した目違いほぞ組みの横桟が検出された。平面は、土圧からやや北側に張り出している。また、南西隅には直径7cmの杭が打ち込まれており、縦板の押さえに設置されたものと考えられる。

検出面からの深さは、1m前後を測り、底面は約1.1mの円形を呈する。井戸枠内の覆土は②層は自然堆積、①層は人為堆積と考えられる。遺物は、須恵器片・赤焼土器片・木材片が出土した。

ＳＥ27(第13図)　59－16グリッド、ＳＥ28の西側に位置する。掘り方は一辺1m程の隅丸方形を呈する。検出面から30cm程下に直径60cm、高さ60cmの曲物が設置され、若干下がった所に横桟が一辺80cmの方形に組まれている。横桟は4cm程の角材で目違いほぞ組みである。検出面からの深さは、1m程を測る。曲物上部の堆積状況から、上層にも何らかの形で井戸枠が組まれていたが、廃絶時に抜き取られたことが窺われる。堆積土中には、その残片と思われる板材が数点認められる。井戸枠内の①・②層からは、須恵器・赤焼土器片が出土しており、掘り方1層からは須恵器・赤焼土器・中世陶器片が出土している。

ＳＥ28(第13図)　59－16グリッド、ＳＥ27の東側に位置する。掘り方は一辺0.8m程の隅丸方形を呈する。検出面から35cm程下に横桟が一辺60cmの方形に組まれ、そのすぐ下に直径50cm、高さ60cmの曲物が設置されている。横桟は、5cm程の角材で目違いほぞ組みである。検出面からの深さは、1m程を測る。曲物上部の堆積状況から、ＳＥ27同様、上層にも井戸枠が存在したものと考えられる。しかし、ＳＥ27と異なり、板材は殆ど認められない。井戸枠内の①層からは赤焼土器片、掘り方からは須恵器・赤焼土器・珠洲系陶器・青磁片が出土している。また、③層下部には、礫が数点認められた。

ＳＥ27とＳＥ28は掘り方の規模・井戸枠形態・堆積状況・出土遺物等から同時期に設置され、同時期に廃絶されたものと考えられる。

ＳＥ30(第14図)　59－16グリッド、ＳＥ27と28の南側に位置する。掘り方は一辺１ｍ前後の歪な隅丸方形を呈する。検出面から60㎝程下がった所に直径・高さ共に45㎝の曲物が設置されている。掘り方の底面までは1.1mあり、３㎝程浮いた状態で曲物が設置されている。また、曲物上部の堆積状況から、ＳＥ27･28同様、井戸廃絶後に上部の井戸枠が抜き取られたことが窺われる。曲物上層に井戸枠の残片が数点認められることや、④層に有機物・木片が含まれていることからも窺える。

枠内覆土の①～③層はオリーブ褐色シルトを基本とし、それぞれ異なる土をブロック状に含むことから人為堆積と推定される。ここからは、須恵器・赤焼土器片が出土しており、掘り方の１・２層からは土師器・須恵器・赤焼土器・珠洲系陶器片が出土している。また、掘り方外最下層は灰色砂からなる涌水層と考えられる。

横桟は検出されなかったが、ＳＥ27・28とほぼ同時期に設置され、廃絶されたものと考えられる。

ＳＥ45(第15図)　54－12グリッド、土坑群のほぼ中心に位置する。掘り方は東西1.8m、南北1.4mの歪な楕円形を呈する。東側は15㎝程なだらかに傾斜している。一辺75～80㎝の方形に縦板が組まれ、縦板の内側には検出面から20㎝下がった部分と60㎝下がった部分に横桟が二段設置されている。また、底面には井筒として曲物が設置されている。

縦板は、長さ50㎝～1m、幅は3～16㎝と一定せず、ほぼ２列に組まれていることから、外側の縦板は内側の隙間をふさぐ役割を果たしていたものと考えられる。南・北・西側縦板の残存状態は良好であるが、東側は土圧により若干外側に押し出されている。横桟は、長さ７～８㎝、厚さ３～６㎝の角材で目違いほぞ組みである。下部横桟の方が上部に比較して若干厚い。また、曲物は直径38㎝、高さ30㎝を測る。

枠内の覆土は褐色粘質シルトを基本とし、それぞれ炭化粒を含む。遺物は、井戸枠内・掘り方共に土師器・須恵器・内黒土器・赤焼土器・珠洲系陶器が出土している。

ＳＥ313(第14図)　31－15グリッド、Ｂ区の中央よりやや北側に位置し、Ｂ区唯一の井戸跡である。掘り方は直径1.4m程の不整円形を呈する。井戸枠の底面直径は約60㎝を測り、掘り方に比べかなり小規模である。やや、中心より北東側に縦板が円形に検出された。22枚出土した縦板は、長さ30～90㎝、幅10～13㎝と一定せず保存状態は悪い。板と板の間にかなり隙間があることから、他の板材は廃絶時に抜き取られたものと考えられる。また、東側に比較して、西側は上部が土圧によって内側に傾いている。井戸枠のほぼ中心には、縦板より若干短い杭が２本立てられていた。井戸廃絶の際の祭祀に関わるものであろうか。他に横桟・井筒などの施設は認められない。検出面からの深さは65㎝程で土器の出土は認められない。

平面形・井戸枠形態・残存状況などから、Ａ区の井戸とは、時期が異なるものと考えられる。

（４）土坑

Ａ区から25基、Ｂ区から19基検出されたが、Ａ区に比較するとＢ区の土坑は遺物の保存状態が良好である。平面は直径50～248㎝の円形または楕円形で、深さは10～62㎝程である。Ａ区の

55～57－14～15グリッドには11基の土坑からなる土坑群が検出された。これらは、それぞれ切り合っており、時期を変えてつくられたと考えられる。全ての土坑から土師器・須恵器・内黒土器・赤焼土器等の遺物が出土しているが、ＳＫ47からは中・近世陶磁器片、ＳＫ51からは中世陶器片が出土している。

ＳＫ61・264・359からは２次堆積ではあるが火山灰が検出され、理化学分析の結果、十和田a(915年)と推定された。これらの火山灰は、比較的上層で確認されていることから、遺構は915年以前の所産と考えられる。

ＳＫ23(第16図)　62－16グリッド、ＳＥ２の西隣に位置する。直径1.8m程の不整楕円形を呈し、検出面からの深さは、30cmを測る。２層からは木材片、底面からは赤焼土器・黒色土器・笹塔婆が出土している。笹塔婆や状態の良い土器が出土していることから、墓壙の可能性が考えられる。

ＳＫ68(第19図)　56－10グリッド、Ａ区西側壁際に位置する。ＳＤ69と若干重複しているが、セクションよりＳＤ69の方が新しいことが確認された。ＳＫ68は、南北1.9mの楕円形を呈し、検出面からの深さは30cmを測る。底面はほぼ水平で、１層からは須恵器・赤焼土器・木材片など多数出土している。

ＳＫ76(第17図)　62－13グリッド、ＳＤ57に切られるように位置する。直径1.2m程の不整円形を呈し、東側が若干突出している。検出面からの深さは35cmを測り、ＳＤ57構築途中に板材が検出された。板材が方形に組まれていることから、井戸跡の可能性が考えられるが、検出面からの深さ等を考え合わせると判然としない。板材の他には、須恵器・赤焼土器が出土している。

ＳＫ264(第18図)　38－18グリッド、Ｂ区の北側、東壁際に位置する。直径1.2mのほぼ円形を呈し、丸底に掘られている。検出面からの深さは40cmを測り、覆土には火山灰が多量に含まれることから、ＳＫ61とほぼ同じ時期に堆積したものと推定される。６層からは直径15cm程の曲物(腐植が著しく遺物としての実測は不可能)と、８層からは「亨」と書かれた墨書土器が出土している。

ＳＫ279(第19図)　25－18グリッド、Ｂ区のほぼ中央部東壁際に位置する。東西1.6mの楕円形を呈し、南端を小ピットに切られている。ＳＫ279よりも新しいと考えられるＳＤ278がほぼ中央を通っている。検出面からの深さは50cmと比較的深く、底面の狭いすり鉢状を呈する。遺物は１～３層中に、須恵器・赤焼土器片が多数出土している。

ＳＫ359(第18図)　21－11グリッド、Ｂ区の中央よりやや南側の西壁際に位置する。今回の調査でもっとも保存状態の良い土坑であり、土器も多数出土している。直径2.2mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは40cmを測る。底面は、ほぼ水平に掘られている。土師器・赤焼土器・木製品が出土している。覆土の上層には火山灰が含まれており、土師器坏が良好な状態で多数出土している。

（5）柱穴(第20図)

A区から87基、B区から19基検出され、平面は直径11～49cmの円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは5～51cmを測る。A区の各SB周囲やB区の中央東側に多数分布している。組み合わせることはできなかったが、SP124・129・170・151・222からは杭・板材等が検出されており、建物跡の存在が推定される。

SP84　60－10グリッド、SB6の北側に位置する。直径30cm程の円形を呈し、深さは18cmを測る。底面からは赤焼土器塊の底部が立った状態で出土している。

SP124　60－17グリッド、A区東側壁際に位置する。直径24cmの楕円形を呈し、深さは17cmを測る。柱痕と考えられる直径5cm程の丸杭が検出された。

SP129　60－15グリッドに位置し、直径45cmの楕円形を呈す。深さは8cmを測る。幅5cm、長さ20cmの板材が南側に倒れるように検出された。

SP170　61－15グリッドに位置し、直径22cmの円形を呈す。深さは10cmを測り、東壁に沿って角材が検出された。

SP151　60－16グリッド、SE27の北側に位置する。直径35cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。幅15cm、長さ35cmの角材が検出された。

SP222　59－17グリッド、SE30の南東側に位置する。直径24cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。底面から木材が数片検出されている。

SP392・417　25－18グリッド、SK279の北側に位置する。SP392はSP417に切られている。SP392は、直径25cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。SP417は、直径30cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測り、底面が北側に入り込んでいる。

（6）溝跡

溝跡は97条検出されたが、かなり新しいものも含まれる。

SD3(第21図～第26図)　62～67－9～17グリッドに位置し、A区北側を南東から北西に横断している。本遺跡で最も遺物の出土量の多い遺構である。16～17－63～64グリッドにおいては調査前まで残存していた溝、北東側は2本の暗渠に切られている。また、北岸を新しい溝(SD3c)に切られておりさらに検出時は確認することができなかったが、62～64－16～17・65～66－11グリッドの断面において別の溝(SD3b)が確認された(第22・25・26図)。尚、最も旧いと考えられ、SD3の主体をなすと考えられる溝をSD3aとする。

調査は、グリッドに沿って4ヶ所のトレンチ(5m幅)を設定し、残りの部分は断面を確認しながら一層ずつ掘り下げた。a・b・c共に、土層断面と底面で確認することとし、同時に掘り下げ、北東側8mについては、調査の工程上やむを得ず残すこととした。土層断面より溝の新旧関係はa→b→cと確認された。以下、旧い順に概略を述べる。

SD3aの幅は場所によって多少異なるが10m前後を測り、総延長45m程である。壁は緩やかに傾斜し、底面はほぼ水平である。土層断面は、各トレンチの壁8ヶ所で確認した。東壁においては、基本層序も併せて確認した(第26図)。この結果、覆土は主に黒色または黒褐色シルトを

基調とする1～4層からなり、自然に堆積していった様子が確認された。また、レンズ状堆積でないことや、砂分が少ないことから流れは緩やかであったと推定される。底面のレベルは14.4～14.8mとあまり変化がないため、流れの方向は判然としない。遺物は1・2層には殆ど認められず、3・4層に多数含まれている。また、2・3・4層中には細かい骨片が無数に含まれていた。

ＳＤ3bは、幅2.2～2.5m、深さ34～45cmを測る。覆土は黄灰色シルトの1層からなり、その堆積状況からＳＤ3aの2・3・4層が堆積した後に掘られたものと考えられる。また65～66－11～12グリッドの部分ではＳＤ3bとＳＤ3cがほぼ同じ位置に掘られたことが窺える。

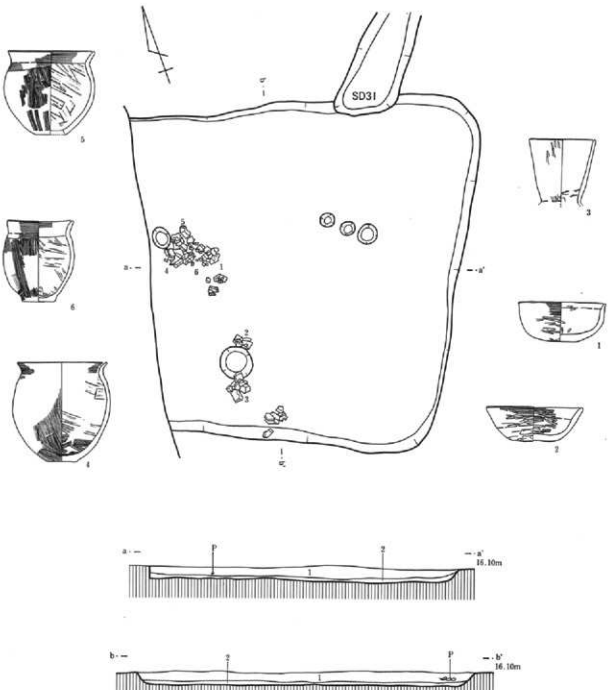
ＳＤ3cは、幅1.5～3.75m、深さ44～85cmを測る。覆土は灰黄褐色シルトを基調とし、それぞれ異なる土が粗いブロック状に入りこんでいることから、人為的に埋められたものと考えられる。堆積状況からＳＤ3aが完全に埋没してから掘られたものと考えられる。14～16－65グリッドからは、壁に沿って杭や横倒しの大型木材が多数検出された。これは、ＳＤ3cに伴うものであり、水のとり入れ口か小規模な橋の痕跡と考えられる。

遺物は、ＳＤ3aからの出土がその殆どを占め、土器・陶磁器・木製品・土製品・石製品・鉄製品など多岐にわたり、古墳時代～近世という幅広い時期の遺物が認められる。また、溝跡ということもあり木製品の出土が目立ち、特に14－63～64グリッドに多く分布している。中でも笹塔婆が多数出土していることは、遺跡の性格や周囲の環境を考える上で特筆される。獣骨もある程度のまとまりをもって確認され、13－65グリッドにおいては大型骨片が出土している。また、16－63グリッドにおいては、箸状木製品68本が、1mの範囲で腐植した植物にからまるように出土している。

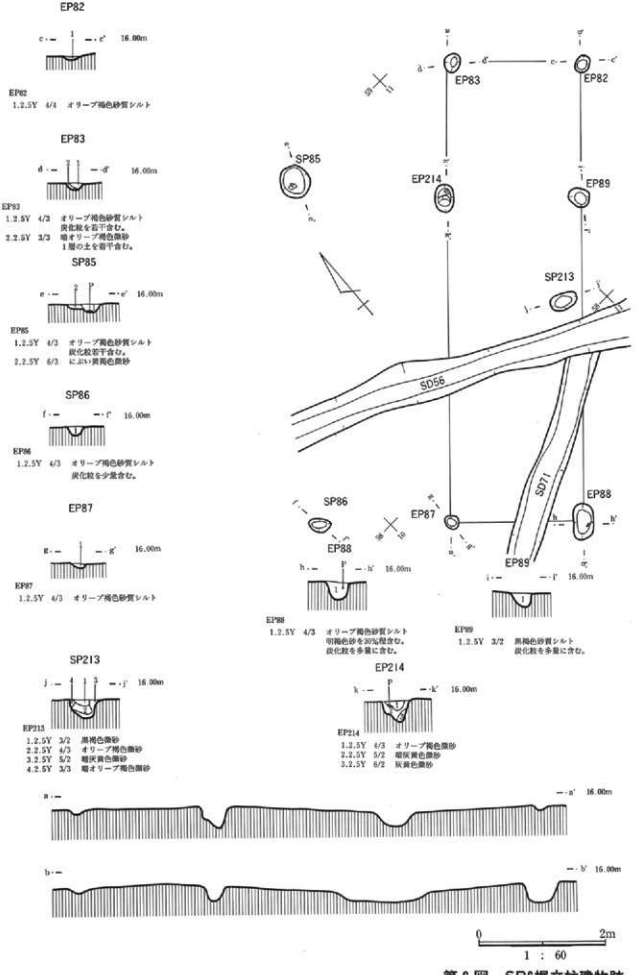
Ａ区のやや東側に位置する平成元年度調査区からも平行に走る2状の溝跡が確認されている(第4図)。これは、ＳＤ3とは異なり東西に流れているが、出土遺物が似かよっていることから、ＳＤ3と一連の溝と考えられる。このことから、ＳＤ3は現在の農道部分で南に屈曲するものと推定される。

ＳＤ271(第27図)　Ｂ区の北端、36～46－12～18グリッドに位置する。深さ50cm前後と浅く、幅は10m程を測る。ＳＤ3との関連も考えられるが、溝の形態・覆土共に異なっており、別遺構と推定される。遺物の出土は少ないが、上層から良好な須恵器が出土している。これらの遺物が溝と時期を同じくするものかどうかは検討を要するところである。また、ＳＤ271を切って確認されたＳＤ272は、旧字切り図においてもほぼ同じ位置に溝が認められることから、近代の溝と考えられる。

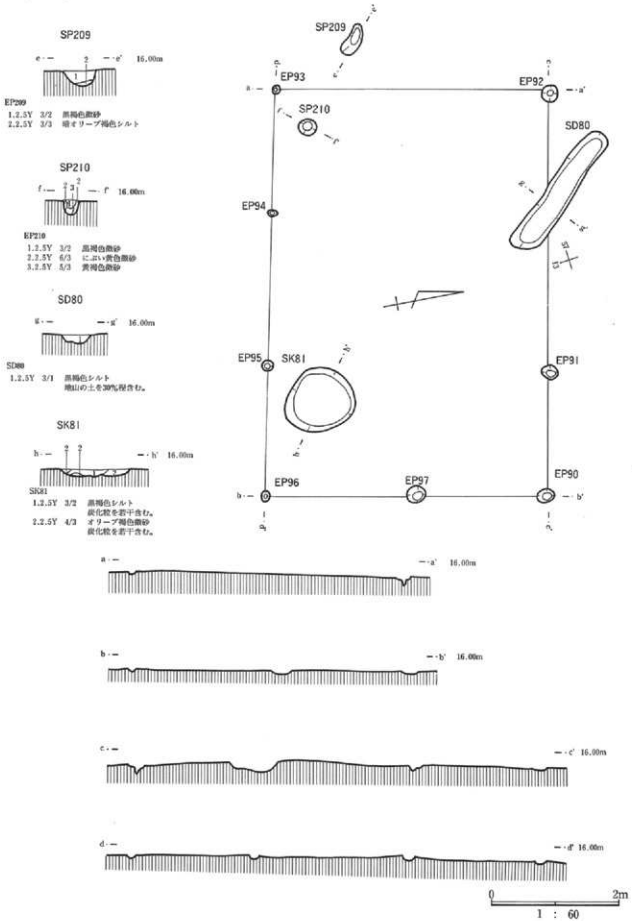
ＳＤ278(第19図)　Ｂ区の東壁から15－24グリッド部分で直角に曲がり、西側に延びる。ＳＤ272にぶつかる部分までは、総延長40mを測る。検出面からの深さは30～40cmを測り、他の溝に比較すると幅は細いが深くしっかりと掘り込まれている。直角に曲がることから、区画溝と考えられるが、周囲に建物跡は認められない。また、ＳＤ307・308・311・333は、東西25～30mの間平行に走っていることから、ＳＤ278と何らかの関連があるものと推定される。出土遺物は少なく須恵器・赤焼土器・近世陶器片が認められる。



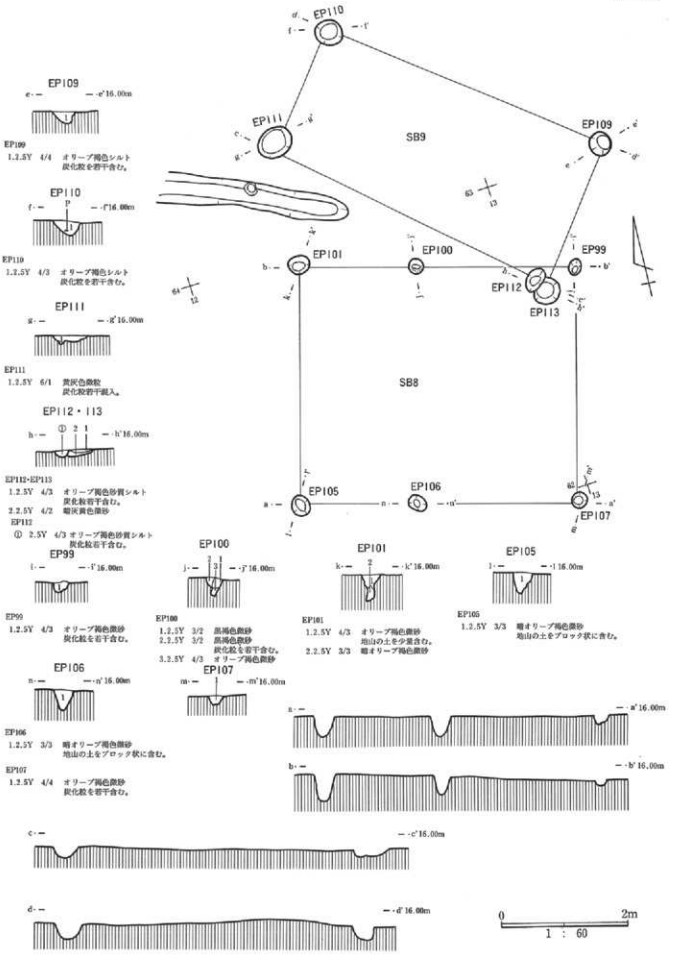
第 5 図　ST1竪穴住居跡



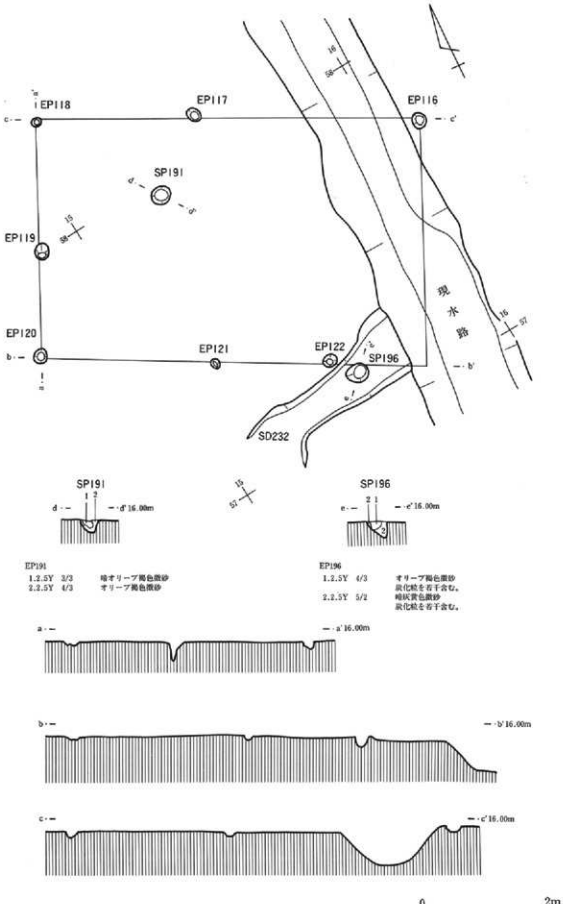
第 6 図　SB6掘立柱建物跡



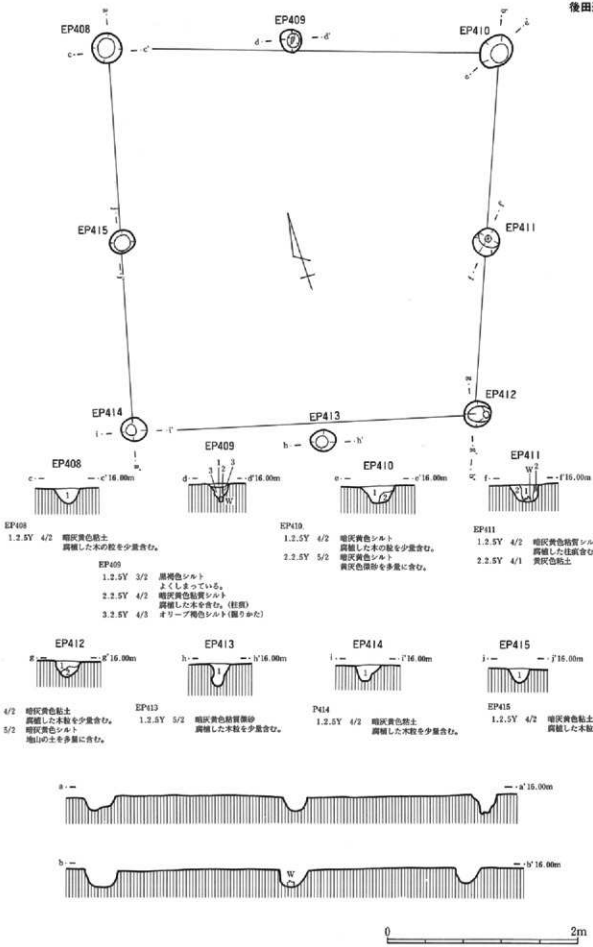
第7図　SB7掘立柱建物跡



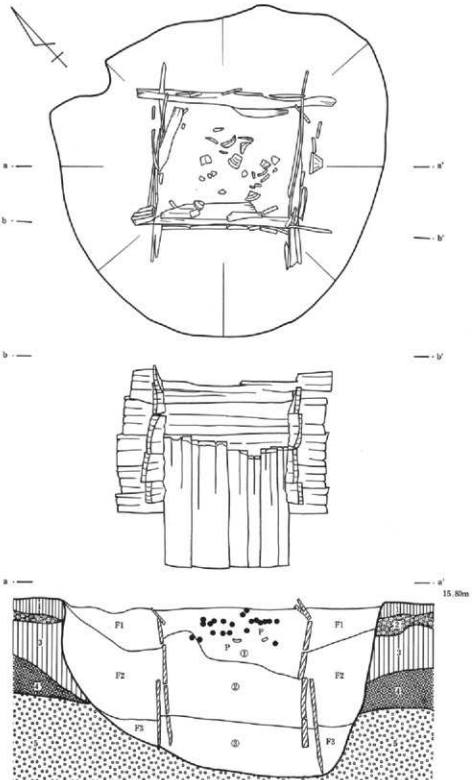
第 8 図　SB8・9掘立柱建物跡



第9図　SB10掘立柱建物跡



第10図　SB12掘立柱建物跡



SE2

井戸掘り方内覆土

F1	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト
F2	10Y 4/1	灰色粘質微砂
		黒褐色シルトを20%程、炭化粒を少量含む。
F3	2.5GY 5/1	オリーブ灰色粗砂

井戸掘り方外覆土

1.	2.5Y 4/1	黄灰色微砂
2.	2.5Y 4/6	オリーブ褐色細砂
3.	10Y 4/1	灰色微砂
4.	10YR 4/6	褐色砂
5.	N 4/	灰色砂

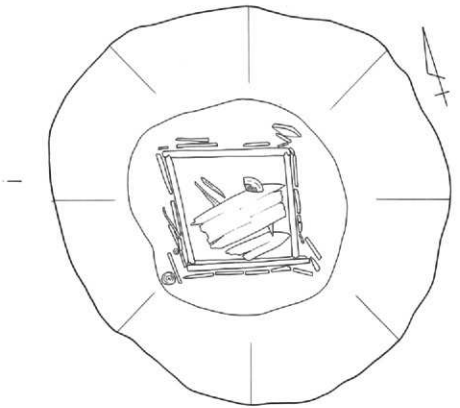
井戸掘り方内覆土

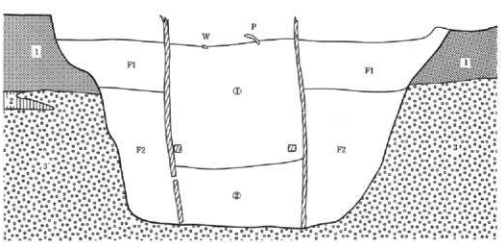
①	2.5Y 4/1	黄灰色粘質シルト
		炭化粒若干、土器片、木材片を多量に含む。
②	2.5Y 5/1	黄灰色粘質シルト
		炭化粒少量、土器片を含む。
③	5BG 5/1	青灰色粗砂

0 1m

1 : 20

第11図　SE2井戸跡





SE4

井戸掘内埋土

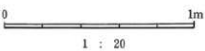
①	10YR 6/6	明黄褐色粘質シルト
		暗青灰色シルトをブロック状に含む。
②	10YR 6/6	明黄褐色砂質シルト
		暗青灰色細砂を含む。
		①層よりやや固りあり。

井戸掘り方内埋土

F1	2.5GY 4/1	暗オリーブ灰色シルト　炭化粒を含む。
F2	2.5GY 7/1	暗オリーブ灰色粘質シルト
		炭化粒を含む。

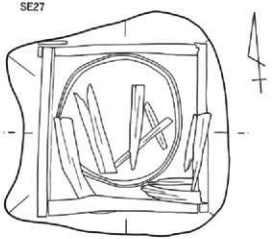
井戸掘り方外埋土

1.	2.5GY 6/1	オリーブ灰色シルト
2.	2.5GY 5/1	オリーブ灰色シルト
3.	2.5GY 6/1	オリーブ灰色砂



第12図　SE4井戸跡

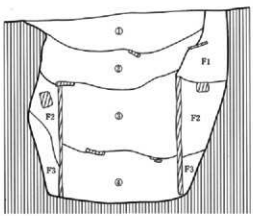
SE27



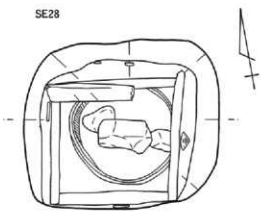
16.00m

SE27
井戸枠内覆土
① 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト
　青灰色砂質シルトをブロック状に含む。
② 2.5GY 5/1　オリーブ灰色砂質シルト
　黒色粘質シルトをブロック状に多量に含む。
③ 2.5GY 4/1　暗オリーブ灰色粘質シルト
　炭化粒を含む。
④ 2.5GY 5/1　オリーブ灰色細砂
　黒褐色粘質シルトをブロック状に含む。

井戸掘り方内覆土
F1 2.5GY 5/1　オリーブ灰色砂質シルト
　黒色粘質シルトをブロック状に含む。
F2 2.5GY 5/1　オリーブ灰色粘質シルト
　黒色粘質シルトをブロック状に含む。
F3 2.5GY 4/1　暗オリーブ灰色砂



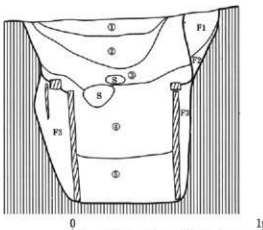
SE28



16.00m

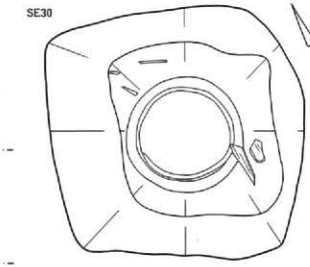
SE28
井戸枠内覆土
① 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト
　青灰色砂質シルトをブロック状に含む。
② 10YR 6/6　明黄褐色砂質シルト
　黒色シルトをブロック状に含む。
③ 10YR 4/2　灰黄褐色粘質シルト
　青灰色砂質シルトをブロック状に含む。
　炭化粒を含む。
④ 10YR 6/6　明黄褐色粘質シルト
　青灰色砂質シルトをブロック状に少量含む。
　炭化粒を含む。
⑤ 2.5GY 5/1　オリーブ灰色シルト
　褐色粘質シルトをブロック状に含む。

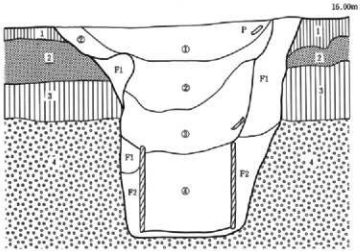
井戸掘り方内覆土
F1 10YR 6/6　明黄褐色砂質シルト
　黒色粘質シルトをブロック状に含む。
F2 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト
　青灰色砂質シルトをブロック状に含む。
F3 2.5GY 5/1　オリーブ灰色砂
　明黄褐色粘質シルトをブロック状に若干含む。



第13図　SE27・28井戸跡

SE30

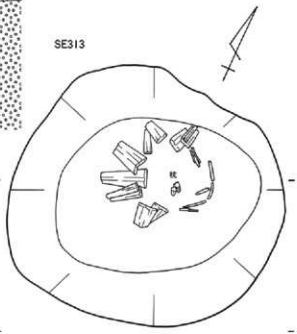


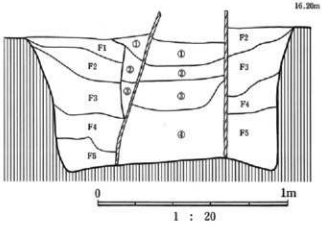


SE313

井戸枠内覆土
① 2.5Y 5/3 黄褐色粘土・黄灰色砂を若干含む。
② 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土
③ 2.5GY 5/1 オリーブ灰色砂
明黄色砂を30%程含む。
④ 10Y 5/1 灰色砂 やや粘性がある。
※①、②層は、酸化した木根を多量に含む。

井戸掘り方内覆土
F1 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土 炭化粒を若干含む。
F2 2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘質細砂
F3 2.5Y 5/1 黄灰色細砂 F5の土を30%程含む。
F4 5Y 5/3 灰オリーブ色砂
F5 7.5Y 4/2 灰オリーブ色粘質細砂
※F1～F3は、酸化した木根を多量に含む。



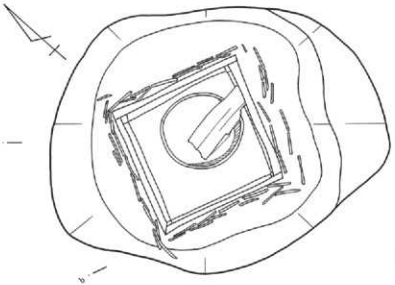


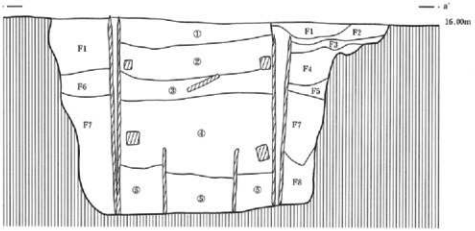
SE30
井戸枠内覆土
① 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト
青灰色砂質シルト粒(小)をブロック状に含む。
炭化粒を含む。
② 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト
青灰色砂質シルト粒(大)をブロック状に含む。
③ 2.5GY 5/1 オリーブ灰色砂質シルト
黒褐色粘質シルト粒(小)をブロック状に含む。
④ 2.5Y 3/1 黒褐色粘質シルト
有機物、木片を含む。

井戸掘り方内覆土
F1 2.5GY 7/1 明オリーブ灰色砂質シルト
炭化粒を含む。
F2 2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色砂質粘土
炭化粒、有機質粒子を含む。

井戸掘り方外覆土
1.2.5Y 6/6 明黄褐色シルト
2.2.5Y 6/6 明黄褐色砂質粘土
3.2.5GY 5/1 オリーブ灰色シルト
4.2.5GY 5/1 オリーブ灰色砂

第14図　SE30・313井戸跡





SE45

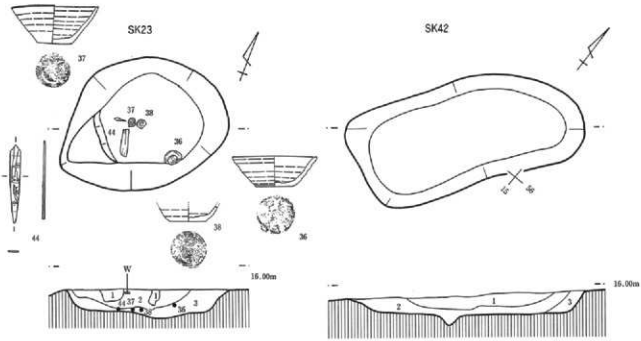
井戸枠内覆土

① 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト　炭化粒を含む。
② 2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト
　明褐色砂質シルトをブロック状に含む。
　炭化粒を含む。
③ 2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト
　明褐色砂質シルト・炭化粒を含む。
④ 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト
　炭化物をブロック状に多量に含む。
⑤ 2.5GY 4/1　暗オリーブ灰色砂質シルト
　②等の土を含む。

井戸掘り方内覆土

F1 10YR 6/6　明黄褐色砂質シルト
　明黄褐色粘質シルトをブロック状に含む。
F2 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト　炭化粒を含む。
F3 2.5Y 2/1　黒色シルト(炭化層)
F4 10YR 6/6　明黄褐色砂質シルト
　暗オリーブ褐色粘質シルトをブロック状に含む。
F5 2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト　炭化粒を多量に含む。
F6 10YR 6/6　明黄褐色砂質シルト
　炭化粒を若干含む。
F7 2.5Y 5/1　黄灰色砂
F8 2.5Y 5/1　黄灰色砂　黒色粘質シルトを含む。

第15図　SE45井戸跡

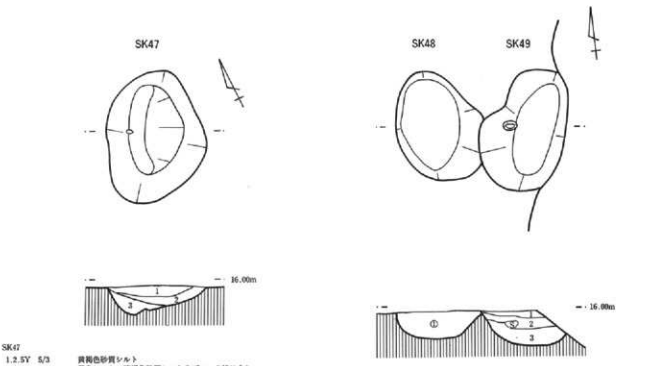


SK23

1.2.5Y 3/2	黒褐色シルト	炭化粒若干、2層の土を10%程含む。
2.2.5Y 3/2	暗灰黄色粘質シルト	炭化粒を少量含む。腐植木根が層状に混入。
3.2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	炭化粒若干、土器片含む。

SK42

1.2.5Y 3/2	黒褐色粘質シルト	明褐色砂質シルト粒、炭化粒を含む。
2.2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	明褐色砂質シルトをブロック状に含む。
3.2.5Y 5/3	黄褐色砂質シルト	暗褐色砂質シルトをブロック状に含む。



SK47

1.2.5Y 5/3	黄褐色砂質シルト	黒色シルト、暗褐色粘質シルトをブロック状に含む。
2.2.5Y 5/3	黄褐色粘質シルト	有機物が層状に混入。
3.2.5Y 5/3	黄褐色砂質シルト	黒色シルト、炭化粒を含む。

SK49

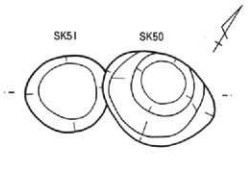
1.2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	炭化粒を含む。
2.2.5Y 3/2	黒褐色粘質シルト	明褐色砂質シルト粒を含む。
3.2.5Y 2/1	黒色粘質シルト	炭化粒を含む。

SK48

① 2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色シルト	明褐色砂質シルトをブロック状に含む。

0 2m
1 : 40

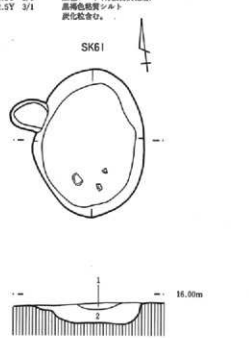
第16図　SK23・41・47・48・49土坑



SK50
1.2.5Y 5/3　黄褐色粘質シルト
明褐色砂質シルトをブロック状に含む。
2.2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト
明褐色砂質シルトをブロック状に含む。
3.2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト
炭化粒を含む。

SK51
1.2.5Y 5/3　黄褐色砂質シルト
明褐色粘質シルト粒をブロック状に含む。
2.2.5Y 2/1　黒色シルト(有機物炭化層)
3.2.5Y 3/1　黒褐色粘質シルト
炭化粒含む。

SK52
1.2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色シルト
明褐色砂質シルト粒をブロック状に含む。
2.2.5Y 3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト
炭化粒を多量に含む。
3.2.5Y 3/2　黒褐色粘質シルト
炭化粒を含む。



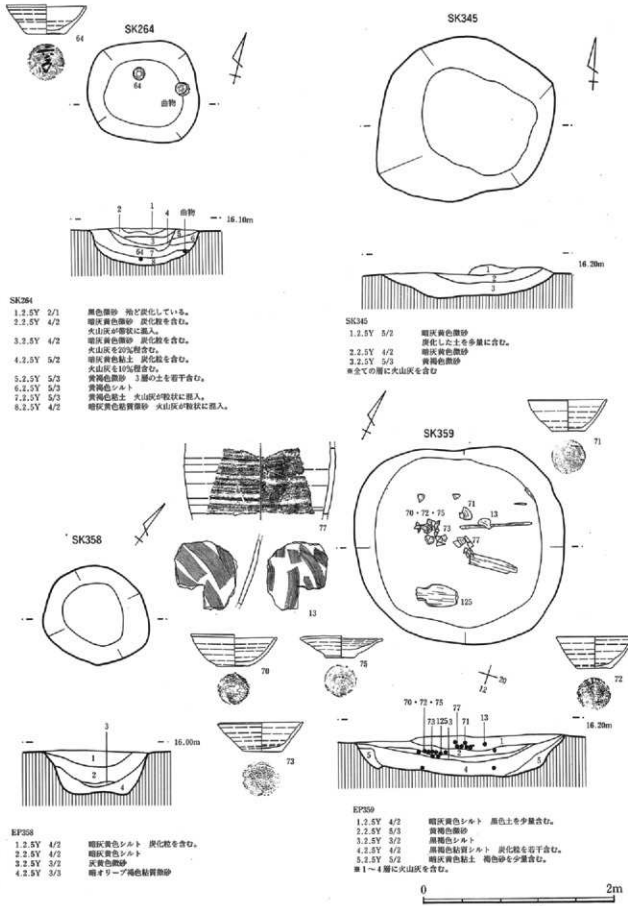
SK61
1.2.5Y 3/1　黒褐色シルト
火山灰を少量含む。全体的に炭化している。
2.2.5Y 4/1　黄灰色粘質シルト
炭化粒を少量含む。

SD57
①10YR 4/1　褐灰色シルト　炭化粒若干含む。

SK76
1.10YR 4/1　褐灰色シルト　炭化粒を若干含む。
2.10YR 5/2　灰黄褐色混砂

0　2m
1 : 40

第17図　SK50・51・52・61・76土坑



SK264

1.2.5Y	2/1	黒色微砂　焼け炭化している。
2.2.5Y	4/2	暗灰黄色微砂　炭化粒を含む。
		火山灰が帯状に混入。
3.2.5Y	4/2	暗灰黄色微砂　炭化粒を含む。
		火山灰を20%程含む。
4.2.5Y	5/2	暗灰黄色粘土　炭化粒を含む。
		火山灰を10%程含む。
5.2.5Y	5/3	黄褐色微砂　3層の土を若干含む。
6.2.5Y	5/3	黄褐色シルト
7.2.5Y	5/3	黄褐色粘土　火山灰が粒状に混入。
8.2.5Y	4/2	暗灰黄色粘質微砂　火山灰が粒状に混入。

SK345

1.2.5Y	5/2	暗灰黄色微砂
		炭化した土を多量に含む。
2.2.5Y	4/2	暗灰黄色微砂
3.2.5Y	5/3	黄褐色微砂

※全ての層に火山灰を含む

EP358

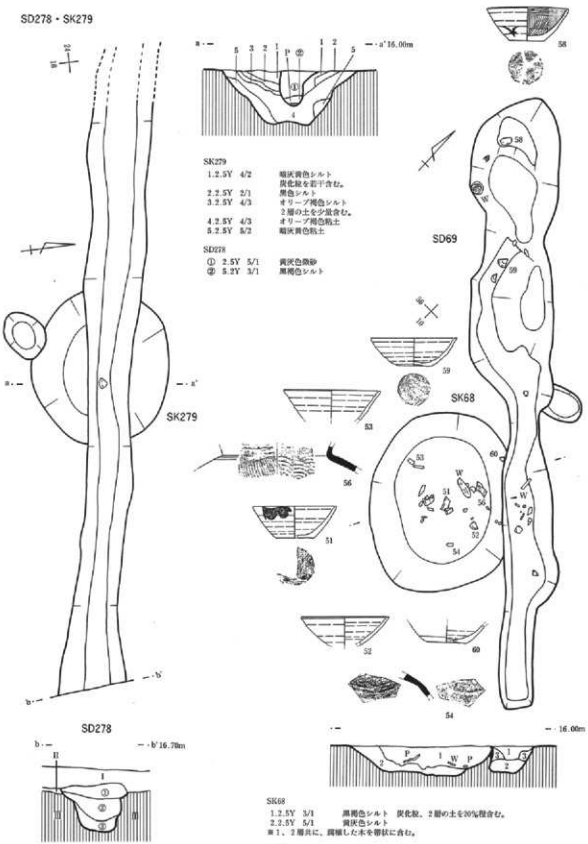
1.2.5Y	4/2	暗灰黄色シルト　炭化粒を含む。
2.2.5Y	4/2	暗灰黄色シルト
3.2.5Y	3/2	灰黄色微砂
4.2.5Y	3/3	暗オリーブ褐色粘質微砂

EP359

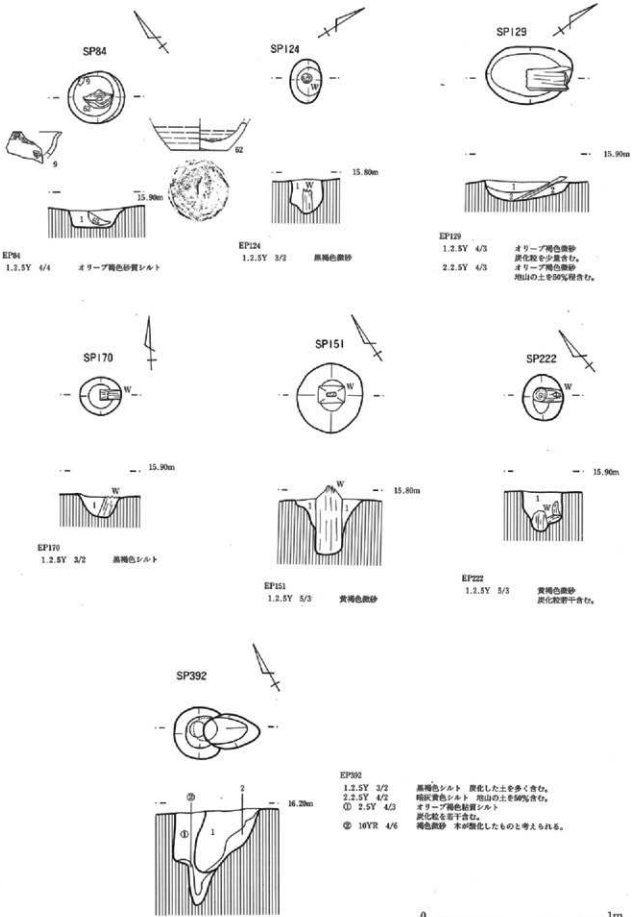
1.2.5Y	4/2	暗灰黄色シルト　黒色土を少量含む。
2.2.5Y	5/3	黄褐色微砂
3.2.5Y	3/2	黒褐色シルト
4.2.5Y	4/2	黒褐色粘質シルト　炭化粒を若干含む。
5.2.5Y	5/2	暗灰黄色粘土　褐色砂を少量含む。

※1～4層に火山灰を含む。

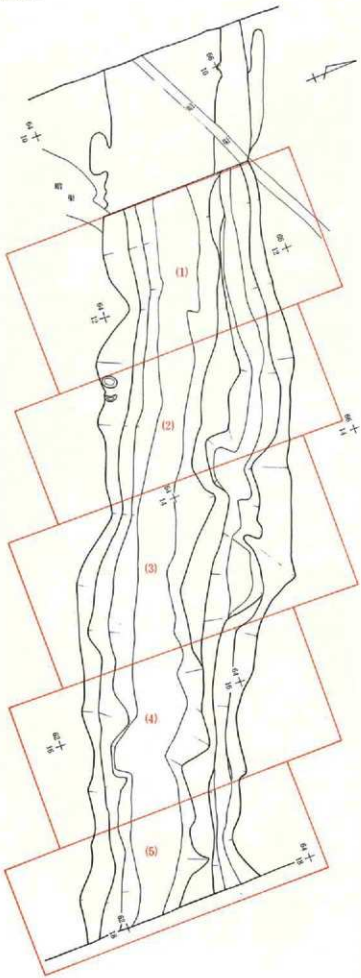
第18図　SK264・345・358・359土坑



第19図　SK68・279土坑　SD69・278溝跡



第20図　SP84・124・129・170・151・222・392ピット



A区基本層序

I	10YR 4/2	灰黄褐色シルト（表土）
II	10YR 5/2	灰黄褐色シルト
III	7.5Y 4/1	灰色シルト（包含層）
		炭化粒を若干含む。

SD3a

1.10YR 3/2	黒褐色粘質シルト 炭化粒、黄灰色細砂を少量含む。 よくしまっている。
2.10YR 3/1	黒褐色粘質シルト 炭化粒を少量、腐植した木 黄灰色細砂を含む。
3.10YR 2/1	黒色シルト質粘土 黄灰色粘質シルトをブロック状に10%程含む。 炭化粒を若干、褐色砂を少量含む。
4.10YR 2/1	黒色粘土 黄灰色粘質シルトをブロック状に5%程含む。
5.10Y 4/1	灰色細砂 黒色砂を30%程含む。
6.10Y 4/1	灰色細砂

SD3b

(1)7.5Y 4/1	灰色シルト 黄灰色シルトをブロック状に含む。

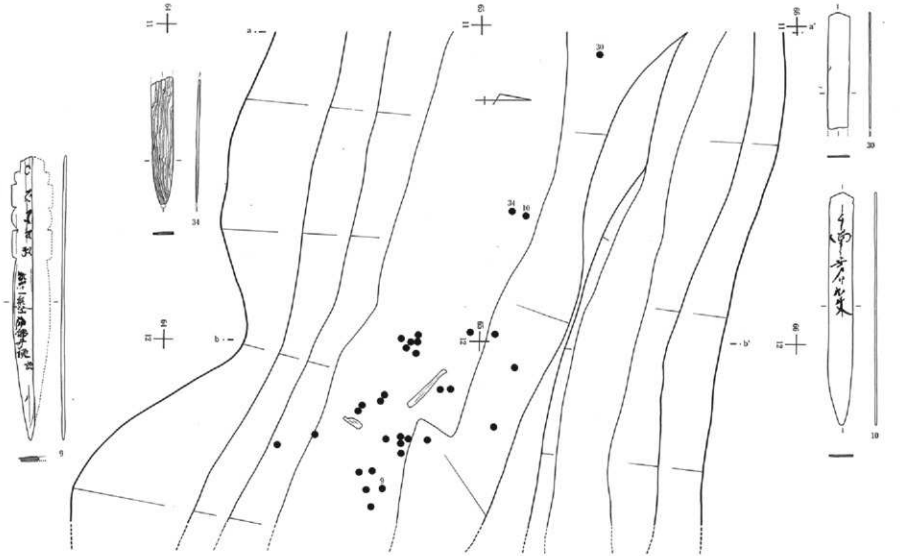
SD3c

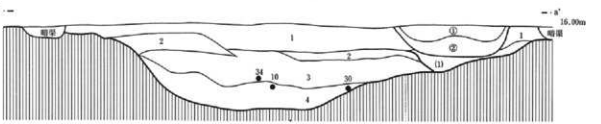
① 2.5Y 6/4	にぶい黄色細砂 ①層の土をブロック状に少量含む。
② 10YR 5/2	灰黄褐色シルト 褐色シルト、黒色シルト質粘土 灰色細砂をブロック状に含む。
③ 10YR 5/2	灰黄褐色シルト 褐色シルトをブロック状に含む。

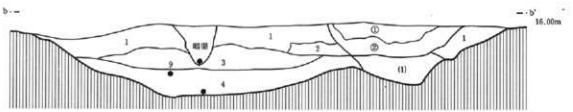
各平面図掲載範囲

0　10m
1 : 200

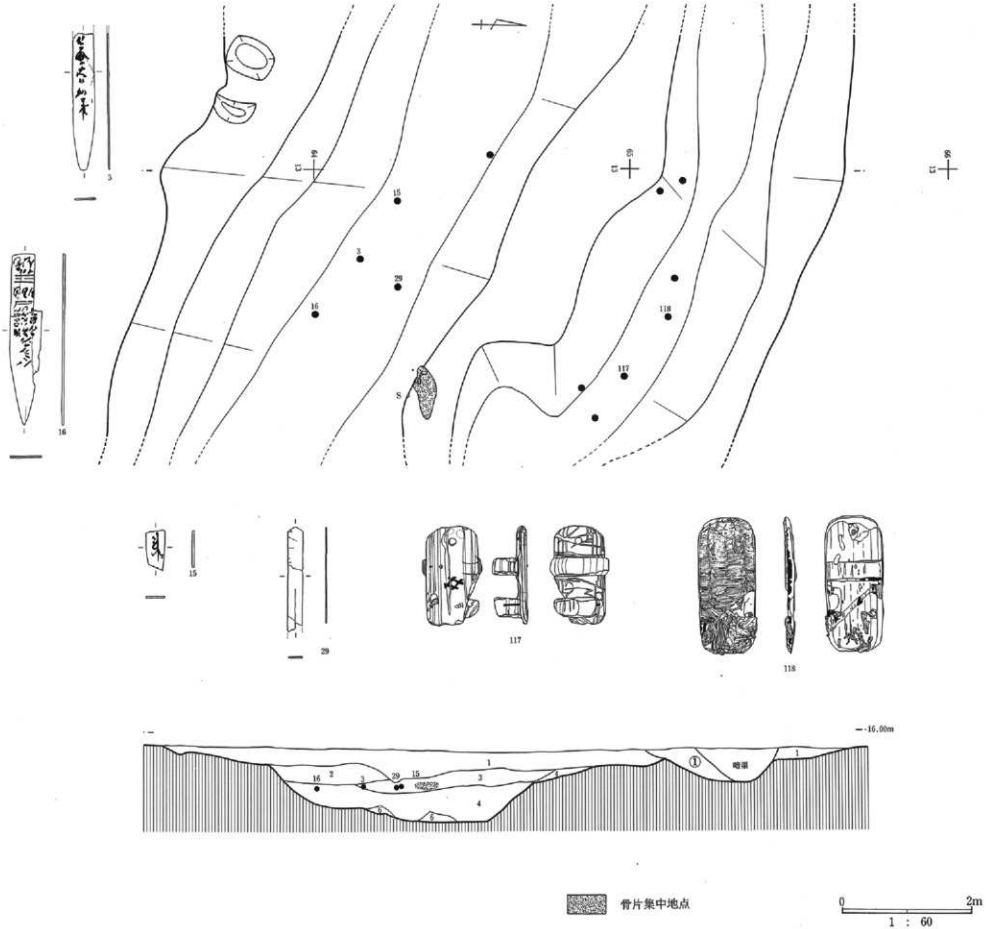
第21図　SD3溝跡全体図



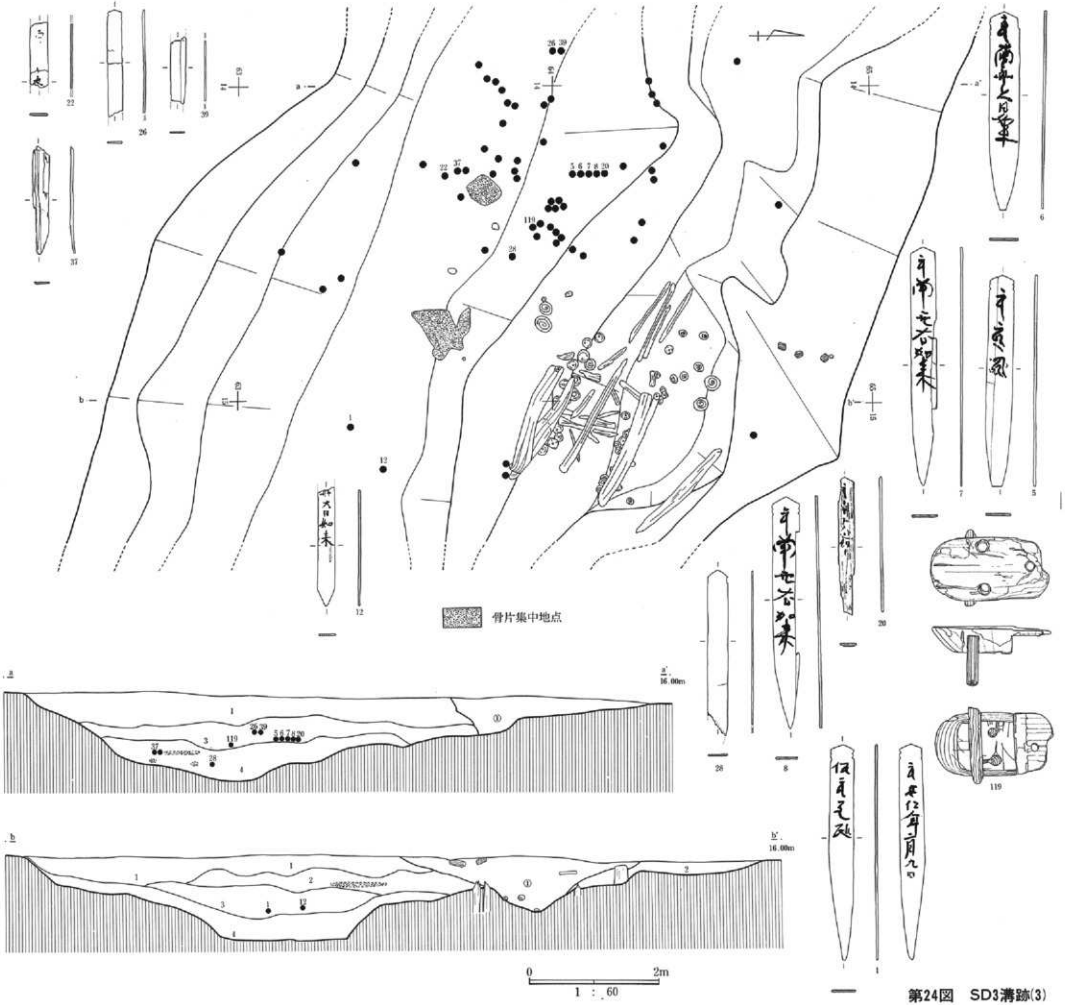




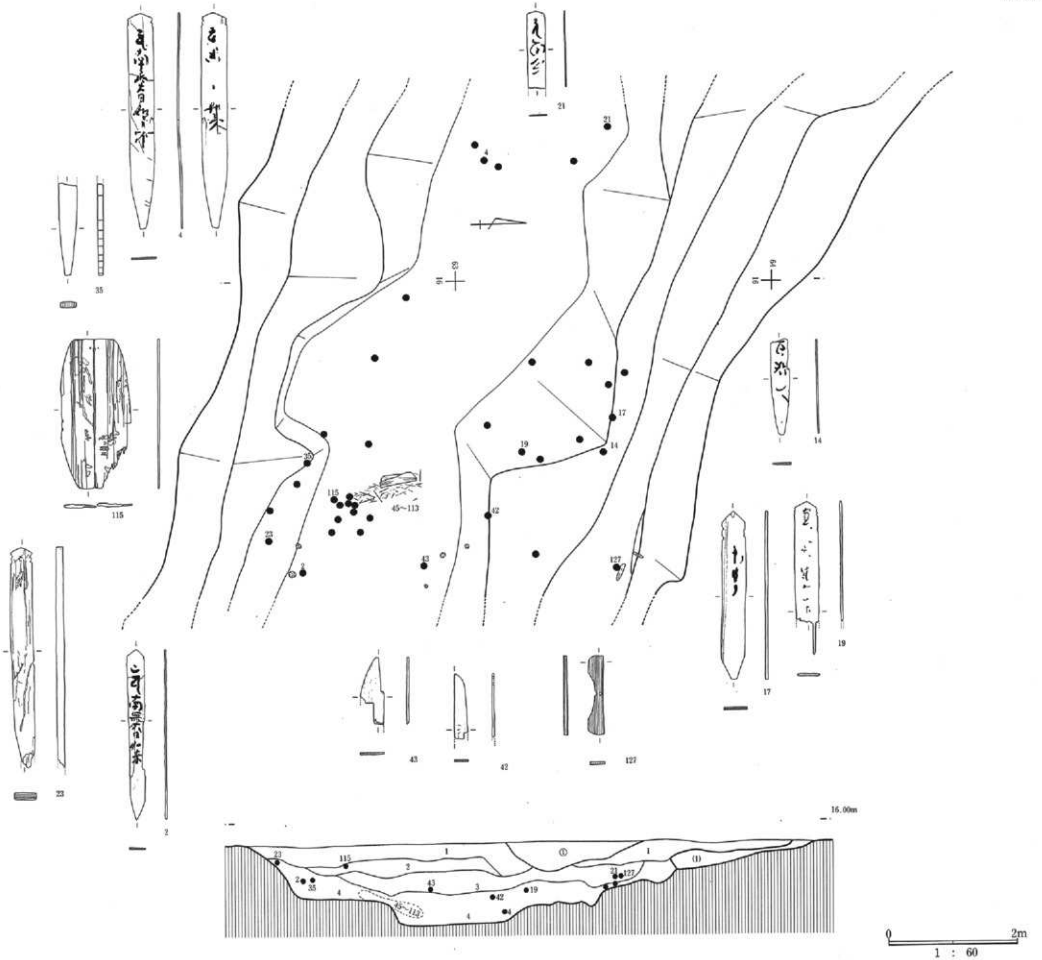
第22図　SD3溝跡(1)



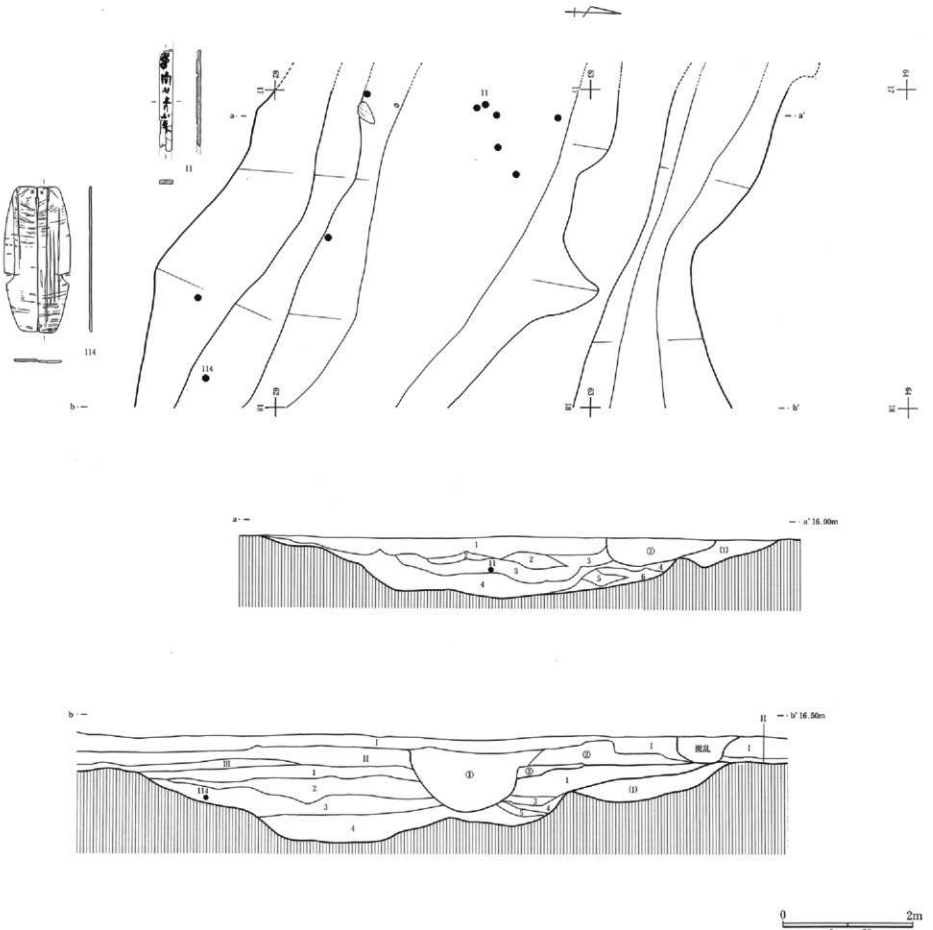
第23図　SD3溝跡(2)



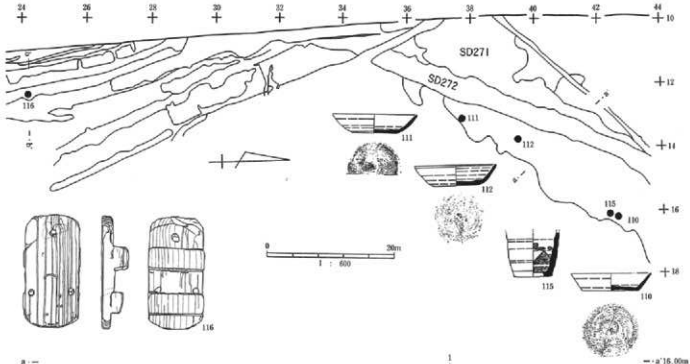
第24図　SD3溝跡(3)



第25図　SD3溝跡(4)



第26図　SD3溝跡(5)



SD272
① 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト
② 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト
③ 2.5Y 3/2 黒褐色砂混りシルト 鋼植した木を含む
※①、②層はよくしまっている。

SD271
1.2.5Y 4/3 オリーブ褐色粘土
2.2.5Y 3/2 黒褐色粘土
3.2.5GY 4/1 暗オリーブ灰色粘砂、明褐色細砂を20%程含む。
4.2.5GY 5/1 オリーブ灰色粘土
5.2.5Y 4/2 暗灰黄色砂質シルト 明褐色細砂を20%程含む。
直径3cm程の木がしきつめられたように検出
※1、2層は、レンズ状に堆積しており、全ての層に計て鋼植した木を多く含む。

SD272
1.2.5Y 4/2 暗灰黄色細砂、炭化粒を若干含む。
2.2.5Y 3/2 黒褐色シルト
3.10YR 2/1 黒色粘質シルト、木根を含む。
4.2.5Y 3/2 黒褐色粘質シルト、木根を多量に含む。
5.2Y 4/2 灰オリーブ細砂

0 2m
1 : 60

第27図 SD271溝跡

4　出土した遺物

調査区内から整理箱数にして約51箱の遺物が出土した。その内、土器・陶磁器類が24箱、小型木製品が21箱で、木製品の占める割合が他遺跡よりも大きいことが特徴と言える。

土器・陶磁器は総点数20,337点を数え、赤焼土器が大多数を占め、古墳時代の土師器から近世の陶磁器まで時代の幅が広い。以下、種別・時代毎に分類しそれぞれについて述べる。

（1）　古墳時代の土器（第28図）

出土遺物の約３％を占め、土師器のみの出土である。ＳＴ１以外では、ＳＤ３への流れ込みやグリッドからの出土が多い。これは、周辺に古墳時代の遺跡が存在することを窺わせる。ＳＴ１からはほぼ完形のものも認められるが、粗砂混じりの胎土で器厚が薄いという特徴を持つため、器種の判るものは非常に少ない。少しずつ形態の異なる杯・甕が殆どであるが、直口壺の出土が注目される。

杯は、１・２・８・９・11の５点を取り上げる。１は体部がやや内湾し、口縁がつまみ上げられて若干開く。底部は丸底風を呈する。調整は、内外面ともミガキの痕跡を若干残し、口縁部外面は細かいヨコナデが施される。外面半分と内面の大部分が炭化しているため、内黒であった可能性が高い。２はほぼ平らな底部から真っ直ぐに立ち上がり、内側に僅かに稜を持って外反する。調整は内外面ともに細かいミガキ、外面底部はケズリが施される。内黒で他の杯類より厚さがありどっしりとした印象を受ける。８・９はほぼ同一形態と考えられ、丸底から体部が若干内湾し、口縁は大きく外反する。内外面ともに丁寧なミガキが施される。外面はかなり炭化しているが、内面は口縁部が若干炭化しているだけである。11は内湾して立ち上がり、口縁を若干つまみ上げておさめる。碗状を呈し、底部は丸底と推定される。内外面ともにミガキが施される。

甕は、４～７・10・12・13の７点を取り上げる。４・12は口縁が「く」字状に屈曲し、つまみ上げておさめられる。ほぼ体部中央を最大径とし、平底を呈する。内外面ともにハケメを施し、内面上部にはヘラナデ、口縁部にはヨコナデが施される。４は外面体部、12は内外面ともに黒く焼けている。５は４・12よりもさらに鋭く口縁が屈曲する。やや器高が短く球形を呈する。外面はハケメ、体部上部から口縁にかけてヨコナデが施され、内面はヘラナデが施される。６は他のものよりかなり小型で、口縁をやや外側につまみ上げ、体部はほとんど膨らまない。調整は外面体部に長いハケメ、内面にはヘラナデ、口縁部にはヨコナデが施される。７・10は口縁を若干外傾させながらつまみ上げられる。体部は４・12ほど膨らまずおさまるものと推定される。調整は外面にハケメ、内面にヘラナデ、口縁部はヨコナデが施される。７の口縁部内面のみ粗いハケメが認められる。上記のものより作り・調整ともに粗雑化されている様子が窺える。13は口縁部分のみであるが、他の甕より口径が大きく、大型のものになるものと推定される。細かいヨコナデが施される。

３は直口壺の口縁部分と推定される。あまり開かずにゆるく外傾して立ち上がる。わずかにミガキの痕跡を残す。表面がかなり赤いため朱塗りが施されたと考えられる。

以上の様相から漆町遺跡編年の13～14期に並行し、後田遺跡の北西に位置する清水新田遺跡とほぼ同時期の遺物と考えられる(11)(13)。

（2）平安時代の土器(第29図～第36図)

遺物の中で一番多く出土しており、種別としては須恵器・赤焼土器・内黒土器・黒色土器・灰釉陶器が認められる。

須恵器は全体の約14％を占める。器種は甕・壷の破片が殆どで、蓋・杯類は少量である。杯は少量ながら2形態に分類することができる。口径に比して底径が大きく体部があまり立ち上がらず底部を回転へら切りによって切り離しているもの(25・108・110・111・112)と、口径が大きく底部を回転糸切りによって切り離しているもの(42・43)が認められる。

蓋は、中央が山形に盛り上がるもの(92)とあまり盛り上がらず法量の少ないもの(33・95)に分けられる。78は擬宝珠形のつまみが付いており、残存する器厚からかなり大型のものになると推定される。

赤焼土器は全体の約80％を占める。破片はかなり小さく磨滅しているため器種を推定することは難しいが、概ね煮炊具の破片と推定され、供膳具は少量であると考えれる。しかし、完形品は杯類に限られる。

杯は須恵器杯に比べ多数出土しており形態も様々である。最初に底部をへら切りで切離すものと回転糸切りで切り離すものに大きく分けられる。前者は体部が若干内湾ぎみに立ち上がり、ロクロ痕を明瞭に残す。胎土は小石を少量を含み、表面は橙色に焼成されている(18・19)。これは、西谷地遺跡出土「酸化炎土器」の系譜を引くものと推定される。糸切りのものには、体部が直線的に立ち上がるものと、内湾気味に立ち上がるものが認められ、前者に比し後者は法量の大きいものが目立つ。これらには底部及び体部に墨書されたものが7点出土している。「貞」が2点(14・105)、「亨」(64)「野」(106)がそれぞれ1点ずつで、その他のものは墨書部分が欠損していて判読できない(28・107)。

皿の形態を示すものはＳＫ359から2点(74・75)、ＳＤ3から1点(103)ほぼ完全な形で出土している。103は、高台付皿で胎土が粗く、重量があり他のものとは明らかに異なった様相を呈する。

土師器と黒色土器は全体の約1％程の出土である。土師器は69等の甕の破片が認められる他は、内黒土器がその殆どを占める。20はわずかに高台が付く。45と58は、内面を丁寧にみがいており、体部が内湾し、45はその後口縁がつまみ上げられている。58の体部には「大」と逆位に墨書されている。また、97と36は黒色土器で、97には内面に細かいミガキが施されている。84は唯一の灰釉陶器で、三日月高台部分であるが、器種は判然としない。

ＳＤ271の土器組成(第36図110～112・115)

全て上層からの出土であるが、他遺構出土の土器より古い様相を呈すると考えられるため取り上げることとする。110～112は全て底部切り離しを回転へら切りで行っており、口径に比し底径が大きく体部はあまり立ち上がらない。110は111や112に比べ底部と体部の区別がはっきり

している。また、115は鰹の煮汁等の調味料を入れたと考えられ、所謂壷Gと分類されているものである。体部から底部にかけて残存しており、上部には長い頸部がつくものと推定される。内面には黒褐色の染みのようなものが付着している。これらの遺物は8世紀第4四半期から9世紀初頭の所産と考えられる。

平成元年度の月記遺跡の立会い調査において、旧河川跡8層中よりSD271と同じような杯類が出土している。この河川跡は後田遺跡の東側に位置し、SD271と一連の遺構である可能性が高い。

SK359の土器組成(第33図70～77)

赤焼土器の坏が5点、皿が2点、甕の体部が1点出土している。殆どが上層からの出土ではあるが、土がある程度堆積した後、火山灰の堆積と共に一括廃棄された可能性が考えられる。杯と皿の底部切離しは全て回転糸切りを行っており、70と76は底径が小さく、体部が内湾しながら立ち上がる。71～73は体部が直線的に立ち上がるが、71と72は若干内湾ぎみである。74・75施釉陶器模倣タイプで底部を厚くつくり、体部を大きく開く。ロクロ痕を明瞭に残し、75は口縁部をつまんで丸く仕上げている。77はロクロ痕を明瞭に残し、内側にはハケメが数状認められる。これらの遺物を十和田aの降灰時期に廃棄されたものとすると10世紀前半に相当すると考えられる。

(3) 中世の陶磁器(第37図～第40図)

珠洲系陶器・青磁・かわらけが認められるが、これらを合計しても全体の約1%の出土である。しかし、珠洲系陶器は、赤焼土器片などに比して破片が大きく残りが良い。出土遺構はSD3が約5割を占め、その他土坑・井戸跡・溝跡・柱穴等広範囲に少量ずつ分布している。多量の須恵器・赤焼土器片の中に数点の珠洲系陶器が含まれる遺構が多い。

珠洲系陶器は、中世陶磁器中約90%を占める。壷・甕類と擂鉢が認められるが、壷・甕類は殆どが体部片で器種を特定することができないものばかりである。概観すると、1.5㎜程の細い叩きが規則正しく施されているもの(133・135・138)と、3㎜程の粗い叩きが小さい単位で何度も施されているものに分類できる。前者は後者に比べ硬質で胎土が粗く黒色砂・小石混じりである。後者には叩きが指等で若干擦り消された痕が残るもの(121・122・147・149)が認められる。内面は、径2～3㎝程の丸あて痕が認められる。また、スタンプを使用したと思われる直径2㎝程の円形紋があるものや(123)、鉢形と胴部の接続部分と考えられる体部(156)も認められる。117は「く」の字状に屈曲する甕の口縁部分で、屈曲する直前まで口縁に平行する叩きが施されている。135や147も頸部下部と推定され、現存する傾きから甕の一部と考えられる。

擂鉢は口縁と底部の出土が多い。口縁形態は端面を平直に仕上げるもの(125・136)、外端をわずかに引き出したもの(134・150・155)、内外が水平で平直に仕上げるもの(158)、端面中央をやや窪ませたもの(151)が認められる。卸目は5条前後を一単位とするもの、10条前後を一単位とするものが認められ、前者はそれぞれの溝の間隔の広いもの(150・155・158)や一単位が7㎜と細いもの(134)に分けられる。口縁部・体部は卸目と卸目の間隔が開いているが、底部は殆ど密

に施されている。また、体部から底部にかけて製作時に付いたと推定される指頭痕を残すものもある。(157)底部は全て静止糸切りを行っている。胎土は、若干砂の混入した灰色を呈するものが殆どであるが、118・134・151は、軟質で灰褐色を呈する。

以上の様相から、吉岡康暢氏の珠洲陶器編年に対比させると、I$_3$～IV期に相当する遺物であると考えられる(23)。

青磁は井戸跡・土坑・河川跡内からの出土である(127～129・146・152・153)。127は、SG3F4から出土した香炉の蓋と考える。重ね焼きの痕跡があり、表面に貫入が施される。時期は太宰府編年坏III－2または3の14世紀前半に比定される。128はSD3F3から出土した碗である。乳白色の施釉で、口唇部が外反する。129・153は蓮弁を施す碗である。129はSD3F4、153はSD335からの出土で、両者とも鎬蓮弁である。146はSE28からの出土である。施文は線刻による蓮弁文が施され、先端部は不明だが、弁の幅が狭くなり、単位文となり線が直線的となる。内面見込みに稜線が入る。釉調は明緑灰色を呈する。時期は12世紀末から13世紀初と考える。152はSK47出土の龍泉窯の青磁碗である。内面に片切り彫りによる画花文が施され、内面を方形に区画し、器形は高台部からやや内碗しながら立ち上がる。見込みに稜線が入る。時期は太宰府編年I－4、12世紀末から13世紀初頭に比定される(26)。

この他に瀬戸、美濃系の卸皿がある(142)。SD3からの出土で、内面に6～9㎜の間隔と3㎜の間隔で格子状に引き刻まれた線が認められる。

かわらけは全て小片でSD3の下層から出土した。図上復元可能な2点(130・131)を図示した。やや大きさが異なるが、2点共に指頭痕が認められる。青磁片とほぼ時期を同じくするものと推定される。

（4）近世陶磁器(第41図)

SD3河川跡からは多数の近世に比定される陶磁器が出土した。その中で特徴が示される磁器を図示した。磁器は肥前磁器とされる染付中皿(161～164)や猪口(170)の器種である。皿は、表面を唐草つなぎ文とし、内面を丸窓区画した161、松竹梅文の162・163・164である。見込みには、五弁花のコンニャク印版が施された163・164、花弁文となる161・162である。163の外面底部には渦福文が描かれる。時期は18世紀前半と考える。170は、薄手酒坏である。内面には「卵殻手」江戸絵付けが描いたもので、口唇が口紅となる。外面は遠山が描かれている。時期は18世紀後半と考える。グリッド包含層からの出土である。

陶器には唐津系の小皿(171・172)と鉢(165・173)を図示した。165は三島手唐津の鉢である。173は刷毛目文様の鉢である。皿は、内外面に灰釉が掛けられ、重焼き痕が明瞭に観察できる。時期は、18世紀前半と考える。そのほかの陶器では、在地の大寶寺焼と呼称される鉢(168)と湯透し鉢(169)が出土した。169の底部には径5㎜の穴が内部から穿たれている。166は在地窯の灯明皿である。行灯の明かり取りである。時期は不明である。

（5）木製品

1　信仰・呪術に関する木製品（第42図～第48図）

長方形の材に様々に加工を施したもので、墨書の認められるもの23点、認められないもの21点が出土した。44以外は全てSD3からの出土であり、この中には笹塔婆・呪符・刀形等が認められる。その形状は多様であるため、墨書の認められるもの（A）、認められないもの（B）と分けた上で更に下記の型式分類を行った。

a　長方形の材の上端を圭頭にし、下端を尖らせたもの。
b　長方形の材の上端を圭頭にした上で左右に二段の切込みを入れ、下端を尖らせたもの。
c　長方形の材の上端を五輪塔形に切込みを入れ、下端を尖らせたもの。
d　長方形の材の下端を尖らせたもの。
e　長方形の材の上端を圭頭にし、下端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
f　長方形の材の上端を圭頭にした上で左右に二段の切り込みがあるが、下端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
g　長方形の材の下端を尖らせているが、上端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。
h　長方形の材の両端とも折損あるいは腐蝕して不明のもの。
i　上記以外の形をしたもの。

（A）墨書の認められるもの（第42図～第46図）

完形のものは殆どb型式の笹塔婆であるが、若干a型式やc型式のものも認められる。また、d型式の16は他と用途の異なる呪符と考えられる。

1は、表裏に墨書の認められる笹塔婆で片面に梵字4字、片面に「𑖦（バーン）安仁年二月九日」と記されている。「安仁」という年号は実在せず、私年号にも今のところ認められない。年号を書き誤るという可能性は低いと考えられるため、未だ確認されていない私年号とも推定されるが、今後検討を要する。4も、表裏に墨書の認められるもので片面には「𑖦（バーン）南無大日如来」と記されている。片面は若干消えているが同様の字が記されているものと推定される。2は右下端が若干折損しているが墨書に影響はなく「𑖦（バーン）」の字が他の字よりも大きく書かれている。3は上部が折損しているが、「無」の字の半分程が残っていることから他の笹塔婆同様「𑖦（バーン）南無大日如来」と記されていたものと推定される。5は「𑖦（バーン）𑖪（ウン）𑖨（キリーク）」と梵字が3字書かれている。b型式を呈するが下端は1.5cm程平らに切っている。また、5・6の表裏下端には1cmほど朱塗りが施されている（巻頭図版1）。6～8・10には「𑖦（バーン）南無大日如来」とそれぞれ墨書されているが、「無」を「无」と書いているものも認められる。7はa形式であるが、8の字体と非常によく似ており、同一人物が書いたものとも解される。9はc型式であるがほぼ半分が折損している。五輪塔の下はかなり丸みをつけて尖らせている。墨書は五輪塔部分に「𑖑（カ）𑖭（ラ）𑖥（パ）𑖀（ア）」と梵字5字がならび、その下には「妙法蓮華経巻第一　方便品第二」の一節が記されている。「説」の下にも若干墨書が見られるが判読はできない。右側には前節が墨書されていたのだろうか。11は両端ともに折損しているがかろうじて墨書部分が残存している。厚さ6mmと他の笹塔婆より厚めに作られている。12は上部

が折損しているが、他と同様の文字が墨書されていたことが推定される。3は他の笹塔婆とは異なった文字が確認でき残存文字より「南无普賢菩薩」と書かれていたものと推定できる。14はかなり下端近くまで墨書されているが、その文字は判然としない。15は下に向かって幅が狭くなっていることから、下部の一部と考えられる。16はd形式を呈する唯一の呪符である。上部半分の右端が折損しており、笹塔婆よりも短い。墨書は符録の下に「急々如律令」と記されていると推定される。17はb形式を呈するが、上部の切込みが大きく丸みを帯びている。これは24に類似しており同じ材を立ち割って作成した可能性が高い。18～23はそれぞれ墨書の残りがよくないが、「𑖀(バーン)大日如来」と記されていたと思われる。

(B)墨書の認められないもの(第46図～48図)

b型式を呈する24は下端が若干腐蝕しているが、かなり厚めであるため笹塔婆製作途中のものであると考えられる。25～31は全て下部が折損している。墨書のあるものに比較してe型式を呈するものが多くa型式にする前の失敗作とも解される。32～34・36・38は全てg型式を呈するが、下部を鋭く尖らせているものと丸く仕上げているものが認められる。また、35は9㎜と厚めであるため製作途中のものであった可能性が考えられる。39は幅・厚さ等から笹塔婆の一片と考えられる。40は上端が丸く切られその下が山形になっており、人形のような形態であるが、墨書が認められないため判然としない。41は10㎝と短く、多数の切込みが認められる。42・43はそれぞれ刀形と考えられるが、その形状は若干異なっており42は幅が狭く43は広い。44は唯一SK23から出土したもので小型の塔婆と考えられる。

上記の殆どは笹塔婆と考えられるが、その大きさや出土遺構から現在のような立て方をしたものではなく川や溝に流して死者の供養を行う「ながし塔婆」のような使われ方をしたものと考えられる。またi形式を呈するものは、信仰のためこれらと一緒に流されたものと推定とされる。

2　箸状木製品(第48図～第49図)

SD3の63－16グリッドの4層目より69本一括して出土した。完形品が42本、折損品が29本である。長さは折損しているものもあるため6～24㎝、太さは直径5㎜程で、ほぼ同じような長さであったと推定される。断面は円に近い多角形をなし、両端は尖らせている。

これらの用途については日常の箸としての使用や祭祀との関係が推測されるが、完形品が半数以上を占めていることや、箸状木製品に対する他の木製食器出土の割合が少ないことが注目される。これらを含めた上で今後の検討が必要である。

3　履物(第50図)

6点出土しているが、116以外は全てSD3からの出土である。形態はそれぞれ異なっており、118等のかなり新しい様相を呈するものも認められる。

114・115は草履状木製品で、これらの薄い板を芯材として藁などを編んだものである。2点と

もほぼ同じ形状を呈しており、柔軟にするため中心は割っている。また鼻緒を通すため中心より下に切込みがあり、114には藁を巻きつけたと考えられる痕が認められる。県内では酒田市城輪柵跡出土例が挙げられる。

116・117は隅丸長方形を呈する連歯下駄である。116はSD272から出土したもので、117に比して形が整っているが、後歯がかなり擦り減っている。鼻緒穴間と後鼻緒穴から後端までの長さが短く、歯は台より若干幅が広い。長さは15cmと小さく、子供用ではないかと考えられる。補強のためか前後の歯の右側に鉄釘を打ち込んでいる。また中央よりやや後ろ寄りには「 」と焼き印が押されている。116・117ともに前鼻緒穴付近に指の痕が認められるため、使用頻度の高かったものと推定される。

119は陰卵の差歯下駄であるが前部は折損している。鼻緒穴が著しく大きく、鼻緒穴間と後鼻緒穴から後端までの長さがほぼ同じである。台は3.75cmと厚く、歯も高い。台は116・117に比べると若干丸みを帯びている。

118は、黒漆を塗布した薄い台に植物性繊維で編み上げた表を乗せた連歯下駄である。前歯は僅かに残っているが後歯は痕跡すら認められない。台はかなり細長く、鼻緒穴間が長い。漆は側面と下面に若干認められるだけである。X線観察の結果、台と表を合わせるための留め金が下駄の周囲に多数認められた。

4　井戸枠材(第52図～第57図)

それぞれの井戸より出土したが、比較的保存状態の良いSE2とSE45の井戸枠材を遺物として取り上げる。

SE2は横板19枚、縦板25枚、隅柱4本が出土した。横板は東側は4段、その他は5段残っている。井桁に組み合わせるためそれぞれ5cm程の切込みがあるが、南・東・北側の最下段の下部には切込みを入れていない。縦板は幅が一様でないが、全て下部を削って尖らせており、中には162のように台形状に切った上で削っているものも認められる。

SE45は縦板50枚、横桟8本、隅柱4本出土した。上部は全て腐触しており、下部はSE2のような削りは認められず、加工痕は認められない。184・200・201・222の下部中央部には直径1cm程の穴が穿たれており、転用された板材と解させる。横桟は丁寧に削りが施されている。

5　曲物(第58図～第60図)

239(SE27)・240(SE28)出土曲物は、二重の側板の外側に更に箍が回されている。2ヶ所に樺皮綴じがなされ、箍部分下部には数ヶ所穿孔されているため底板と釘結合されたものを転用したものと推測されるが、残念ながら木釘は残っていない。側板内面には多数のケビキが認められる。240は、下部が若干内側に入っている。また、側板外側の中央よりやや上部には、楕円形の下に2本の棒を付けたような直径3cm程の刻書が認められる。

241(SE30)は上記に比し小型であるが、作りは239とほぼ同様で、内側の側板外にも格子目状のケビキが認められる。また、下部には10ヶ所に木釘が残る。

242(ＳＥ45)は１枚の側板の上下に幅の広い箍が回されている。下部には木釘穴も認められず、且つ結合部分の樺皮も底部まで残存していないため、底板との結合方法は定かでないが、井筒専用に作られた曲物の可能性も考えられる。

6　その他(第51図)

ＳＤ３を含め多くの遺構から板材や棒状木製品が出土している。その中でも明らかに道具としての加工が施された痕跡の残るものを取り上げる。

120は挽物の高台付漆器椀である。高台はわずかに作り出しているだけで高台内部には漆が塗布されていない。121は挽物のベタ高台の小型漆器杯である。これも高台部分には漆が塗布されていない。120と121の内側には漆を塗布した際のハケメが認められる。122は120・121に比べ作りが粗雑である。内側にはロクロ目が認められるがかなり歪んでおり、原型を推定することが難しく、平面は若干方形に近いと考えられる。漆は内部のみに塗布されている。

123・124は曲物底板である。123は大型だが、124は小型でかなり厚く造られており、柄杓の底部として使用されていたと推定される。両者とも側面に木釘等は認められない。

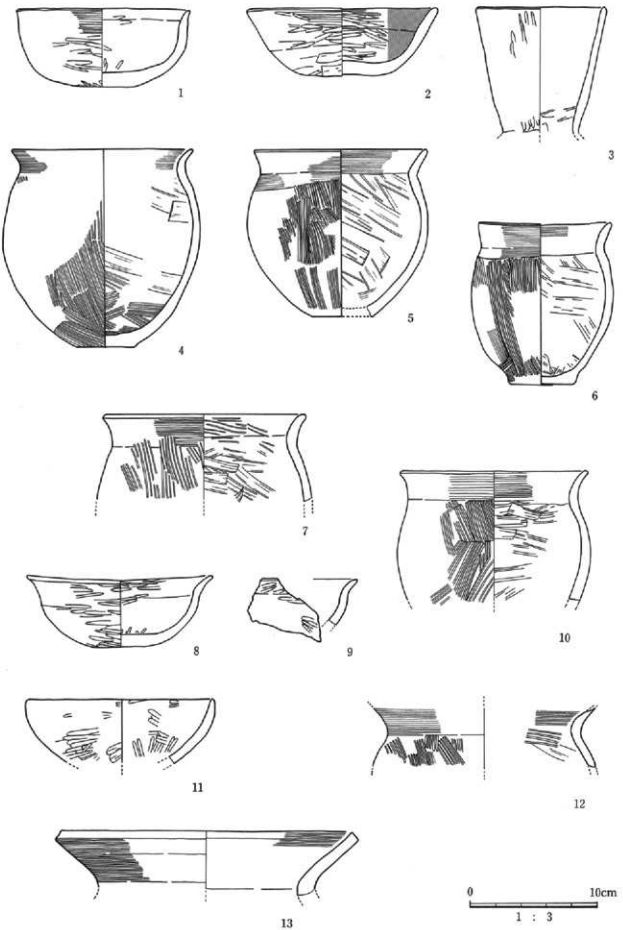
125は把手のようなものが付くことから鋤等大型木製品の未製品と考えられる。126は丁寧に加工を施しているが、用途は不明である。127は小型の台等の板と脚の間にはめる脚座と考えられるが、両端に穴が認められないことから未製品と考えられる。128は先端を尖らせていることから、藁仕事などに用いる木針の一種と推定されるが、通し穴は認められない。

7　土製品・石製品・金属製品・古銭(第61図)

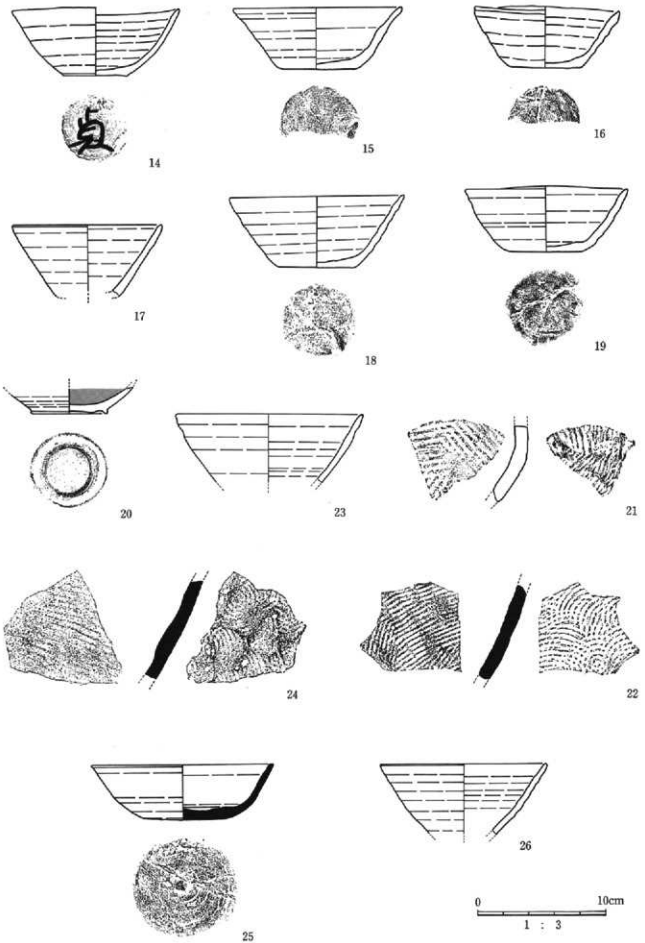
砥石は４点認められる。全て使用した痕跡が認められるが、10は一面が特に擦り減っており刃物で付けられた思われる傷が多数認められる。９は花崗岩を三角形に加工したものであるが、用途不明である。

金属製品は主にＳＤ３やグリッドから出土しており、保存状態のよい物は10点を数える。煙管は雁首が３点、吸口が３点出土しており、16には細かい装飾が施されている。19は頭部が円形の箸状のものである。20と22は釘と考えられ、22の中程には木質遺物が付着している。21は薄い板状のもので用途は不明である。

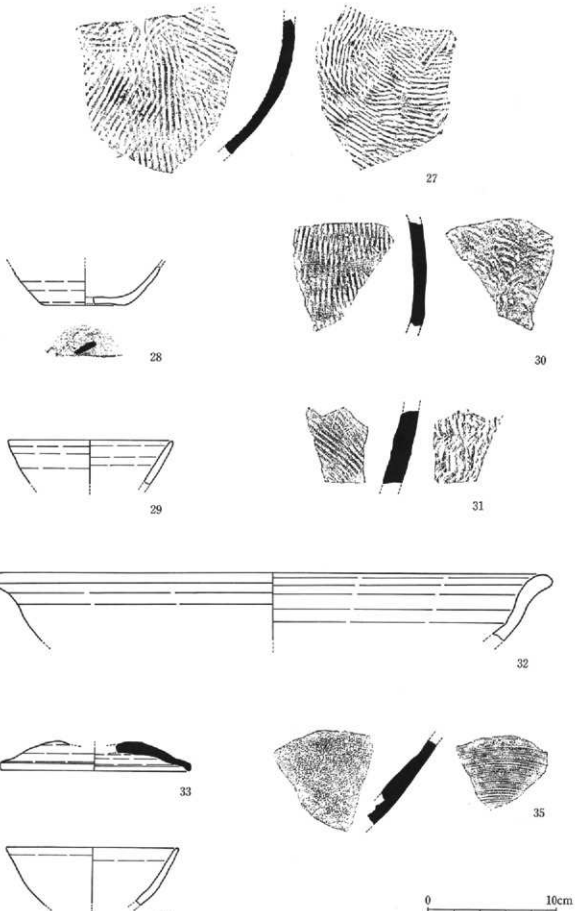
古銭は、「皇宋通寶」が１点、「熙寧元寶」が２点、「寛永通寶」が４点出土した。



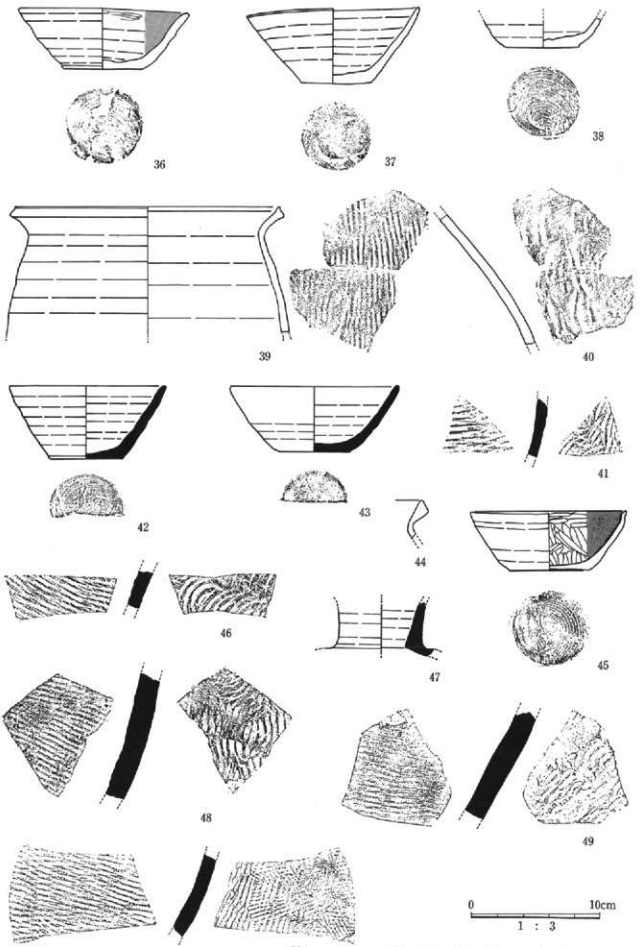
第28図　遺物実測図(１)土器



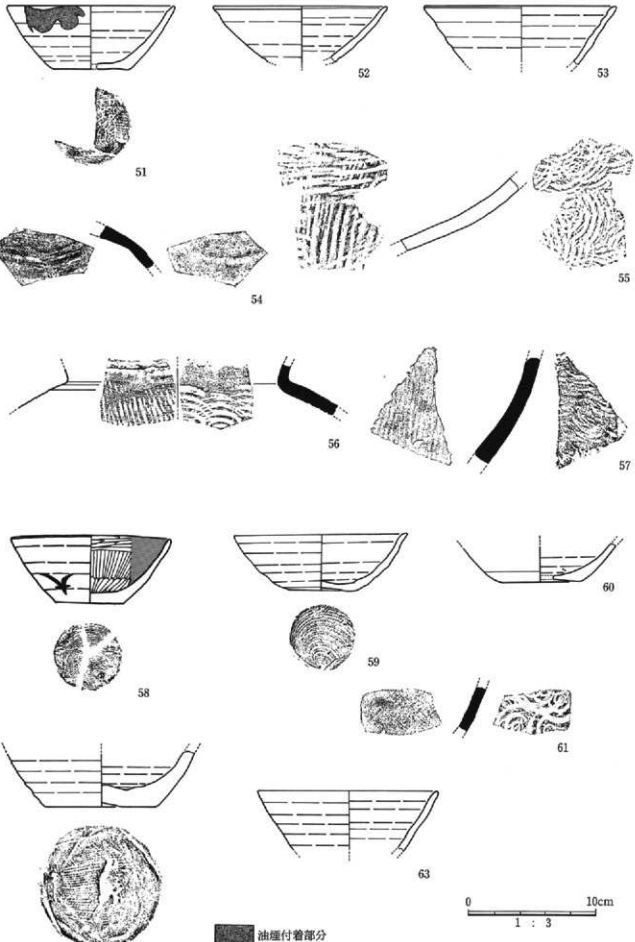
第29図　遺物実測図(２)土器



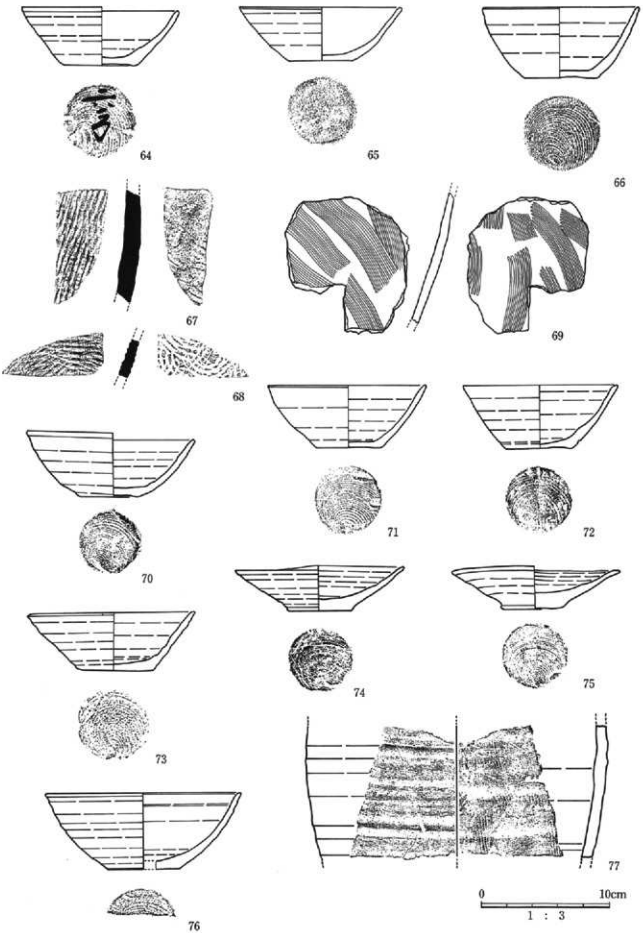
第30図　遺物実測図(３)土器



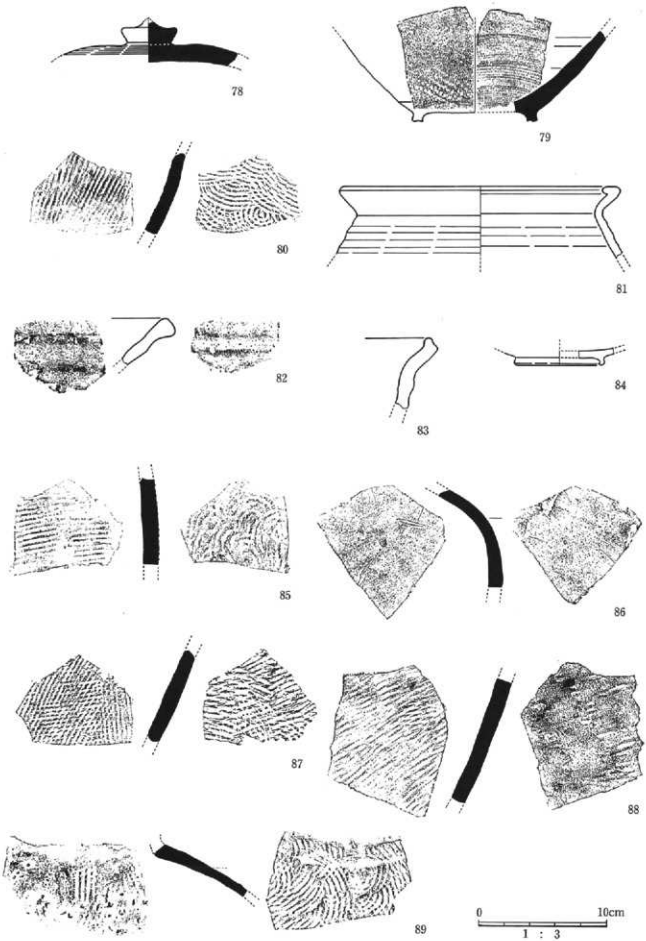
第31図　遺物実測図(４)土器



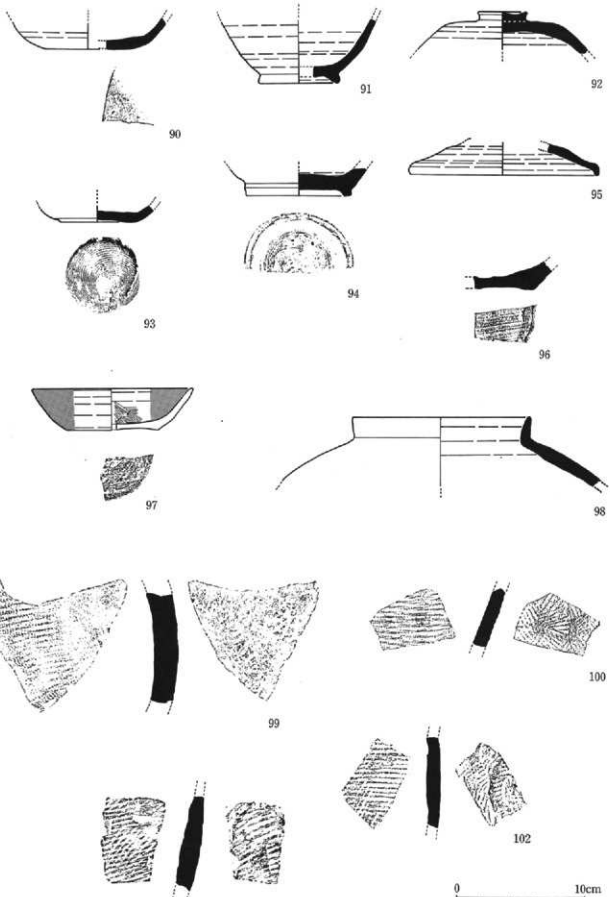
第32図　遺物実測図(５)土器



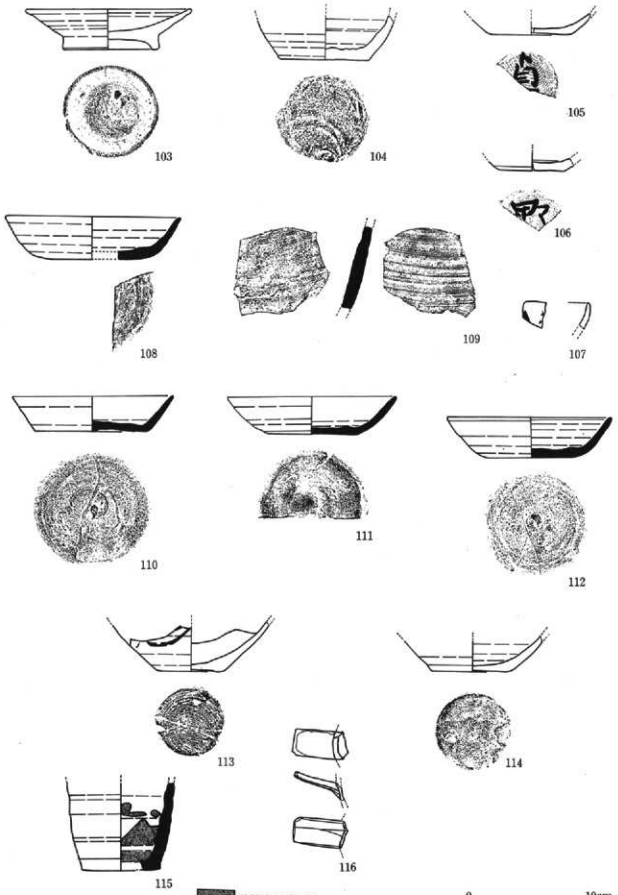
第33図　遺物実測図(６)土器



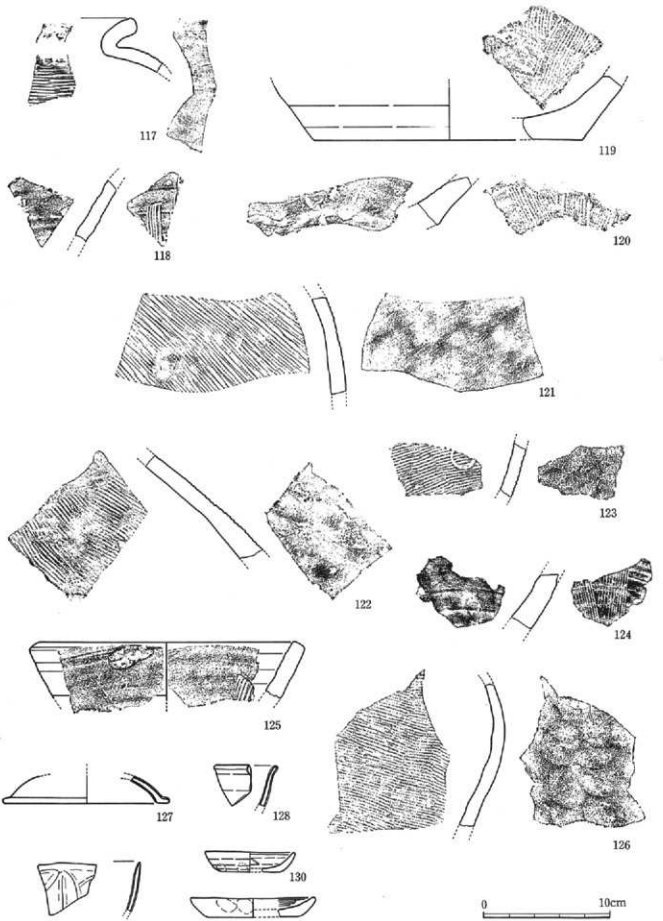
第34図　遺物実測図(７)土器



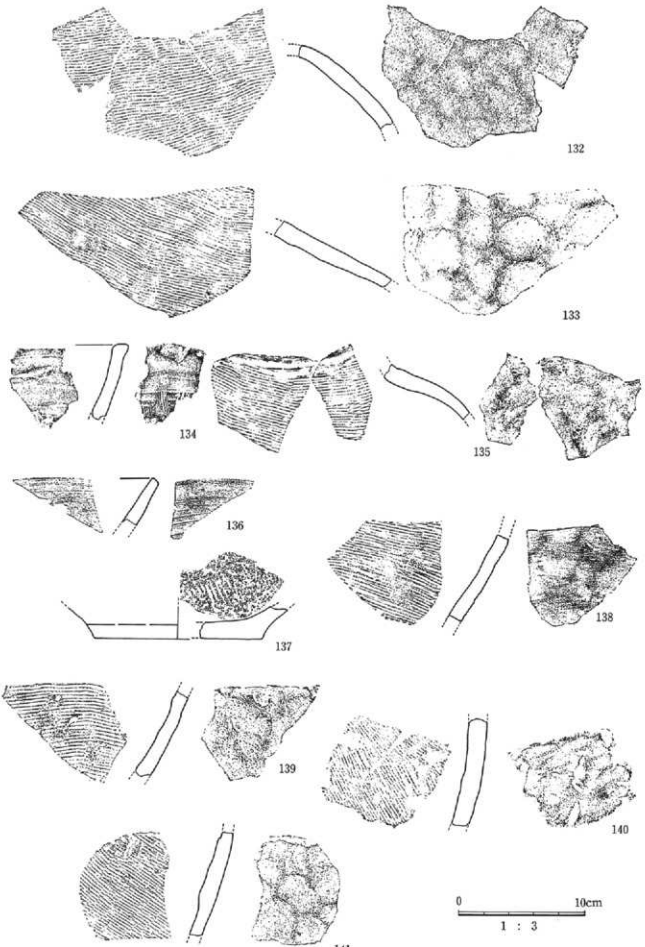
第35図　遺物実測図(８)土器



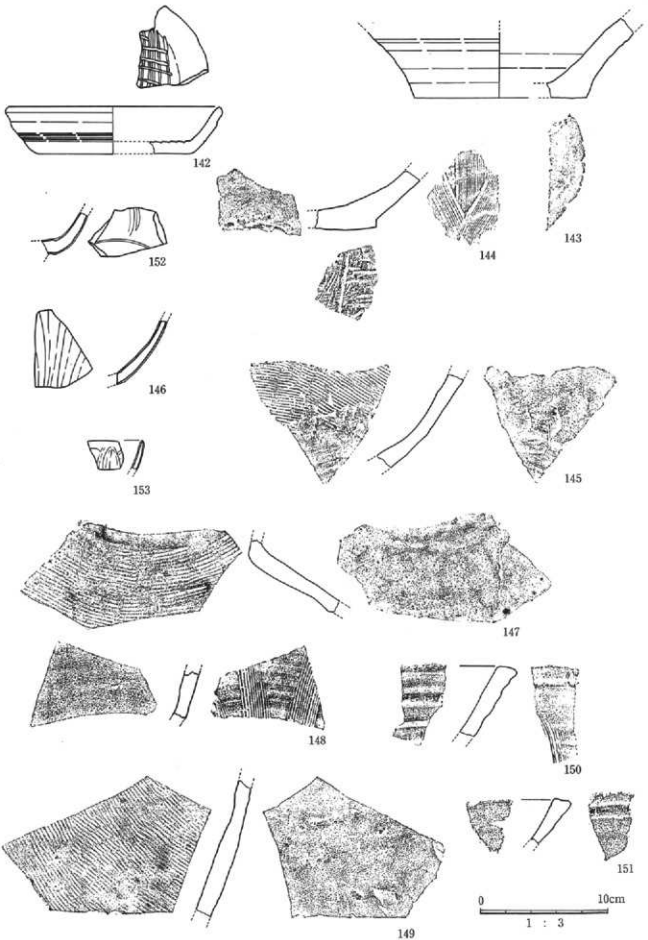
第36図　遺物実測図(９)土器



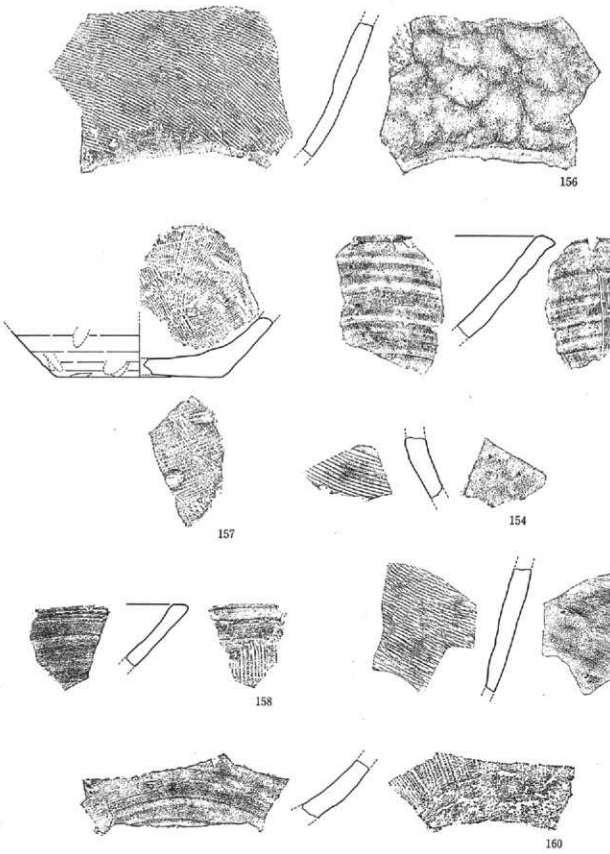
第37図　遺物実測図(10)土器



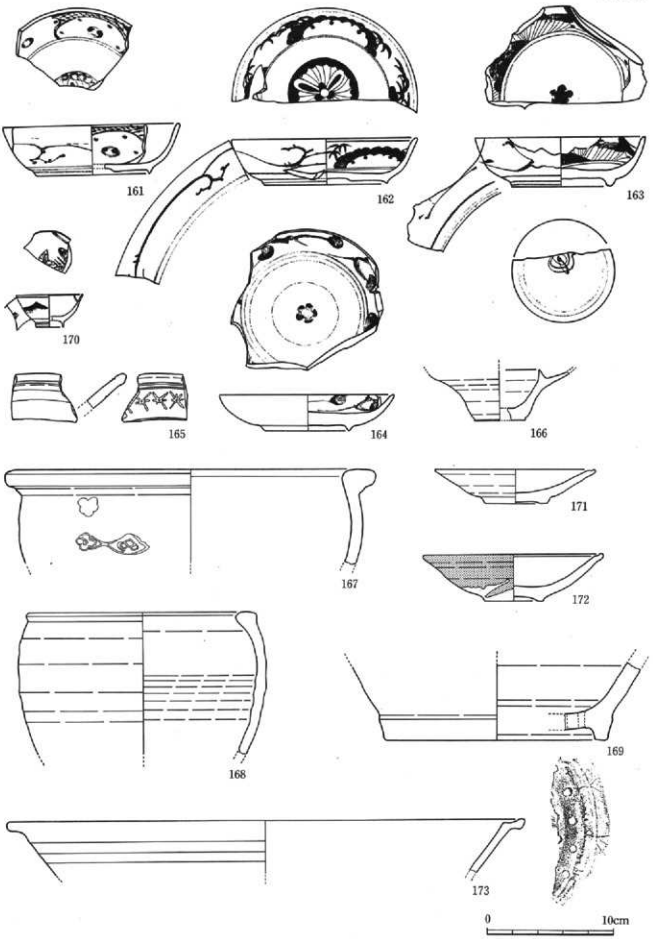
第38図　遺物実測図(11)土器



第39図　遺物実測図(12)土器



第40図　遺物実測図(13)土器



第41図　遺物実測図(14)土器

1

「南無大日如来」

2

「南無大日如来」

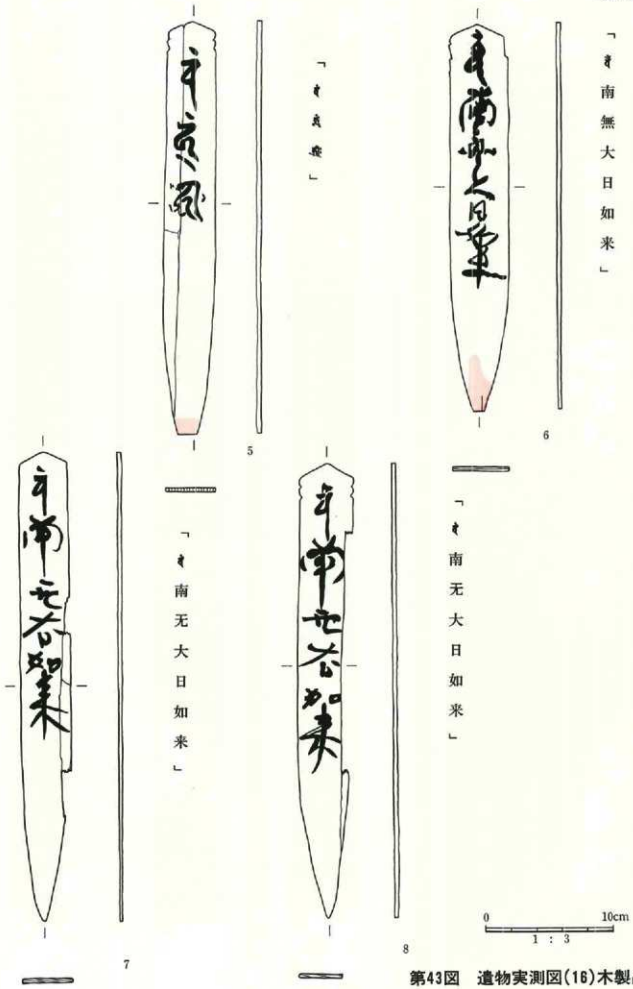
3

「南□如来」
「南無大日如来」

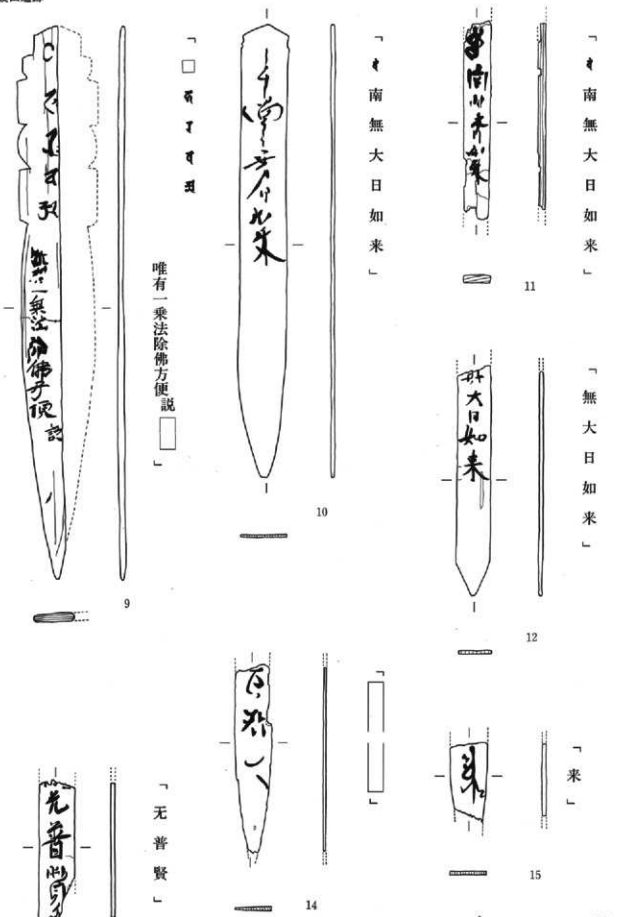
4

0　10cm
1：3

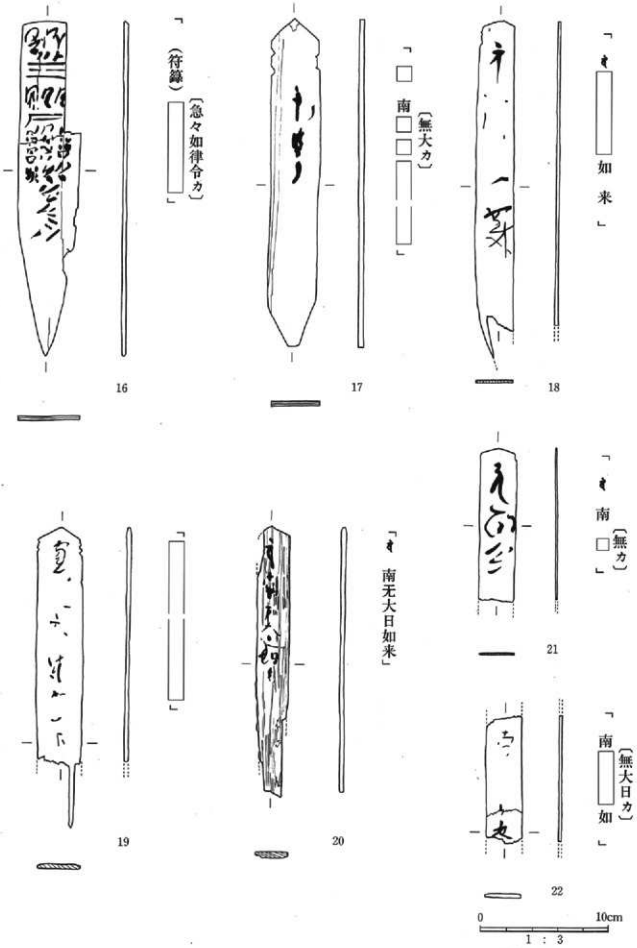
第42図　遺物実測図(15)木製品



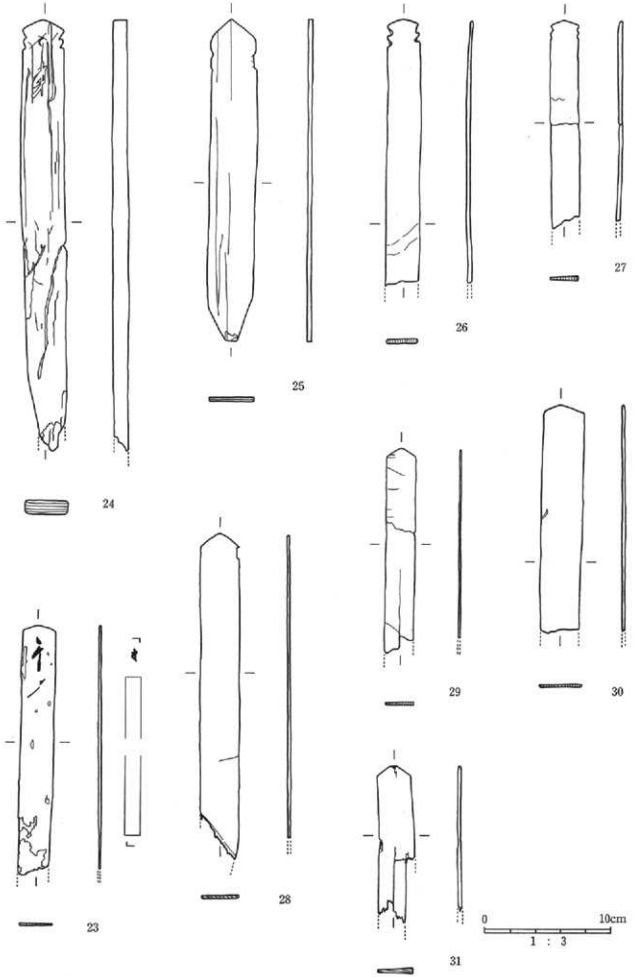
第43図　遺物実測図(16)木製品



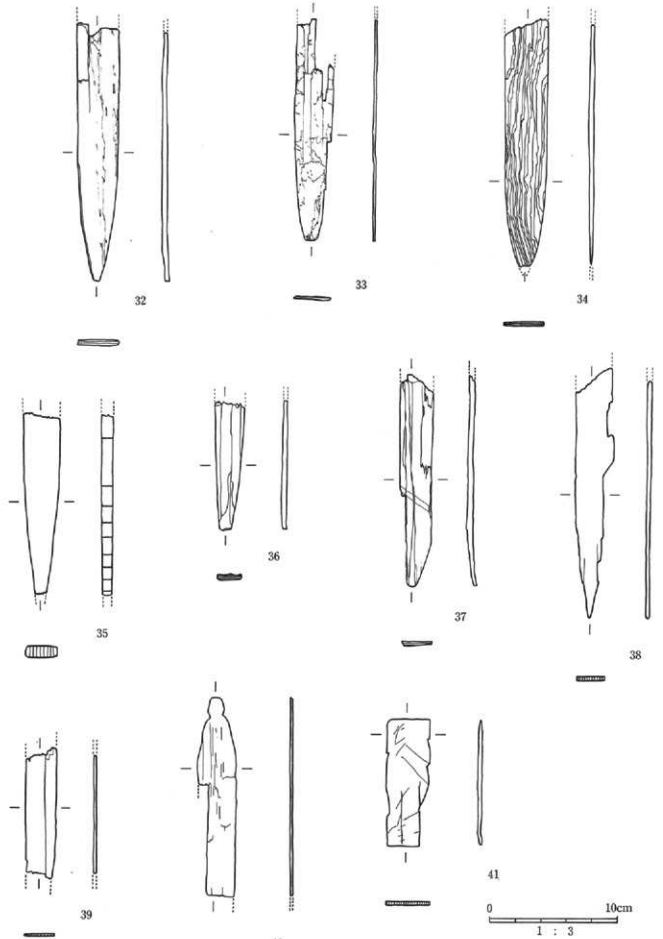
第44図　遺物実測図(17)木製品



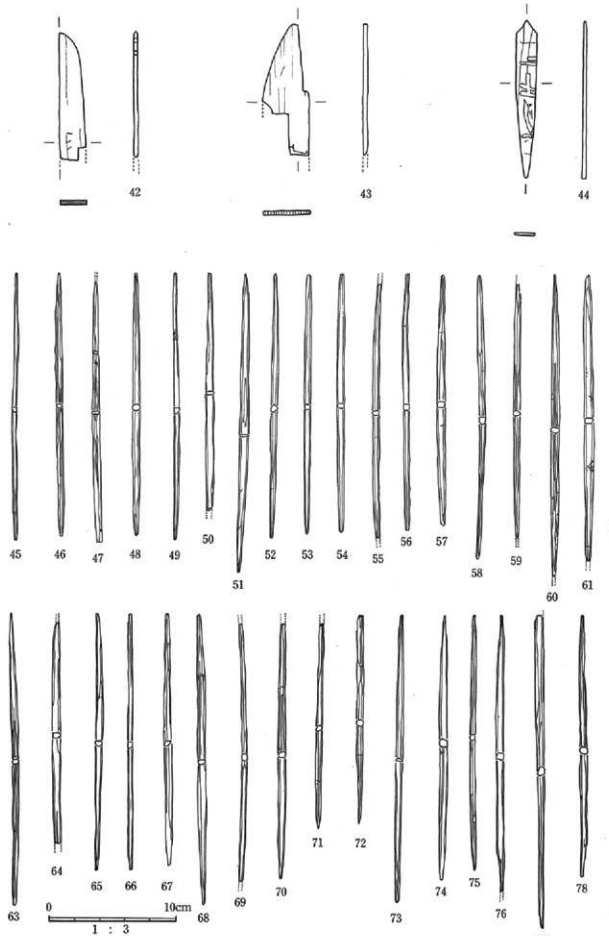
第45図　遺物実測図(18)木製品



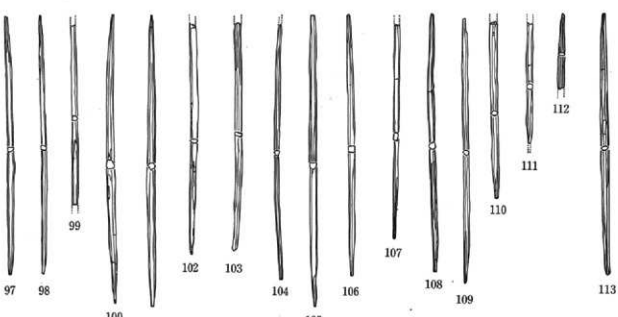
第46図　遺物実測図(19)木製品



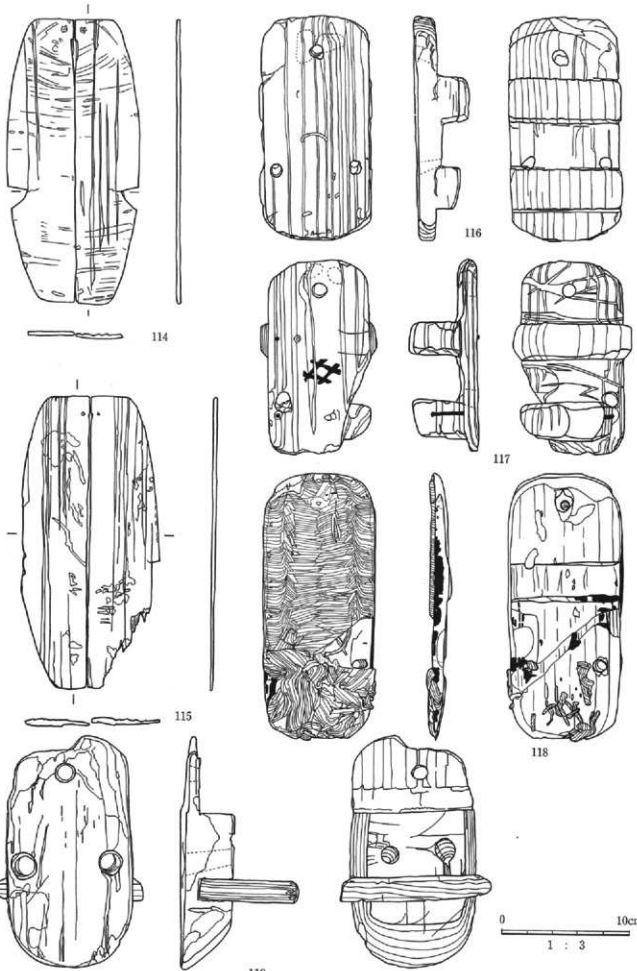
第47図　遺物実測図(20)木製品



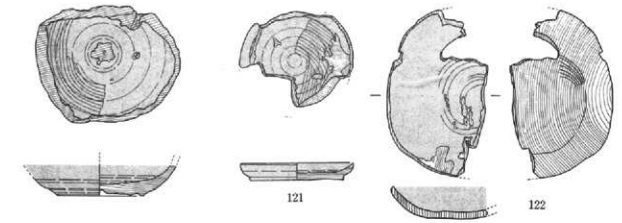
第48図　遺物実測図(21)木製品

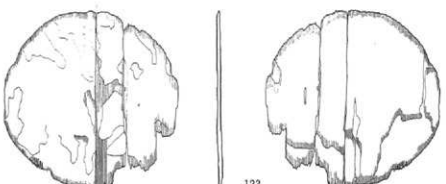


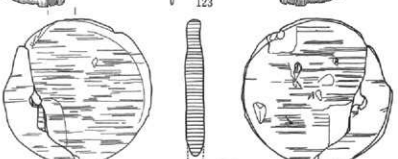
第49図　遺物実測図(22)木製品

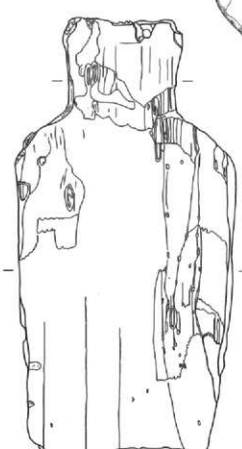


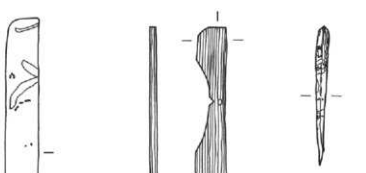
第50図　遺物実測図(23)木製品

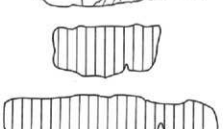








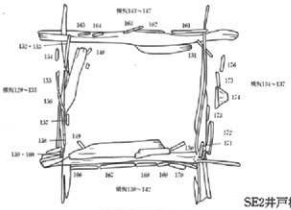




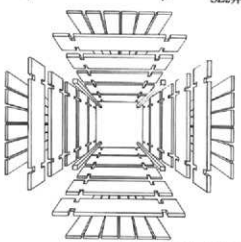
0 10cm
1 : 3

※123は1:6、125は1:4

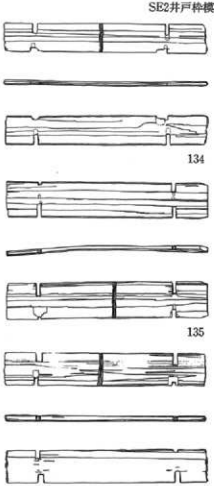
第51図　遺物実測図(24)木製品

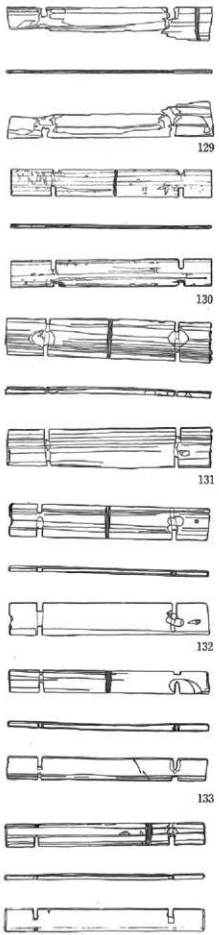


SE2井戸枠

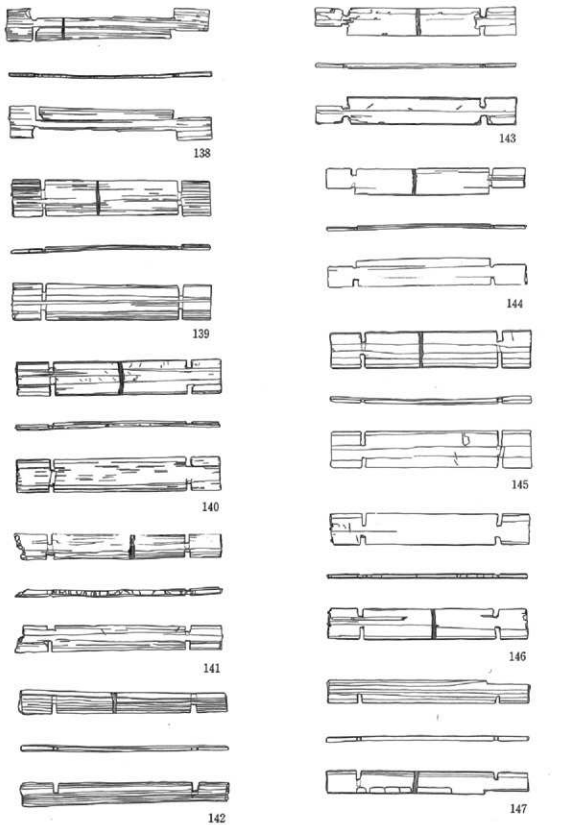


SE2井戸枠模式図

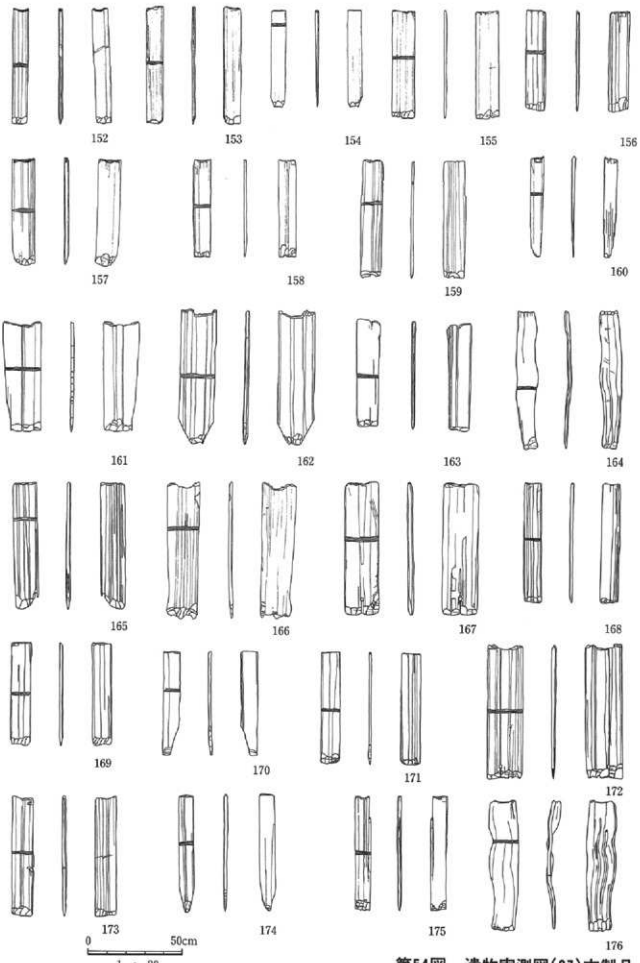




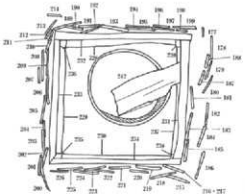
第52図　遺物実測図(25)木製品



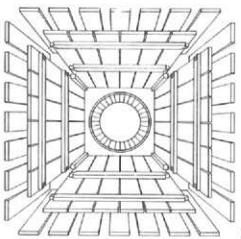
第53図　遺物実測図(26)木製品



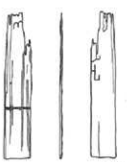
第54図　遺物実測図(27)木製品

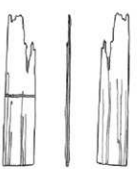


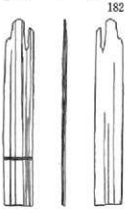
SE45井戸枠

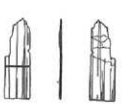


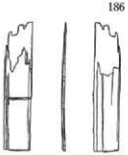
SE45井戸枠模式図

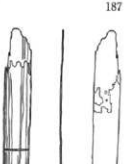

182

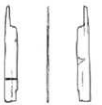

183


186

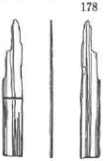

187

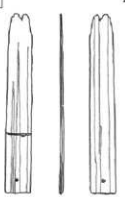

190

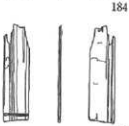

191

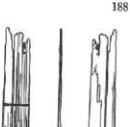

177

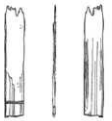
178

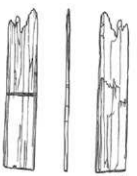

180

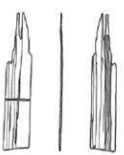

184

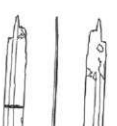

188

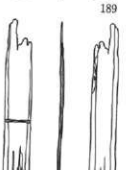

192


179


181

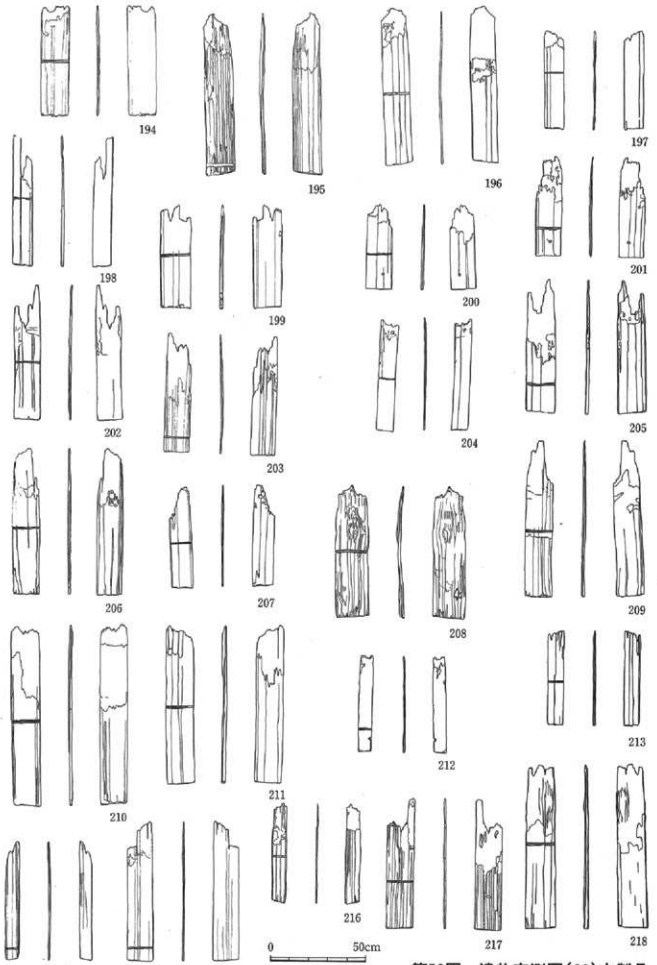

185


189

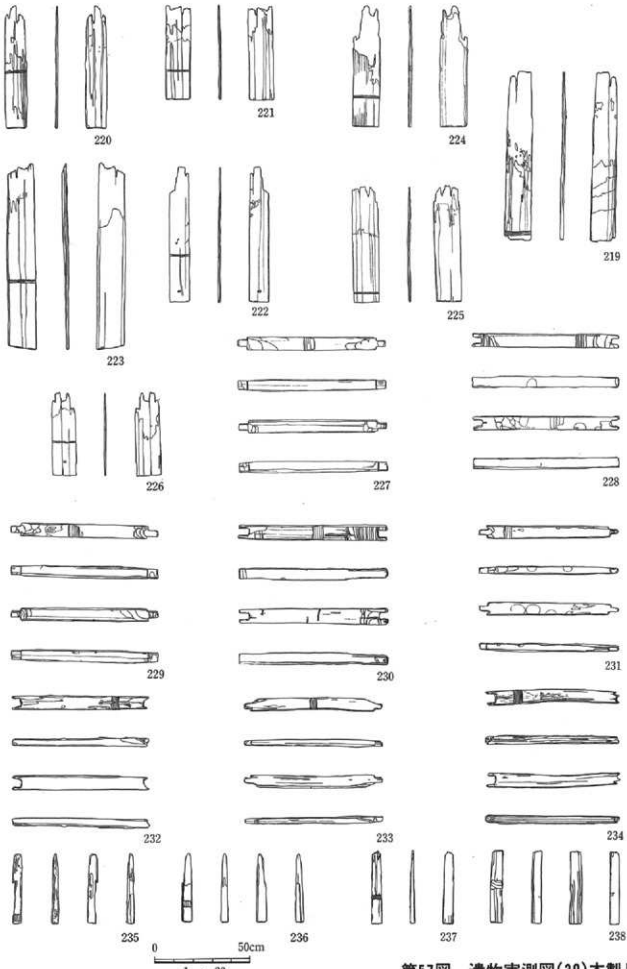

193

0 50cm
1 : 20

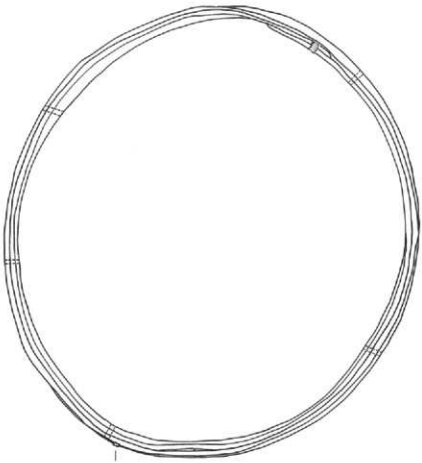
第55図　遺物実測図(28)木製品

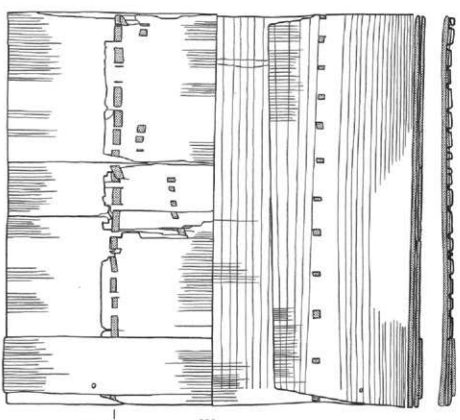


第56図　遺物実測図(29)木製品



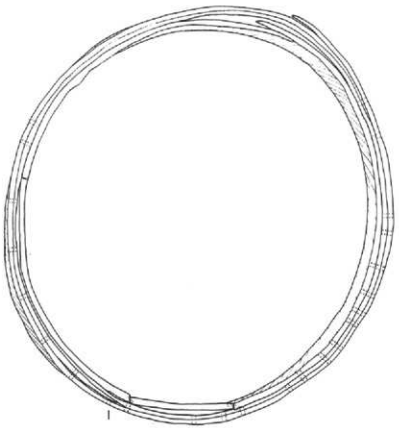
第57図　遺物実測図(30)木製品

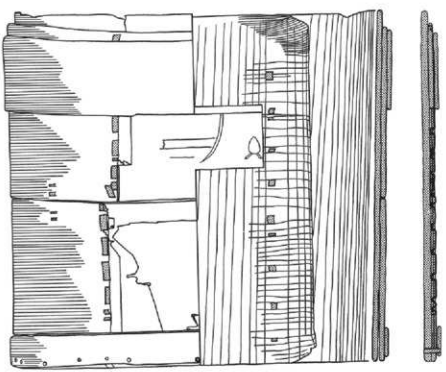




0 20cm
1 : 6

第58図　遺物実測図(31)木製品

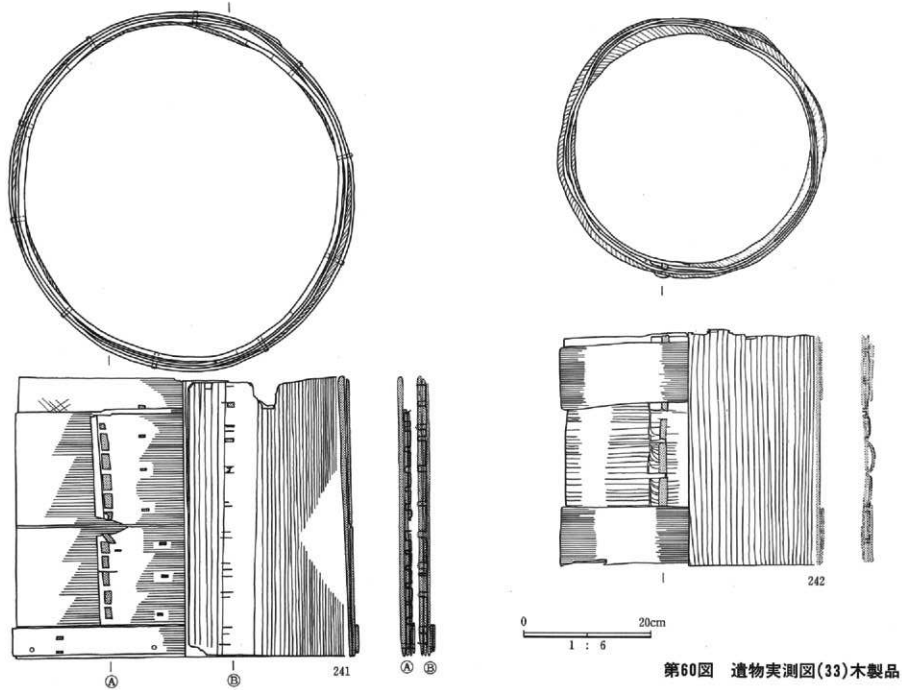




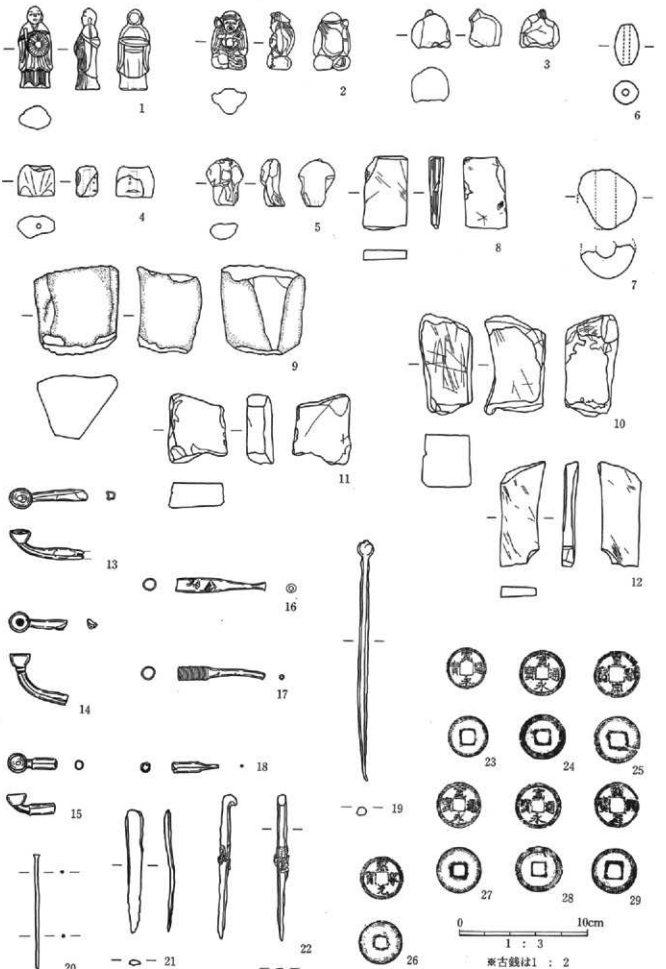
240

0 20cm
1 : 6

第59図　遺物実測図(32)木製品



第60図　遺物実測図(33)木製品



第61図　遺物実測図(34)土製品

表－2　後田遺跡土器観察表(1)

挿図番号	遺物番号	種	別	器	種	計測値 口径	計測値 器高	計測値 底径	計測値 器厚	調整及び技法 外面	調整及び技法 内面	調整及び技法 底部	出土地点	RPNo	備考	図版番号
第29図	1	土師器		坏		(13.5)	4.4	6.2	7	ナデ ミガキ	ミガキ	ミガキ	ST1Y	RP68	内黒	26
第29図	2	土師器		坏		14.8	6.0	5.4	7	ナデ ミガキ ケズリ	ミガキ	ケズリ ミガキ	ST1F1	RP1	内黒	26
第29図	3	土師器		甕		(16.2)		(8.0)	7	ミガキ	ナデ		ST1F1		直口壺	26
第29図	4	土師器		甕		(14.0)	4.5	(15.6)	5	ハケメ	ハケメ ナデ	ケズリ ハケメ	ST1Y			26
第29図	5	土師器		甕		13.4	(4.6)	13.2	6	ナデ ケズリ ハケメ	ナデ		ST1YF1	RP69		26
第29図	6	土師器		蓋		10.4	5.0	12.9	6	ナデ ハケメ	ナデ	ナデ	ST1Y	RP69		26
第29図	7	土師器		甕		(15.5)		(6.2)	7	ナデ ハケメ	ハケメ ナデ		64-9グリッド	RP32		26
第29図	8	土師器		坏		14.6	4.3	5.2	7	ミガキ	ミガキ	ミガキ ケズリ	57-17グリッド	RP76		26
第29図	9	土師器		坏				(5.0)	6	ミガキ	ミガキ		SI884			26
第29図	10	土師器		甕		(14.6)		(10.0)	8	ナデ ハケメ	ハケメ ナデ		64-9グリッド	RP32		26
第29図	11	土師器		坏		(14.5)		(5.0)	6	ミガキ	ミガキ ケズリ		SK43			26
第29図	12	土師器		甕		(14.0)		(4.7)	7	ナデ ハケメ	ナデ ハケメ		SD3F4			26
第29図	13	土師器		甕		(22.5)		(5.0)	8	ナデ	ナデ		SD311F1			30
第29図	14	赤焼土器		坏		13.5	5.0	5.3	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SE2F②	RP33	底部墨書「虎」	27
第29図	15	赤焼土器		坏		(13.2)	5.4	6.9	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SE2F1			27
第29図	16	赤焼土器		坏		(11.2)	(5.5)	6.9	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SE2F2			27
第29図	17	赤焼土器		坏		(11.7)		(5.2)	5	ロクロ	ロクロ		SE2F1			27
第29図	18	赤焼土器		坏		13.6	5.7	5.8	5	ロクロ	ロクロ	磨滅により不明	SE2F2			27
第29図	19	赤焼土器		坏		12.8	4.2	5.2	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り→	SE2F1			27
第29図	20	土師器		高台付坏			(6.0)	(7.0)	6	ロクロ			SE2F2		内黒	26
第29図	21	赤焼土器		甕				(5.0)	10	タタキ	アテ		SE2F1			27
第29図	22	黒色土器		甕				(7.0)	8	タタキ	アテ		SE2F1			27
第29図	23	赤焼土器		坏		(14.0)		(5.4)	5	ロクロ	ロクロ		SE4F2			27
第29図	24	黒色土器		甕				(7.7)	9	タタキ	アテ底		SE4			27
第29図	25	黒色土器		坏		(14.4)	5.0	4.5	4	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	EP86(SB6)			27
第29図	26	赤焼土器		坏		(13.0)		(5.2)	4	ロクロ	ロクロ		EP95(SB6)			27
第30図	27	黒色土器		甕				(10.6)	7	タタキ	アテ		EP214(SB6)			28
第30図	28	赤焼土器		坏			(4.5)	(3.0)	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	EP110(SB6)	RP119	底部墨書	28
第30図	29	赤焼土器		坏		(13.0)		(5.2)	5	ロクロ	ロクロ		EP111(SB6)			27
第30図	30	黒色土器		甕				(9.6)	10	タタキ	アテ		SE27F①			28
第30図	31	黒色土器		甕				(5.6)	16	タタキ	アテ		SE36F2			28
第30図	32	赤焼土器		鉢		(42.0)		(15.5)	10	ロクロ	ロクロ		SE45F2			27
第30図	33	黒色土器		皿		(14.0)		(7.0)	7	ロクロ	ロクロ		SE45			28
第30図	34	赤焼土器		坏		(13.0)		(4.6)	6	ロクロ	ロクロ		SE45F1			27
第30図	35	黒色土器		皿				(9.6)	9		ロクロ		SE45F2			28
第31図	36	黒色土器		坏		12.9	5.0	4.8	6	ロクロ	ロクロ ミガキ	回転糸切り	SK23	RP17		29
第31図	37	赤焼土器		坏		13.2	5.3	6.0	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK23F3	RP25		28
第31図	38	赤焼土器		坏			3.5	(2.3)	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK23F3	RP26		28
第31図	39	赤焼土器		甕		(29.6)		(10.0)	6	ロクロ	ロクロ		SK42			28
第31図	40	赤焼土器		甕				(10.1)	7	タタキ	アテ		SK44		内面煤付着	28
第31図	41	黒色土器		甕				(4.5)	7	タタキ	アテ		SK44			29
第31図	42	黒色土器		坏		(12.2)	(3.8)	5.2	8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD22	RP42		28
第31図	43	黒色土器		坏		(13.2)	(3.3)	5.2	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD51			29
第31図	44	赤焼土器		鉢				(3.0)	(6)				SK48F1			29

表－2　後田遺跡土器観察表(2)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値 口径	底径	器高	胎厚	調整及び装飾 外面	内面	底部	出土地点	RP No	備考	図版番号
第31図	45	土師器	坏	170	60	68	6	ロクロ	ミガキ	回転糸切り	SK21		内黒	28
第31図	46	須恵器	壺			(70)	9	タタキ	アテ		SD57			29
第31図	47	須恵器	壺			(42)	8	ロクロ	ロクロ		SD55		長頸壺	29
第31図	48	須恵器	壺			(99)	16	タタキ	アテ		SD58P2	RP73		29
第31図	49	須恵器	壺			(65)	15.5	タタキ	アテ		SD58P2	RP73		29
第31図	50	須恵器	壺			(64)	10	タタキ	アテ		SD31F1			29
第32図	51	赤焼土器	坏	(120)	(50)	50	7	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK68		口縁部に煤付着	29
第32図	52	赤焼土器	坏	(130)		(44)	4	ロクロ	ロクロ		SK68			30
第32図	53	赤焼土器	坏	(150)		(46)	5	ロクロ	ロクロ		SK68F1			30
第32図	54	須恵器	壺			(33)	7	ロクロ	ロクロ		SK68			30
第32図	55	赤焼土器	壺			(36)	11	タタキ	アテ		SD69			29
第32図	56	須恵器	壺			(39)	10	タタキ	アテ		SK68	RP29		30
第32図	57	須恵器	壺			(63)	11	タタキ	アテ		SK68	RP37		30
第32図	58	土師器	坏	129	54	52	7	ロクロ	ミガキ	回転糸切り	SD69		内黒　体部「火」墨書	30
第32図	59	赤焼土器	坏	136	52	46	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD69	RP38		29
第32図	60	赤焼土器	坏		(62)	(29)	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD69	RP28		29
第32図	61	須恵器	壺			(34)	7	タタキ	アテ		EP116F1(SD146)			30
第32図	62	赤焼土器	壺		86	(44)	13	ロクロ	ロクロ	静止糸切り	EP84	RP33	回転糸切り後付け足し	29
第32図	63	赤焼土器	坏	(142)		(46)	5	ロクロ	ロクロ		EP84			29
第32図	64	赤焼土器	坏	122	56	46	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK364F6	RP182	底部墨書「平」	30
第33図	65	赤焼土器	坏	126	52	43	5	ロクロ	ロクロ	調整の為不明	SD377F1	RP183		30
第33図	66	赤焼土器	坏	(122)	56	56	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD323			30
第33図	67	須恵器	壺			(88)	11	タタキ	アテ		SK279F2			30
第33図	68	須恵器	壺			(30)	7	タタキ	アテ		SD311			31
第33図	69	土師器	壺			(102)	6	ハケメ	ハケメ		SK359F1			26
第33図	70	赤焼土器	坏	131	48	52	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F3	RP189-1		31
第33図	71	赤焼土器	坏	123	52	50	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F1	RP189		31
第33図	72	赤焼土器	坏	(120)	52	50	3	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F1			31
第33図	73	赤焼土器	坏	129	53	45	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F1	RP187		31
第33図	74	赤焼土器	皿	132	50	35	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F1		半分火を受けた痕あり	31
第33図	75	赤焼土器	皿	132	50	34	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F3	RP189-2	半分火を受けた痕あり	31
第33図	76	赤焼土器	坏	(153)	(57)	60	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SK359F1			31
第33図	77	赤焼土器	壺			(103)	9	ロクロ	ロクロ　ハケメ		SK359F1	RP188		31
第34図	78	須恵器	蓋			(34)	12	ロクロ			SD3F1			31
第34図	79	須恵器	壺		(100)	(98)	13	タタキ	ロクロ		SD3F1			31
第34図	80	須恵器	壺			(92)	9	タタキ	アテ		SD3F1			32
第34図	81	赤焼土器	壺	(212)		(57)	14	ロクロ	ロクロ		SD3F1			32
第34図	82	赤焼土器	鉢	(320)		(37)	15	ロクロ	ロクロ		SD3F1			32
第34図	83	赤焼土器	壺			(35)	13	ロクロ	ロクロ		SD3F1			32
第34図	84	灰釉陶器	皿	(76)				ロクロ			SD3F3		乳白色釉	31
第34図	85	須恵器	壺			(67)	11	タタキ	アテ		SD3F2			32
第34図	86	須恵器	壺			(76)	10	ロクロ	ロクロ		SD3F2			31
第34図	87	須恵器	壺			(72)	11	タタキ	アテ		SD3F3			32
第34図	88	須恵器	壺			(97)	12	タタキ	アテ		SD3F3	RP92		32

表－2　後田遺跡土器観察表(3)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値				調整及び装飾			出土地点	RPNo	備考	図版番号
				口径	底径	器高	器厚	外面	内面	底部				
第34図	89	須恵器	甕			(40)	11	タタキ	ロクロ　アテ		SD3F3			32
第35図	90	須恵器	坏		(67)	(25)	6	ロクロ	ロクロ	ヘラ切りカ	SD3F4			32
第35図	91	須恵器	高台付碗		60	(30)	5	ロクロ	ロクロ		SD3F4			33
第35図	92	須恵器	蓋			(32)	(8)	ロクロ	ロクロ		SD3F4	RP115		32
第35図	93	須恵器	坏		58	(13)	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD3F4			32
第35図	94	須恵器	壺		(80)	(21)	9	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD3F4			32
第35図	95	須恵器	蓋	(146)		(25)	6	ロクロ	ロクロ		SD3F4			32
第35図	96	須恵器	壺			(22)	12	ロクロ	ロクロ	静止糸切り	SD3F4			33
第35図	97	黒色土器	坏	(127)	(76)	33	6	ロクロ	ミガキ	ヘラ切り	SD3F4			33
第35図	98	須恵器	壺	(141)		(54)	10	ロクロ	ロクロ		SD3F4		短頸壺	33
第35図	99	須恵器	甕			(87)	18	タタキ	アテ		SD3F4			33
第35図	100	須恵器	甕			(45)	10	タタキ	アテ		SD3F4			33
第35図	101	須恵器	甕			(73)	14	タタキ	アテ		SD3F4			33
第35図	102	須恵器	甕			(71)	10	タタキ	アテ		SD3F4			33
第36図	103	赤焼土器	高台付皿	(130)	74	32	6	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	SD3F4	RP114		33
第36図	104	赤焼土器	甕		68	(36)	10	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	SD3F4			33
第36図	105	赤焼土器	坏		(60)	(17)	(4)		ロクロ	回転糸切り	SD3F4		底部墨書「貞」	33
第36図	106	赤焼土器	坏		51	(10)	(6)	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SD3F4		底部墨書「野」	33
第36図	107	赤焼土器	坏			(21)	5	ロクロ	ロクロ		SD3F4		体部墨書	33
第36図	108	須恵器	坏	(136)	60	34	6	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	SD3F5			33
第36図	109	須恵器	壺			(65)	9	ロクロ	ロクロ		SD250F2			33
第36図	110	須恵器	坏	(124)	85	28	4	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	SD271F1	RP177		34
第36図	111	須恵器	坏	(134)	(72)	30	5	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	SD271F1	RP180		34
第36図	112	須恵器	坏	128	70	33.5	4	ロクロ	ロクロ	ヘラ切り	SD271F1	RP178		34
第36図	113	赤焼土器	坏		50	(36)	5	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	59-16グリッド		体部墨書	34
第36図	114	赤焼土器	坏		60	(29)	6	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	36-12Ⅲグリッド			34
第36図	115	須恵器	壺		(62)	(68)	8	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	SG271	RP179	内部付着物あり	34
第36図	116	須恵器	双耳坏				6				51-15Ⅲグリッド			34
第37図	117	珠洲系陶器	甕			(42)	14	タタキ			SD3F1			34
第37図	118	珠洲系陶器	擂鉢			(47)	9		卸し目		SD3F1			35
第37図	119	珠洲系陶器	擂鉢		(210)	(51)	(21)	ロクロ	卸し目		SD3F1			35
第37図	120	珠洲系陶器	擂鉢			(37)	15		卸し目		SD3F1			35
第37図	121	珠洲系陶器	甕			(76)	12.5	タタキ	アテ		SD3F1			34
第37図	122	珠洲系陶器	甕			(80)	17	タタキ	アテ		SD3F1			34
第37図	123	珠洲系陶器	甕			(43)	10	タタキ	アテ		SD3F2			34
第37図	124	珠洲系陶器	擂鉢			(43)	18	ロクロ	卸し目		SD3F3			35
第37図	125	珠洲系陶器	擂鉢	(300)		(45)	13	ロクロ	ロクロ　卸し目		SD3F3			35
第37図	126	珠洲系陶器	甕			(112)	11	タタキ	アテ		SD3F3			34
第37図	127	青磁	壺	(127)		(20)	5				SD3F2		貫入	巻頭
第37図	128	青磁	碗			(32)	4				SD3F3			巻頭
第37図	129	青磁	碗			(40)	5	鎬蓮弁文			SD3F4			巻頭
第37図	130	かわらけ	皿	(98)	(47)	16	4	ロクロ　指頭痕あり	ロクロ		SD3F3		内面油脂付着	巻頭
第37図	131	かわらけ	皿	97	(66)	(15)	8	指頭痕あり	ヘラ		SD3F3		手づくね	巻頭
第38図	132	珠洲系陶器	甕			(95)	12	タタキ	アテ		SD3F4			35

表－2　後田遺跡土器観察表(4)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値 口径	底径	器高	器厚	調整及び技術 外面	内面	底部	出土地点	RP No.	備考	図版番号
第38図	133	陶磁系陶器	壺			(34)	14	タタキ	アテ		SD3F4			35
第38図	134	陶磁系陶器	擂鉢			(54)	11	ロクロ	卸し目		SD3F4			35
第38図	135	陶磁系陶器	壺			(61)	12	タタキ	アテ		SD3F4			36
第38図	136	陶磁系陶器	擂鉢			(37)	10	ロクロ	ロクロ		SD3F4			35
第38図	137	陶磁系陶器	擂鉢		(130)	(25)	15		卸し目	静止糸切り	SD3F4			35
第38図	138	陶磁系陶器	壺			(60)	12	タタキ	アテ		SD3F4			36
第38図	139	陶磁系陶器	壺			(73)	12	タタキ	アテ		SD3F4			36
第38図	140	陶磁系陶器	壺			(86)	15	タタキ	アテ		SD3F4			36
第38図	141	陶磁系陶器	壺			(61)	13	タタキ	アテ		SD3F4			36
第39図	142	中世陶器	皿	(116)	(76)	38	7	ロクロ	卸し目		SD3		瀬戸・美濃系	39 巻頭
第39図	143	陶磁系陶器	壺		(114)	(65)	17	ロクロ	ロクロ		SP11F1			38
第39図	144	陶磁系陶器	擂鉢			(42)	17	ロクロ	卸し目	静止糸切り	SE2F2			38
第39図	145	陶磁系陶器	壺			(69)	15	ロクロ タタキ	アテ		SE2F2			37
第39図	146	青磁	碗			(31)	7	鎬蓮弁文			SE28F2			巻頭
第39図	147	陶磁系陶器	壺			(32)	13	タタキ	アテ		SE28F1			38
第39図	148	陶磁系陶器	擂鉢			(36)	12	ロクロ	卸し目		SE36F1			38
第39図	149	陶磁系陶器	壺			(116)	15	タタキ	アテ		SE36F④			36
第39図	150	陶磁系陶器	擂鉢			(55)	13	ロクロ	卸し目		SE45P①			38
第39図	151	陶磁系陶器	擂鉢			(35)	10	ロクロ	ロクロ		SE45			37
第39図	152	青磁	碗			(31)	10	画花文			SK47			巻頭
第39図	153	青磁	小碗			(22)	4		鎬蓮弁文		SD335			巻頭
第40図	154	陶磁系陶器	壺			(48)	14	タタキ	アテ		SK48F1			36
第40図	155	陶磁系陶器	擂鉢			(60)	11	ロクロ	卸し目		SK51F1			38
第40図	156	陶磁系陶器	壺			(106)	13	タタキ	アテ		SD31F1	RP79		37
第40図	157	陶磁系陶器	擂鉢		(120)	(47)	13	ロクロ 指頭痕あり	卸し目	静止糸切り	SD37	RP75		37
第40図	158	陶磁系陶器	擂鉢			(49)	9	ロクロ	卸し目		SP115F1			37
第40図	159	陶磁系陶器	壺			(97)	13	タタキ	アテ		SP129			36
第40図	160	陶磁系陶器	擂鉢			(46)	15	ロクロ	卸し目		57-11グリッド	RP30		37
第41図	161	近世磁器	五寸鉢	(130)	(86)	39	5	つなぎ唐草	永圏丸底	蛇ノ目高台	SD3F3		肥前系	39 巻頭
第41図	162	近世磁器	五寸鉢	(142)	(94)	36.5	4	つなぎ唐草	松竹梅	蛇ノ目凹形高台	SD3F2		肥前系	39 巻頭
第41図	163	近世磁器	皿	(133)	(79)	39	5	つなぎ唐草	松竹梅	渦福	SD3F3		肥前系	39 巻頭
第41図	164	近世磁器	五寸皿	(133)	(65)	(29)	5		松竹梅		SD3F4		肥前系	39 巻頭
第41図	165	近世陶器	鉢			(29)	7	ロクロ	象嵌		SD3F1		三島手様式	39 巻頭
第41図	166	近世陶器	擂		38	(40)	6	ロクロ	ロクロ		SD3F3		在地産か	39 巻頭
第41図	167	瓦器	火鉢	(230)		(74)	10	ロクロ 花文スタンプ	ロクロ		SD3		内面火はね有	39 巻頭
第41図	168	近世陶器	焙烙しゃ	(170)		(112)	7	ロクロ	ロクロ		SD3F3		大堂寺焼	39 巻頭
第41図	169	近世陶器	焙烙し		(172)	(90)	12	ロクロ	ロクロ		SD3F4		大堂寺焼	39 巻頭
第41図	170	近世磁器	猪口	(52)	(23)	25	2	色絵	遠山草花		19-12グリッド		瀬戸・美濃系	39 巻頭
第41図	171	近世陶器	皿	126	52	26	9	ロクロ			21-18Bグリッド		唐津焼 貫入	39 巻頭
第41図	172	近世陶器	皿	142	66	37	6	ロクロ			23-12グリッド		灰釉	39 巻頭
第41図	173	近世陶器	鉢	(140)		(42)	6.5	ロクロ	ハケメ		57-11グリッド	RP74	唐津焼	39 巻頭

表－3　後田遺跡木製品観察表(１)

挿図番号	遺物番号	種　別	計測値 長さ	幅・径	厚さ	出土地点	RFNo	備　考	図版番号
第42図	1	笹塔婆	339	38	3	SD3F3	RW4	(A)b型式(以下同じ)	39
第42図	2	笹塔婆	270	37		SD3F4	RW156	(A)b	39
第42図	3	笹塔婆	(211)	33	2	SD3F3	RW12	(A)g	39
第42図	4	笹塔婆	336	29	3	SD3F4	RW9	(A)b	39
第42図	5	笹塔婆	330	39	4	SD3F3	RW85	(A)b	39
第43図	6	笹塔婆	309	46	4	SD3F3	RW83	(A)b	39
第43図	7	笹塔婆	370	40	3	SD3F3	RW84	(A)a	40
第43図	8	笹塔婆	360	34	3	SD3F3	RW86	(A)b	40
第44図	9	五輪塔婆	296	(21)	3	SD3F4	RW136	(A)c	41
第44図	10	笹塔婆	363	37	3	SD3F4	RW14	(A)b	40
第44図	11	笹塔婆	(150)	21	6	SD3	RW3	(A)h	40
第44図	12	笹塔婆	(180)	27	3	SD3	RW6	(A)g	40
第44図	13	笹塔婆	(108)	28	3	SD3Gトレ下2		(A)h	40
第44図	14	笹塔婆	(149)	29	2	SD3	RW155	(A)g	40
第44図	15	笹塔婆	(57)	29	3	SD3F3	RW16	(A)h	40
第45図	16	曳背	(180)	33	3	SD3F4	RW18	(A)d	41
第45図	17	笹塔婆	255	36	4	SD3	RW168	(A)b	41
第45図	18	笹塔婆	(246)	29	3	SD3	RW48	(A)e	41
第45図	19	笹塔婆	(187)	35	3	SD3F4	RW164	(A)f	41
第45図	20	笹塔婆	(210)	25	3	SD3F3	RW87	(A)e	41
第45図	21	笹塔婆	(120)	28	2	SD3	RW7	(A)e	41
第45図	22	笹塔婆	(100)	27	3	SD3	RW89	(A)h	41
第46図	23	笹塔婆	(341)	34	3	SD3F4	RW151	(A)e	42
第46図	24	笹塔婆	256	36	11	SD3	RW51	(B)f	42
第46図	25	笹塔婆	(108)	27	3	SD3	RW27	(B)b	42
第46図	26	笹塔婆	(163)	23	3	SD3F3	RW13	(B)f	42
第46図	27	笹塔婆	(194)	26	2	SD3F2		(B)f	42
第46図	28	笹塔婆	(257)	30	2	SD3F4	RW88	(B)e	42
第46図	29	笹塔婆	(160)	23	2	SD3F3	RW11	(B)e	42
第46図	30	笹塔婆	(176)	33	2	SD3F4	RW20	(B)e	42
第46図	31	笹塔婆	(123)	23	3	SD3	RW49(上)	(B)e	42
第47図	32	笹塔婆	(207)	31	5	SD3		(B)g	43
第47図	33	笹塔婆	(177)	28	2	SD3		(B)g	43
第47図	34	笹塔婆	(191)	27	5	SD3F3	RW19	(B)g	43
第47図	35	笹塔婆	(142)	25	9	SD3F4	RW160	(B)g	43
第47図	36	笹塔婆	(102)	19	4	SD3	RW61	(B)g	43
第47図	37	笹塔婆	(168)	25	5	SD3F4	RW88	(B)g	43
第47図	38	笹塔婆	(194)	22	3	SD3	RW49(下)	(B)g	43
第47図	39	笹塔婆	(102)	23	2	SD3F3	RW13	(B)h	43
第47図	40	笹塔婆	155	31	2	SD3	RW5	(B)i	43
第47図	41	笹塔婆	99	34	2	SD3	RW57	(B)i	43
第48図	42	刀形	(99)	21	3	SD3F4	RW158	(B)i	44
第48図	43	刀形	(102)	37	3	SD3F3	RW157	(B)i	44
第48図	44	笹塔婆	125	16	2	SK23	RW24	(B)a	44
第48図	45	箸状木製品	212	4	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	46	箸状木製品	208	5.5	3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	47	箸状木製品	(206)	6.5	3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	48	箸状木製品	207	6.5	5.8	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	49	箸状木製品	210	4.5	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45

表－3　後田遺跡本製品観察表（2）

挿図番号	遺物番号	種　別	計測値 長さ	幅・厚	厚さ	出土地点	RPNo	備　考	図版番号
第48図	50	管状木製品	(188)	6	3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	51	管状木製品	236	7.5	1.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	52	管状木製品	209	5.5	6	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	53	管状木製品	205	4.5	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	54	管状木製品	204	6	3.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	55	管状木製品	(201)	5.5	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	56	管状木製品	202	4.5	5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	57	管状木製品	198	6.5	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	58	管状木製品	224	5.5	7.3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	59	管状木製品	(200)	5.8	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	60	管状木製品	236	7	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	61	管状木製品	235	7.3	4.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	62	管状木製品	191	5.9	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	63	管状木製品	231	5.5	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	64	管状木製品	(175)	6	4.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	65	管状木製品	203	5.9	4.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	66	管状木製品	202	3.8	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	67	管状木製品	199	5.8	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	68	管状木製品	229	5.8	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	69	管状木製品	(203)	4.5	6	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	70	管状木製品	(201)	6	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	71	管状木製品	(164)	5	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	72	管状木製品	165	5.5	5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	73	管状木製品	227	5.9	2	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	74	管状木製品	208	6	7.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	75	管状木製品	202	4.4	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	76	管状木製品	(218)	7	6	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	77	管状木製品	(240)	6	7.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	78	管状木製品	206	6	5.9	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第48図	79	管状木製品	227	7	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	80	管状木製品	(233)	4	6.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	81	管状木製品	(196)	5.9	5.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	82	管状木製品	205	5.5	3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	83	管状木製品	207	6	5.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	84	管状木製品	(236)	4	6	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	85	管状木製品	203	5.5	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	86	管状木製品	224	3.8	3.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	87	管状木製品	(173)	5.8	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	88	管状木製品	187	6	6	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	89	管状木製品	(160)	6.5	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	90	管状木製品	(280)	6.8	5.9	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	91	管状木製品	200	6.8	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	92	管状木製品	224	7	5.8	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	93	管状木製品	233	5.8	4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	94	管状木製品	237	6	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	95	管状木製品	226	5.9	4.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	96	管状木製品	202	4.5	6	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	97	管状木製品	204	5	3.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	98	管状木製品	203	4.5	4.3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45

表－3　後田遺跡木製品観察表(3)

挿図番号	遺物番号	種　別	計測値 長さ	計測値 幅・径	計測値 厚さ	出土地点	RPNo	備　考	図版番号
第49図	99	箸状木製品	(142)	4.4	3.8	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	100	箸状木製品	228	6.3	7.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	101	箸状木製品	230	5.9	5.9	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	102	箸状木製品	(182)	6.8	3.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	103	箸状木製品	(180)	5.8	3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	104	箸状木製品	(202)	3.8	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	105	箸状木製品	230	5.9	5.4	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	106	箸状木製品	207	5.3	5.3	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	107	箸状木製品	(169)	3.8	5.9	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	108	箸状木製品	203	5	5.8	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	109	箸状木製品	209	4.4	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	110	箸状木製品	(139)	6	4.2	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	110	箸状木製品	(139)	6	4.2	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	111	箸状木製品	(95)	5	4.5	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	112	箸状木製品	(60)	5.3	2	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第49図	113	箸状木製品	206	6	3.8	SD3F4	RW170	ケズリ	44,45
第50図	114	草履状木製品	225	(72)	3	SD3	RW2		46
第50図	115	草履状木製品	232	(104)	3	SD3F2	RW152		46
第50図	116	下駄	175	88	42	SD272	RW184	連歯	47
第50図	117	下駄	150	92	53	SD3	RW146	連歯　焼印「〃」鉄釘有	46
第50図	118	下駄	208	98	17	SD3	RW141	連歯　黒漆塗布	46
第50図	119	下駄	(183)	118	92	SD3F3	RW90	陰卯　差歯	46
第51図	120	漆器椀(挽物)	(230)	6.8	0.5	SD3	RW55	高台付　内外面黒漆塗付	45
第51図	121	漆器皿(挽物)	13	7.3	0.4	SD3		ベタ高台付　内外面黒漆塗布	45
第51図	122	漆器椀くり物	24		0.5	SD3	RW43	内面のみ黒漆塗付	45
第51図	123	曲物底板		27.4	0.5	SD271	RW191		47
第51図	124	曲物底板		(11.4)	0.9	SE2		穿孔	47
第51図	125	鋤	46	22.4	4.8	SK359	RW186		47
第51図	126	用途不明品	22.2	2.7	0.3		RW44		45
第51図	127	紡錘	12	2.3	0.4	SD3	RW163	中央に穿孔	44
第51図	128	針	10.8	0.7	0.3	SD3			44
第52図	129	井戸枠材	106.5	18	1.7	SE2		横板　西1	48
第52図	130	井戸枠材	105.8	14.6	1.5	SE2		横板　西2	48
第52図	131	井戸枠材	107.5	21	2.5	SE2		横板　西3	48
第52図	132	井戸枠材	105	17	2.2	SE2		横板　西4	48
第53図	133	井戸枠材	105	11	3.5	SE2		横板　西5	48
第52図	134	井戸枠材	106.5	15	2	SE2		横板　東2	48
第52図	135	井戸枠材	106	18.7	1.5	SE2		横板　東3	48
第52図	136	井戸枠材	106.3	16.9	2	SE2		横板　東4	48
第52図	137	井戸枠材	105.5	11.9	2.5	SE2		横板　東5	48
第53図	138	井戸枠材	106	17	1.8	SE2		横板　南1	49
第53図	139	井戸枠材	105.5	19.7	1.5	SE2		横板　南2	49
第53図	140	井戸枠材	107.5	18	1.8	SE2		横板　南3	49
第53図	141	井戸枠材	109	13.6	2.8	SE2		横板　南4	49
第53図	142	井戸枠材	109.5	13	3.4	SE2		横板　南5	49
第53図	143	井戸枠材				SE2		横板　北1	49
第53図	144	井戸枠材	105.7	14.2	0.9	SE2		横板　北2	49
第53図	145	井戸枠材	105.9	19	1.6	SE2		横板　北3	49
第53図	146	井戸枠材	106.3	16.2	2	SE2		横板　北4	49

表－３　後田遺跡木製品観察表(４)

掲図番号	遺物番号	種　別	計測値			出土地点	RFNo	備　考	図版番号
			長さ	幅・径	厚さ				
第53図	147	井戸枠材	106.3	11.2	2.4	SE2		横板 北5	49
第53図	148	井戸枠材	27	11.3	1.2	SE2		隅柱 北西	49
第53図	149	井戸枠材	29	7.7	1	SE2		隅柱 南西	49
第53図	150	井戸枠材	38.3	7.5	1.6	SE2		隅柱 南東	49
第53図	151	井戸枠材	37	9.5	1.6	SE2		隅柱 北東	49
第54図	152	井戸枠材	61	8.4	1.7	SE2		縦板 西1	50
第54図	153	井戸枠材	61.5	9	1.5	SE2		縦板 西1	50
第54図	154	井戸枠材	51.5	7.4	1	SE2		縦板 西2	50
第54図	155	井戸枠材	56.5	11.8	1.2	SE2		縦板 西3	50
第54図	156	井戸枠材	53.5	9.5	1.5	SE2		縦板 西4	50
第54図	157	井戸枠材	55.4	21	1.4	SE2		縦板 西5	50
第54図	158	井戸枠材	52	9	1.4	SE2		縦板 西6	50
第54図	159	井戸枠材	62.5	11.5	1.5	SE2		縦板 西7	50
第54図	160	井戸枠材	54	6.6	1.2	SE2		縦板 西7	50
第54図	161	井戸枠材	57	18.3	1.2	SE2		縦板 北1	50
第54図	162	井戸枠材	69.5	18.6	1	SE2		縦板 北2	50
第54図	163	井戸枠材	57.5	12	1.3	SE2		縦板 北3	50
第54図	164	井戸枠材	72	11.4	1.3	SE2		縦板 北4	50
第54図	165	井戸枠材	66.8	12.7	1.4	SE2		縦板 北5	50
第54図	166	井戸枠材	72	17	1.5	SE2		縦板 南1	50
第54図	167	井戸枠材	70	18	1.8	SE2		縦板 南2	50
第54図	168	井戸枠材	63	9.2	1.5	SE2		縦板 南3	50
第54図	169	井戸枠材	54.5	10	1.3	SE2		縦板 南4	50
第54図	170	井戸枠材	54.5	8.7	1.3	SE2		縦板 南5	50
第54図	171	井戸枠材	59	10	1.3	SE2		縦板 東1	50
第54図	172	井戸枠材	71	18.8	1.5	SE2		縦板 東2	50
第54図	173	井戸枠材	63	11	1.2	SE2		縦板 東3	50
第54図	174	井戸枠材	62.4	8	1.7	SE2		縦板 東4	50
第54図	175	井戸枠材	59.5	8.2	1.6	SE2		縦板 東5	50
第54図	176	井戸枠材	67.5	15	2.5	SE2		縦板 東6	50
第55図	177	井戸枠材	54	6.5	0.7	SE45		縦板 東1	51
第55図	178	井戸枠材	47.7	6.8	0.5	SE45		縦板 東2	51
第55図	179	井戸枠材	60	9.8	1	SE45		縦板 東3	51
第55図	180	井戸枠材	73	10	0.6	SE45		縦板 東4	51
第55図	181	井戸枠材	85.5	15.9	1.6	SE45		縦板 東5	51
第55図	182	井戸枠材	78.5	13.4	0.9	SE45		縦板 東6	51
第55図	183	井戸枠材	84.5	16	1.2	SE45		縦板 東7	51
第55図	184	井戸枠材	95	13.4	0.5	SE45		縦板 東8	51
第55図	185	井戸枠材	71.3	13.1	0.7	SE45		縦板 東9	51
第55図	186	井戸枠材	97.5	14.3	0.6	SE45		縦板 東10	51
第55図	187	井戸枠材	43.3	13.1	0.6	SE45		縦板 東11	51
第55図	188	井戸枠材	54.1	13.5	0.9	SE45		縦板 東12	51
第55図	189	井戸枠材	73	10.8	0.7	SE45		縦板 北1	51
第55図	190	井戸枠材	70.5	13.7	1	SE45		縦板 北2	51
第55図	191	井戸枠材	76	13.7	0.7	SE45		縦板 北3	51
第55図	192	井戸枠材	55.4	13.4	0.8	SE45		縦板 北4	51
第55図	193	井戸枠材	81.5	13.6	1.1	SE45		縦板 北5	51
第56図	194	井戸枠材	59	14.9	1	SE45		縦板 北6	51
第56図	195	井戸枠材	90.5	14.5	1.6	SE45		縦板 北7	51

表－3　後田遺跡木製品観察表(５)

掲載番号	遺物番号	種　別	計測値			出土地点	KFNo	備　考	図版番号
			長 ㎝	幅・径	厚 ㎝				
第56図	196	井戸枠材	83.5	13.7	1.3	SE45		底板　北8	51
第56図	197	井戸枠材	51.5	10	0.3	SE45		底板　北9	51
第56図	198	井戸枠材	70	10	1.1	SE45		底板　北10	52
第56図	199	井戸枠材	55	15.5	1.1	SE45		底板　北11	52
第56図	200	井戸枠材	47	13.1	0.7	SE45		底板　西1	52
第56図	201	井戸枠材	53	14	0.7	SE45		底板　西2	52
第56図	202	井戸枠材	72	13	0.8	SE45		底板　西3	52
第56図	203	井戸枠材	63.4	13	0.5	SE45		底板　西4	52
第56図	204	井戸枠材	59	8.8	0.4	SE45		底板　西5	53
第56図	205	井戸枠材	70.5	15	1.5	SE45		底板　西6	52
第56図	206	井戸枠材	77.7	13.7	0.8	SE45		底板　西7	52
第56図	207	井戸枠材	53	11	0.5	SE45		底板　西8	53
第56図	208	井戸枠材	71	17	1	SE45		底板　西9	52
第56図	209	井戸枠材	82.5	14.3	1.3	SE45		底板　西10	52
第56図	210	井戸枠材	94.7	14.4	1.3	SE45		底板　西11	53
第56図	211	井戸枠材	83	13.5	1.1	SE45		底板　西12	52
第56図	212	井戸枠材	51	7	0.5	SE45		底板　西13	52
第56図	213	井戸枠材	50	8.2	0.8	SE45		底板　西14	52
第56図	214	井戸枠材	62	6.7	1	SE45		底板　西15	52
第56図	215	井戸枠材	74	2.8	0.6	SE45		底板　南1	52
第56図	216	井戸枠材	55	7.8	0.6	SE45		底板　南2	52
第56図	217	井戸枠材	70	14	0.8	SE45		底板　南2	52
第56図	218	井戸枠材	88	15.5	1.9	SE45		底板　南3	52
第57図	219	井戸枠材	89.5	13.5	1.9	SE45		底板　南4	52
第57図	220	井戸枠材	64.2	11.9	0.9	SE45		底板　南5	53
第57図	221	井戸枠材				SE45		底板　南6	53
第57図	222	井戸枠材	71.2	10.4	0.7	SE45		底板　南7	53
第57図	223	井戸枠材	99	14.7	0.9	SE45		底板　南8	53
第57図	224	井戸枠材	65	14	0.9	SE45		底板　南9	53
第57図	225	井戸枠材	62.4	13.8	0.8	SE45		底板　南9	53
第57図	226	井戸枠材	45	12.5	0.7	SE45		底板　南11	53
第57図	227	井戸枠材	77	6.9	5.5	SE45		横桟　東下	53
第57図	228	井戸枠材	77.5	6.9	5.7	SE45		横桟　北下	53
第57図	229	井戸枠材	77	6.9	5.5	SE45		横桟　西下	53
第57図	230	井戸枠材	78	7.8	5.4	SE45		横桟　南下	53
第57図	231	井戸枠材	73.5	5.9	3.6	SE45		横桟　東上	53
第57図	232	井戸枠材	72	7.5	3.3	SE45		横桟　北上	53
第57図	233	井戸枠材	72.5	5.7	3.8	SE45		横桟　西上	53
第57図	234	井戸枠材	71	6.8	4.5	SE45		横桟　南上	53
第57図	235	井戸枠材	37	5.2	3.2	SE45		隅柱　南西上	53
第57図	236	井戸枠材	36.2	4.8	3.8	SE45		隅柱　北西上	53
第57図	237	井戸枠材	38.4	5.5	2.5	SE45		隅柱　北東上	53
第57図	238	井戸枠材	37.8	6.4	4.5	SE45		隅柱　南東上	53
第58図	239	曲物	62	66	1.5	SE27		木釘穴有	54
第59図	240	曲物	55.8	61.8	1.8	SE38		木釘穴有　線刻跡有	55
第60図	241	曲物	43.8	52.2	1.8	SE30		木釘有	54
第60図	242	曲物	36	41.4	1.2	SE45			54

表－4　後田遺跡土製品・石製品・鉄製品・古銭観察表

挿図番号	遺物番号	種　別	器　種	計測値			出土地点	RPNo	備　考	図版番号
				径	長さ	厚さ				
第61図	1	土製品	人形	24	63	17	59-16Ⅲグリッド		全箭力　下部穿孔	56
第61図	2	土製品	人形	23	43	19	SD277		下部穿孔	56
第61図	3	土製品	人形	29	30	24	SD3F4			56
第61図	4	土製品	人形	29	23	16	22-16グリッド		下部穿孔	56
第61図	5	土製品	人形	22	32	13	60-16Ⅲグリッド		下部穿孔	56
第61図	6	土製品	土錘	18.5	33		SD3F4			56
第61図	7	土製品	土錘	44	47		60-14Ⅲグリッド			56
第61図	8	石製品	砥石	34	57	8	59-16Ⅲグリッド			56
第61図	9	石製品	用途不明品	68	67	46	SD3F4			56
第61図	10	石製品	砥石	41	79	41	SD3F5	RQ173		56
第61図	11	石製品	砥石	42	54	20	53-13Ⅲグリッド			56
第61図	12	石製品	砥石	35	82	11	12-18Ⅲグリッド			56
第61図	13	鉄製品	キセル雁首	16	50		51-11Ⅲグリッド			56
第61図	14	鉄製品	キセル雁首	15	44		31-16グリッド			56
第61図	15	鉄製品	キセル雁首	14	37.5		54-12Ⅲグリッド			56
第61図	16	鉄製品	キセル吸口	11	69		SD304		銀線巻	56
第61図	17	鉄製品	キセル吸口	11	67		62-11Ⅲグリッド			56
第61図	18	鉄製品	キセル吸口	8	(35)		54-12Ⅲグリッド			56
第61図	19	鉄製品	管状金属製品	11	190		SD3F4			56
第61図	20	鉄製品	針	5	89		SD3F4	RM147		56
第61図	21	鉄製品	用途不明品	13	96	4	62-14グリッド			56
第61図	22	鉄製品	釘		114	8	SD3F4		木質遺物付着	56
第61図	23	古銭	寛永通寶	21		0.8	SD3F2			38
第61図	24	古銭	寛永通寶	23		1	SD58			38
第61図	25	古銭	皇宋通寶	24		0.9	56-16Ⅲグリッド		初鋳年1038年	38
第61図	26	古銭	熙寧元寶	22		1	38-13Ⅲグリッド		初鋳年1068年	38
第61図	27	古銭	寛永通寶	24		1	15-12グリッド			38
第61図	28	古銭	寛永通寶	24		1	15-12グリッド			38
第61図	29	古銭	熙寧元寶	23		1	57-17Ⅲグリッド		初鋳年1068年	38

Ⅳ　大道下遺跡

1　遺構と遺物の分布

遺構は、溝跡２条・土坑16基・ピット24基が検出された。拡張区以外は、トレンチにより遺構の有無を確認したが、ピットが数基認められただけであった。

平成２年度に山形県教育委員会が、高速道の路線幅をはさんで南西端をＡ区、北東端をＢ区として調査を行った結果、溝跡多数と掘立柱建物跡が１棟検出された。これらから、路線内である遺跡中央部は遺構が希薄で東西両端に集中しているものと推定される。

基本層序は、表土の下にⅠ層として炭化粒を微量に含む黒褐色シルトの包含層が５㎝程堆積している。Ⅱ層は、地山で暗灰黄色シルト質微砂からなり10㎝程堆積する。Ⅲ層以下は、グライ化した黄灰色粘質シルトが続く。

出土遺物は75点と調査面積に比して少なく、整理箱１箱にも満たない程度である。

2　検出された遺構（第62～65図）

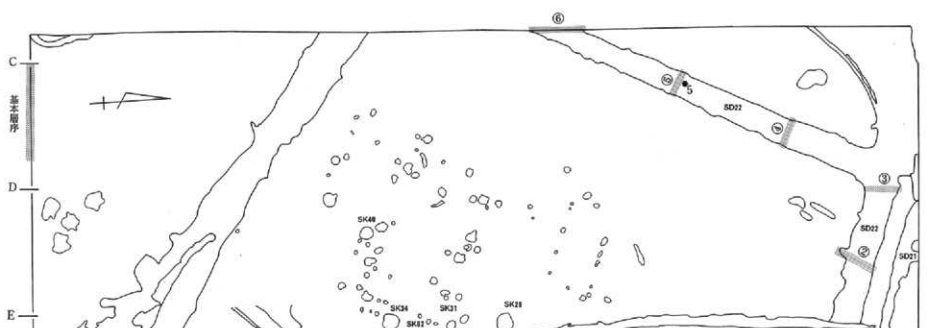
溝跡　調査区を囲むように３本の溝が検出された。東壁際の溝と南側の溝は時期が異なるがそれぞれ新しい溝と考えられる。ＳＤ22はＣ～Ｅ－30～32グリッドに位置し、調査区北側を東西に横断している。また、Ｃ－30グリッドで分岐し、一方はほぼ直角に曲がり南西に向かう。幅は、1.9～4.1mと一定せず、検出面からの深さは35～50㎝を測る。壁は緩やかに傾斜し、覆土は黒褐色シルトを基調とする10層から成る。Ｂトレンチからこの溝と繋がる遺構は認められない。調査区内から建物跡は検出されず、遺物はＣ－29グリッドから出土した漆器椀一点のみである。ＳＤ21は、ＳＤ22に平行するように位置する。幅は70㎝、検出面からの深さは15㎝と浅い。堆積土は、黒褐色シルトの一層からなる。

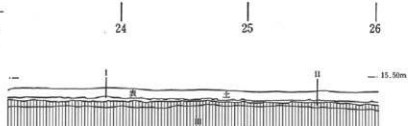
明治26年作成の旧字切図によるとＳＤ22に相当すると考えられる溝跡が認められたため、これらは近代まで存在していたものと考えられる。

土坑　溝に囲まれた部分には土坑・ピットが確認された。特に、東壁際の新しい溝の周囲には、溝に切られるように良好な土坑が検出された。平面は直径60～126㎝の円形または楕円形を呈し、検出面からの深さは14～67㎝を測る。堆積土は黄灰色または黒褐色シルトを基調としている。

3　出土した遺物（第65図）

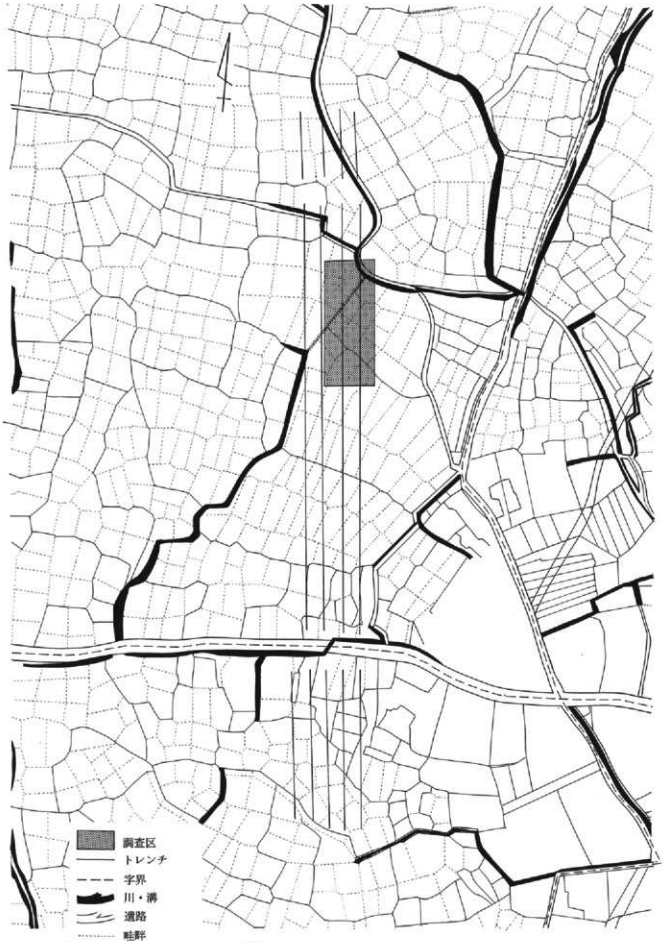
遺構から出土した遺物は30点と僅かで土坑からの出土が殆どである。須恵器・赤焼土器片が大半を占めるが中・近世陶磁器も認められる。１はＳＫ31から出土したもので、瀬戸美濃系の折縁皿でかなり大型になるものと推定され、大窯Ⅲ～Ⅳ期に相当するものと考えられる。４は遺構外から出土した青磁坏片であるがほぼ１と同様の時期のものと推定される。５は唯一の木製品で両面黒漆を塗布した漆器椀である。外面には朱漆で模様が描かれている。２は須恵器甕の口縁部分でＣトレンチから、３は須恵器坏の口縁部分でＳＫ53から出土したものである。





基本層序
I 2.5Y 3/2 黒褐色シルト 炭化粒を微量に含む。
II 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト質細砂 明褐色砂を10%程含む。(地山)
III 2.5Y 5/1 黄灰色シルト質粘土 グライ化している。木根少量含む。
IV 2.5Y 4/1 黄灰色粘質シルト グライ化している。腐植した木根がレンズ状に堆積。
II層より粘性弱い。

第62図 大道下遺跡遺構配置図

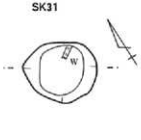


第63図　大道下遺跡周辺の字切り図　明治26年

SK29

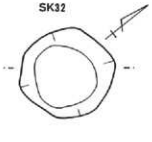
SK29
1.2.5Y 3/1　黒色シルト質砂　炭化粒を含む
2.2.5Y 3/2　黒褐色シルト
　明褐色砂質シルト粒を含む。
3.2.5Y 3/3　暗オリーブ　褐色粘質細砂

SK31



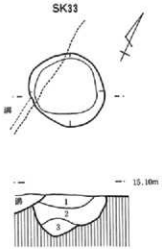
SK31
1. 2.5Y 6/2　灰黄色砂質シルト
2. 2.5Y 3/2　黒褐色砂質シルト
　炭化物、黄灰色砂を含む。
3. 2.5Y 3/1　黒褐色シルト
　炭化物、灰色砂を多量に含む。
4. 2.5Y 5/2　暗灰黄色砂質粘土
　炭化物を多量に含む。
5.10YR 2/1　黒色砂質シルト
　全体的に炭化している。

SK32



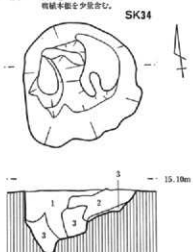
SK32
1. 2.5Y 3/1　黒褐色シルト質細砂
　黄灰色細砂(小ブロック状)
　明褐色粒を少量含む。
2. 2.5Y 4/1　黄灰色シルト
　炭化粒を含む。1層に同じ。
3. 2.5Y 3/2　黒褐色シルト
　炭化粒を多量に含む。
4.10YR 4/1　褐灰色シルト質細砂
　黒褐色シルトを含む。

SK33

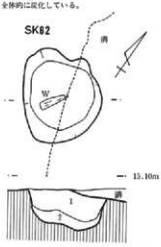


SK33
1.2.5Y 3/2　黒褐色シルト
　炭化粒、褐色砂、黄灰色砂を含む。
2.2.5Y 6/1　黄灰色細砂
　黒褐色シルト、褐色砂を多量に含む。
3.2.5Y 5/1　黄灰色シルト質粘土
　有機木根を少量含む。

SK34

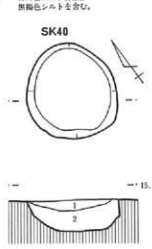


SK82



SK62
1.2.5Y 3/1　黒褐色シルト
　黄灰色シルト質砂を1/3程含む。
　明灰色砂、炭化粒を少量含む。
2.2.5Y 4/1　黄灰色砂質シルト

SK40

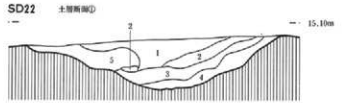


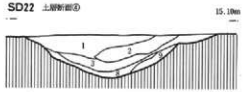
SK49
1.2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト
　黄灰色砂を少量含む。よくしまっている。
2.2.5Y 5/2　暗灰黄色砂質シルト
　黄灰色砂を1/4程含む。

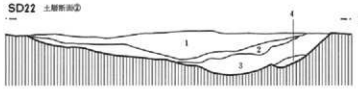
SK34
1.2.5Y 4/1　黄灰色シルト
　2層の土を1/3程含む。よくしまっている。
2.2.5Y 7/2　灰黄色シルト質細砂
　1層の土を1/3程含む。炭化物、褐砂少量含む。
3.2.5Y 6/1　黄灰色細砂
　1層の土をブロック状に褐色砂を少量含む。

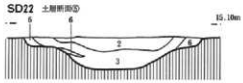
0　2m
1 : 40

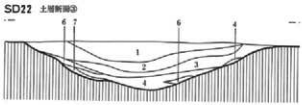
第64図　SK29・31・32・33・34・40・62土坑・101





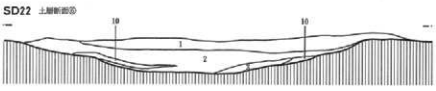


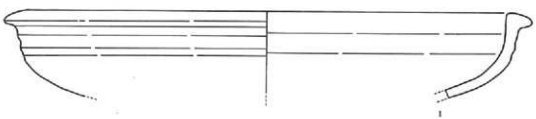


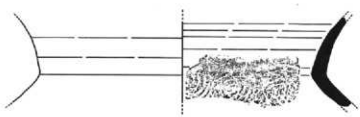


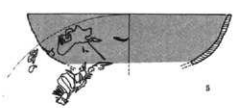
SD22

1.	2.5Y	3/2 黒褐色シルト よくしまっている。
2.	2.5Y	5/2 暗灰黄色シルト 黄灰色砂を1/2程含む。木根混入。
3.	2.5Y	3/1 黒褐色粘質シルト よくしまっている。木根混入。
4.	2.5Y	3/3 暗オリーブ褐色シルト、炭色粘土を含む。
5.	2.5Y	3/1 黒褐色シルト よくしまっている。木根混入。
6.	2.5Y	3/2 黒褐色微砂 地山の土を帯状に含む。木根混入。
7.	2.5Y	4/1 灰黒色シルト 木根混入。
8.	2.5Y	4/2 暗灰黄色シルト質粘土 よくしまっている。
9.	2.5Y	3/2 黒褐色シルト 地山の土を1/2程含む。
10.	2.5Y	5/3 黄褐色細砂 黒褐色シルトを少量含む。









第65図　SD22溝跡土層断面図　遺物実測図

V まとめと考察

1 後田遺跡のまとめ

今次、東北横断自動車道酒田線が計画され、後田遺跡についても14,500㎡が路線幅にかかることが判明し、調査を行うこととなった。平成2年度にも県営ほ場整備事業にともなう発掘調査が行われていたため、今回は第2次調査となる。調査の結果、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡6棟、井戸跡7基、土坑、柱穴、溝跡多数が検出された。一見遺構が集中しているかのように思われるが、古墳時代から近世という非常に長い時間の中で残された痕跡であって同時期に属する遺構は意外に少ない。底面からの一括遺物に乏しく、遺構の時期決定が難しいというのが実情である。以下、遺構と遺物の概括を時期を追って述べる。

古墳時代に属すると考えられる遺構は、ＳＴ1だけである。ここ数年田川地区の古墳時代遺跡の発掘調査が行われ、このあたりの古墳時代の歴史も解明されつつある。ＳＴ1の遺物は、坏の口縁形態等から清水新田遺跡の出土遺物と時期を同じくするものと考えられる。やや古い様相を呈する土師器も認められるが、ほぼ6世紀前半に相当するものと推定される。今回はＳＴ1のみの検出であったが、ＳＴ1の周囲や溝跡等からも古墳時代の土師器が出土しているため、周辺に遺構が存在することは明らかである。遺構の広がり、集落の様相については今後の調査を待ちたい。

奈良時代の遺構は認められなかったが、ＳＤ271上層より8世紀後半に属すると考えられる須恵器が出土した。出土状況より流れ込みであることは明らかであるが、東側に隣接する月記遺跡の河川跡からも8世紀代の遺物がまとまって出土していること等から、周辺に同時期の遺構が存在すると考えられる。

井戸跡は残存している井戸枠のみから4タイプに分類される。1：横板を井桁状に組み、その下に縦板を設置したもの(ＳＥ2)、2：縦板と横桟を設置したもの(ＳＥ4)、3：曲物を井筒とし、その外側に横桟や縦板を設置したもの、または曲物だけを設置したもの(ＳＥ27・28・30・45)、4：縦板のみを設置したもの(ＳＥ313)である。これらの井戸跡からの出土遺物は須恵器・赤焼土器が殆どを占めるが1・3・4タイプの井戸跡からはわずかながら珠洲系陶器・青磁片が出土している。また、1タイプは庄内地方において従来平安時代に属するものと考えられていたが、掘り方から珠洲系陶器が出土しており、設置年代の下限が中世まで降ることが確認された。以上のことから後田遺跡における各井戸跡の廃絶時期は、1・3タイプが13世紀後半～14世紀前半、2タイプはこれより先行し9世紀後半～10世紀初頭に相当するものと考えられる。なお、旧い遺物も良好な状態で出土していることから、設置された時期を想定することは困難であるため、下限時期を述べるにとどまる。

土坑は遺物の出土は少量であるが、Ｂ区の土坑から十和田aテフラが検出されたことにより時期解明に大きな役割を果たしている。特にＳＫ359からは二次堆積のテフラとともに、多量の赤焼土器坏が検出されたことにより、10世紀初頭の時期が考えられる。Ａ区においては、ＳＫ61・68等平安時代に属する土坑が若干は認められるもののＳＥ45の周辺に密集する土坑群をは

じめ、中世以降のものが主体を占めている。

掘立柱建物跡からの出土遺物は非常に少なく、時期は判然としない。ＳＢ10には小片であるが中世陶磁器が出土した柱穴があることから中世以降のものと考えられる。また、ＳＢ10と軸をほぼ同じくするＳＢ９も同時期のものであろう。ＳＢ７・８については、若干赤焼土器が出土しているものの周囲に存在する井戸跡とほぼ同時期と推定される。ＳＢ12は建物の形態、柱穴の規模などからＡ区の掘立柱建物とは様相を異にし、Ｂ区から検出された遺構の時期とほぼ同時期と見るのが妥当であろう。

ＳＤ３溝跡については、ＳＤ３ａが出土遺物・規模共に主体を成し、最も長い時間機能していたものと考えられる。古墳時代からの遺物が認められるが、十和田aテフラが混入していない事や中世陶磁器等の出土、及び笹塔婆をはじめとする多量の木製品、草履状木製品・下駄・漆器などの出土を考え合わせると12世紀末～14世紀を中心に機能していたものと考えられる。また、前述したとおり明治26年の字切り図にＳＤ３に相当すると思われる溝が認められるが、これは、覆土の状態等からＳＤ３ｃに相当すると考え大過ないと思われる。

以上のことから、遺構の変遷を概観すると、古墳時代にはＡ区周辺に６世紀代の集落跡が営まれ、８世紀後半頃から近隣に集落をつくりはじめる。９世紀末～10世紀前半代にはＡ区において、ＳＥ４・ＳＫ23・61・68等が認められ、Ｂ区においてはＳＢ12・ＳＥ313・ＳＫ264・359・ＳＤ278・311・307・308・333等の建物・井戸・土坑・溝という組み合わせが認められ、わずかながらも人々の居住空間が形成されたことが窺われる。その後、13世紀～14世紀にＳＢ７・８・９・10・ＳＥ２・27・28・30・45とその周囲の土坑があたかもＳＤ３で区切られるかのようにその南側に分布する。ＳＤ３はその後、埋没と掘削を繰り返し、近代まで残存する。７世紀・11世紀という空白時期を残すものの古墳時代から近世という長い時間の中におけるこの土地の様相を確認してきた。今回の調査では、中世に属する遺構が数多く検出されたが、同時期に発掘調査の行われた塔の腰遺跡や周辺に位置する月記遺跡、大東遺跡、地ノ内遺跡等との関連を考えることは不可欠と思われる。また、鎌倉時代創建と伝えられる井岡寺や遠賀神社とどのように関わっていくのか等を今後検討する必要がある。

２　大道下遺跡のまとめ

後田遺跡の北側に位置する本遺跡は、後田遺跡と同様の目的で調査を行った。遺構集中部分1,800㎡を対象とした結果、Ｌ字に曲がる溝跡に囲まれるように土坑16基、ピット24基が検出された。遺物は整理箱数にして１箱と少なく、遺構の性格や時期については判然としない。ＳＤ22は、明治26年作製の字切り図においてほぼ同じ方向で溝が認められるため、近代まで機能していたものと推定できる。また、ＳＤ22から出土した漆器椀もこれに並行するものであろう。その他の土坑・ピットについては須恵器・赤焼土器の小片は認められるものの、近世の遺物も認められ、16～17世紀に相当するものと考えられる。平成元年度の調査においては、今次の調査に比し多数の遺構が検出されているため、遺跡範囲の東南端に遺構が集中し、中央部は希薄であると推定される。

3　笹塔婆について

後田遺跡のＳＤ３において、多量の笹塔婆が出土したことは前述のとおりであるが、「笹塔婆」については未だ不明の点が多いため、県内及び全国各地の出土例をもとに出土遺構・用途・時期等について若干の考察を試みたい。

笹塔婆のような信仰に関する墨書木製品には、主に柿経と塔婆類が認められる。これらの分類については『日本仏教民俗基礎資料集成』において、経文を墨書したものを柿経、真言・名号・偈文等比較的単純な内容のものを書写しているものを笹塔婆としている。さらに、「文献史料の上では、「柿葉」「卒都婆」「卒都婆経」「経木」等と書かれているが、「卒都婆」と呼称している例が最も多い。ただし、文献の場合には、七十七日や四十九院の塔婆をも卒都婆と呼びならわしているため、これを識別するには史料の文意による以外方法はない。」とつけ加えている（3）。これを示唆するかのように、各地の出土報告を見ても統一された名称はなく、塔婆・卒塔婆・板塔婆・呪符・木札等と呼ばれているのが現状である。したがって、今回は名称にこだわらず、五輪塔婆も含めて、真言・名号・偈文等を書写している木製品を表７に取り上げる。なお、県内においては、出土例が少ないため柿経の出土例も参考として表５に取り挙げたが、表７においては、明らかに柿経と思われるものは除いた。

表－５　山形県内の出土例

遺跡名	山寺(山内)	安　田	明成寺	亀ヶ崎城	月　記
所在地	山形市山寺 立石寺	酒田市大字安田 字芳岡	酒田市豊川 字明成寺	酒田市亀ヶ崎	鶴岡市大字寺田 字月記
調査年	1950	1981	1979	1994	1990
遺跡の種別	寺	集落跡	集落跡	城館跡	集落跡
出土した遺構	ホトケ岩洞窟	５－21ＧⅡ	SX2落ち込み	SD1溝跡	SD3溝跡
遺物及び計測値（㎜）	柿経　３万点 240×20×1 笹塔婆　数点 416×34×5 ～ 678×38×8	柿経　２点 87×11×0.3 102×10×0.9	笹塔婆　３点 （柿経ヵ） 187×14×1 177×13×1 161×15×1	位牌　１点 167×40×3	墨書腰符　３点 214×26×2 264×36×2 113×18×3
墨　書	南無大日如来 バン 南無阿弥陀仏	「妙法蓮華経」 の経文の一部	主成献如是得厳 他	バク法□□相□ カ	阿弥陀如来 他
時　期	室町後半～近世	鎌倉～室町	鎌倉～江戸	17～19Ｃ	中世

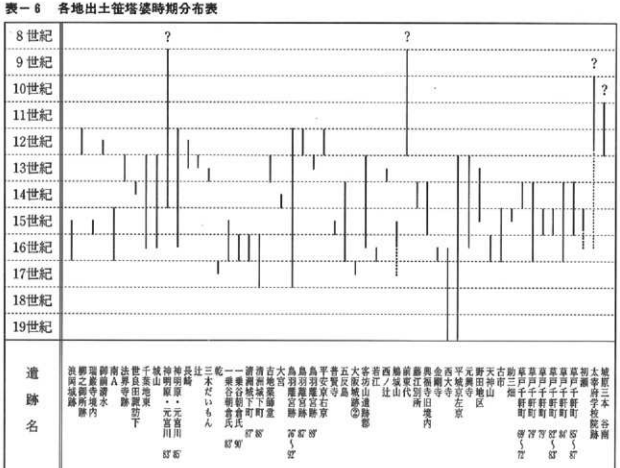
①県内の出土例(表5)

県内では、笹塔婆・柿経の出土例は5例である。月記遺跡は後田遺跡と一連の遺跡であることは前述しているので、この他に笹塔婆に相当するものは山寺ホトケ岩洞窟と亀ヶ崎城跡の2例である。前者は、多量の柿経と笹塔婆が発見されたことにより、石田茂作氏が調査を行っており、現在も山寺秘宝館において展示されている。若干大きめではあるが、後田出土笹塔婆に似た様相を呈する(1)(2)。また、亀ヶ崎城跡出土位牌は、上部を主頭にし、墨で二条の線が引かれている。墨書の内容やその形態は笹塔婆に分類されるものと考えられる(28)。なお、今回は明成寺遺跡出土笹塔婆は柿経に分類する。

②全国の主な出土例(表6)

全国においては51例を今回取り上げたが、その殆どは1～10点程とわずかな出土である。中には百点、千点以上の出土例も認められるが、元興寺極楽坊より発見された笹塔婆の数が最も多く、よく集成されているものと言えよう。また、各地域の分布状況は、東北9遺跡、関東3遺跡、北陸・東海8遺跡、近畿18遺跡、山陽・山陰5遺跡、九州2遺跡となる。発掘件数にも左右されると考えられるが、近畿地方に3分の1以上が分布し、次いで東北、東海地方に多く分布している。

表－6　各地出土笹塔婆時期分布表



③笹塔婆の用途について

笹塔婆の用途については、不明の点が多く未だ断定はできないが、『日本仏教民俗基礎資料集成六』において「笹塔婆は、己の生善を願う逆修のためのものもあるが、「為某善提也」と記したものや、日課作善のものにも「為某」としてその命日に当たると推定される日には数本の笹塔婆を余計に作っており、亡者追善の資料が以外に多い。」と記している。これは、現在も死者の供養のため回忌毎に墓に建てられる卒塔婆と同じ様なものと言える。また、「蝿鬼草子」の中の石積塚の図には、供養塔を中心にし両脇に卒塔婆を建て、さらにその周りには無数の小さい卒塔婆が建てられている(25)。

後田遺跡の南西方約2kmに位置する森山においては、現在でも毎年8月に大施餓鬼供養が行われており、周辺各地から参詣者が訪れる。この時供養に使用する塔婆は長さ305㎜、幅49㎜、厚さ1㎜を測る、下端は尖らせていないが上端を五輪塔状にした笹塔婆によく似た形状を呈するものである。しかし、森供養の初現は残念ながら近世に入ってからという事で、後田遺跡の笹塔婆に直接結びつけることはできない(12)。

現在出土している笹塔婆の用途は必ずしも断定できないが、供養塔としてだけでも様々な使用方を想定することができる。

さて、上記のような方法によって供養塔として使用されたとするならば、寺院跡・墓跡からの出土が多いと考えられるが、各地の笹塔婆の出土遺跡の種別を概観すると、集落跡17例、寺院跡及び墓跡11例、城館跡6例その他18例となる。宮城県瑞巌寺境内出土の154点、和歌山県野田地区遺跡の数百点、栃木県法界寺跡の2000点等、寺院跡からの出土量は確かに多いが、遺跡数としては少なく、集落跡や城館跡等からもかなりの数が出土している。これは、寺院跡からの流れ込みと考えるよりは、一般集落においても使用されていたことを示すものと考えられる。また出土遺構については、一遺跡にいくつかの遺構が認められる場合もあるが、溝跡18例、河川跡13例、井戸跡6例、土坑5例、池跡3例等となり、溝跡・河川跡がほぼ半数を占める。木製品という性質上、これらの遺構が多いことは当然のことであるが、供養方法に何らかの関係があるのではなかろうか。

表7中に認められる、長さが50～100㎝、幅が5～10㎝を測る塔婆は、墓に建てて使用したと考え大過ないと思われる。しかし、後田遺跡出土笹塔婆のように長さ30㎝程、厚さ3㎜程の壊れ易い木製品を同様に使用することは難しいと考えられる。『平家物語』には、鬼界ヶ島に流された康頼入道が故郷を思い、千本の卒塔婆を海に流したという「卒塔婆流」が記されている(24)。死者の供養とは若干意図が異なるが、笹塔婆も溝や河川等に流して供養を行った可能性も考えられる。かなり時期は遡るが、律令期には、河川際などで祭祀を行ったことは文献にも記されており、そのような状態を想定できる遺跡の確認も年々増加している。中世に入ると、律令期のような斉串の出土は減少し、柿経・笹塔婆等仏教に関連するものが増えてくるが、これらも同様に溝や河川に流すことによって供養を行ったという推定も可能なのではないだろうか。

では、後田遺跡についてはどうであろうか。唯一墓壙と考えられるSK23は平安時代の遺構と考えられ、中世に相当する墓壙は検出されなかった。出土した笹塔婆は、その殆どが下端を

尖らせているが、土中に刺したような痕跡は認められない。また、下端に朱塗りを施したものも認められることから、下端も見えることを意識して作っているように思われる。以上のことを考え合わせると、墓等に立てる供養塔というよりは、ＳＤ３溝跡に笹塔婆を流すことによって供養を行ったと推定される。

④笹塔婆の年代について

柿経の場合は、平安末から鎌倉時代に流行した仏教の行為であると考えられているが、笹塔婆の場合もほぼ同様であるように思われる。溝や河川からの出土がその殆どを占めるため、はっきりとした年代を決定することは困難であるが、表６をみると、若干の例外は認められるものの、12世紀を初現とし、13～16世紀までが最も多く認められる。その後、近世には大阪城や西大寺等で若干出土しているものの、明らかに減少していく様子が認められる。

また、出現期にあたる12世紀代には京都府鳥羽離宮跡や岩手県の柳之御所跡等公の施設跡からの出土が目立つが、13世紀以降は集落跡・寺院跡に多く認められるようになる。このことから、平安末に上層階級の人々によって行われていた供養方法が、中世に入るとともに一般庶民へと浸透していったことを想定することができる。

後田遺跡においては、ＳＤ３溝跡より古墳時代から近世という幅広い時期の遺物が確認されているが、珠洲系陶器・青磁・かわらけ等の中世陶磁器がかなり目立っていたため、これらの年代幅より12世紀末～14世紀という時期を設定した。これは、上記の笹塔婆の年代にも共通するものであり、ほぼ妥当な時期と考えられる。

以上、笹塔婆について若干の考察を試みたが、なお、宗教上の問題や地域的な偏り等不明の点が多く、今後の検討課題としていきたい。

参考文献

（１）　佐藤　栄太　　1950　「山寺の経塚について の一考察」（『羽陽文化』第７号）
（２）　石田　茂作　　1951　「修験道と東北文化及び山寺の景観 巻」（『羽陽文化』12号）
（３）　辻村　泰圓　　1978　『日本仏教民俗基礎資料集成六』（元興寺仏教民俗資料室VI）
（４）　今里　英三　　1979　『日本仏教民俗基礎資料集成三』（元興寺仏教民俗資料室）
（５）　大友　義助　　1977　「山寺前後出土歴民俗資料について」（『庄内考古学』14号）
（６）　木簡学会　　1980～『木簡研究』１～３、５～12号
（７）　川崎　利夫　　1980　『若王寺遺跡・明成寺遺跡・三田遺跡発掘調査報告書』
　　　　野尻　侃　他　　山形県埋蔵文化財調査報告書第32集　山形県教育委員会
（８）　佐藤　庄一　　1982　『安田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第56集　山形県教育委員会
（９）　横山　昭誠　　1963　『梵字手帖』
（10）　萩原　芳秀　　1985　『萩戸子飼遺跡出土の草履状木製品』（『草戸千軒』129号）
（11）　田島　明人　　1986　『漆町遺跡Ⅰ』　石川県埋蔵文化財センター
（12）　春日　康夫　　1986　『目で見るモリの山』
（13）　阿部　明彦　　1988　『矢脇Ａ遺跡・矢脇Ｂ遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第127集　山形県教育委員会
（14）　佐藤　庄一　　1989　『６狭田遺跡』（『分布調査報告書16』山形県埋蔵文化財調査報告書第136集　山形県教育委員会
（15）　阿部　明彦　　1989　『12大道下遺跡』（　〃　）
（16）　長谷　孝雄　　1990　『６狭田遺跡』（『分布調査報告書16』山形県埋蔵文化財調査報告書第148集　山形県教育委員会
（17）　野尻　侃　　1990　『７月長遺跡』（　〃　）
（18）　佐藤　庄一　　1990　『８大道下遺跡』（　〃　）
（19）　野尻　侃　　1990　『大道下・月足・大泉遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第153集　山形県教育委員会
（20）　佐々木洋治　　1991　『２長谷遺跡　３大道下遺跡』（『分布調査報告書16』山形県埋蔵文化財調査報告書第163集　山形県教育委員会）
（21）　井上喜久男　　1992　『陸奥国府』
（22）　願　実　　1992　『鎌倉市内の井戸』（『中世都市研究』第２号）
（23）　吉岡　康暢　　1994　『中世須恵器の研究』
（24）　木部　勇　　1994　『経塚・本私・石造物に中世を読む』
（25）　小松　茂美　　1994　『熊鬼草紙　地蔵草紙　病草紙　九相詩絵巻』　日本の絵巻７
（26）　関西陶磁史研究会　　1995　『土師質陶磁研究』
　　　　森田　勉
（27）　三浦　謙一　　1995　『幕之御所跡』　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第226集
　　　　松本　建速　　（財）岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター
（28）　小岡　真司　　1995　『亀ヶ崎城跡第３次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第98集　財団法人山形県埋蔵文化財センター
（29）　北陸中世土器研究会　　1996　『掘る・選ぶ・割るの木製用具』　第９回北陸土器研究会

全国の主な笹塔婆出土遺跡表について

（1） 表7は、主に「木簡研究」の1～3、5～17号より抜粋したもので、1979年以降笹塔婆が出土した遺跡を掲載した。

（2） 北から順番に掲載しているが、これは表－6各地出土笹塔婆時期分布表と同じ順番である。

（3） 笹塔婆に相当する遺物の遺物名は報告されている名称を記載した。

（4） 遺物の計測値・墨書については、なるべく完形に近く墨書の残りの良い遺物を一つ取り上げ記載した。計測値の単位は㎜である。なお、計測値と墨書の記号等は「木簡研究」の凡例にならった。

表－7　全国各地の主な笹塔婆出土遺跡（1）

都道府県名	市町村名	遺跡名	調査年	遺跡の種類	出土遺構	遺物名	点数	長さ	幅	厚さ	墨書	時期
青森	津軽郡浪岡町	浪岡城跡	1984～1985	中世城館跡	堀跡	柿経	1	488	58	2.5	「(梵字)」	15C後半～16C末
岩手	西磐井郡平泉町	柳之御所跡	1988～1993	政庁跡	溝跡・井戸跡	笹塔婆	20程	160	20	3	「南无大日□ □」 他	12C
宮城	宮城郡松島町	瑞巌寺境内	1992～1993	寺院跡	池跡	塔婆	154	(332)	26	4	「◐南無大日如来 他	15C後半
福島	耶麻郡山都町	御前清水	1984	遺物散布地	試掘のため不明	墨書木製品	2	(210)	(18)	3	「＜南无阿弥陀仏 他	12C後半
福島	郡山市	南A	1992～1993	館跡か	南虎口	笹塔婆	100	170	10	1	「◐大日如来」 他	15～16C
栃木	足利市	法界寺跡	1984	寺院跡	園地跡	柿経	2000	(170)	8	2	「南無阿弥陀仏 他	13C
群馬	新田郡尾島町	世良田諏訪下	1991～1993	集落・墓・生産跡	溝跡	木簡	439	(249)	33	3	「南无大日如来 他	14C前半
神奈川	鎌倉市	千葉地東	1984	集落跡・中世居館跡	河川跡(木組蓄井に転用)	卒塔婆	1	605	104	16	×[illegible]記未年 為父也」	中世
静岡	浜名郡可美村	城山	1977	不明(伊場と一連か)	記述なし	柿経	2	(155)	19	1	「◐大日如来 他	中世
静岡	静岡市	神明原・元宮川	1983	祭祀跡、集落跡	河川跡	木簡	1	220	22.5	2.5	「◐南無阿弥□×」	9～14C
静岡	静岡市	神明原・元宮川	1985	祭祀・集落・河川	旧大谷川	卒塔婆	6	227	22	3.5	「◐南無大日□□」 他	12C～中世
静岡	清水市	長崎	1988～1989	集落跡・水田跡・中世河道跡	河道内	塔婆	6	252	21	2	「＜南無五大力菩薩○」 他	12C末～13C初

表－7　全国各地の主な笹塔婆出土遺跡（2）

都道府県名	市町村名	遺跡名	調査年	遺跡の種類	出土遺構	遺物名	点数	長さ	幅	厚さ	墨書	時期
富山	中新川郡立山町	辻	1986	集落跡	溝跡	卒塔婆	8	245	18	2	「大般若心経」 他	13C前半
石川	加賀市	三木だいもん	1985	居館跡	方形池状遺構	笹塔婆	1	245	33	2	「[illegible]」	13C後半
石川	松任市	乾	1990	墓跡か	土坑	経木塔婆	1	(74)	25	12	南無大師遍照×	17C前半～中葉
福井	福井市	一乗谷朝倉氏	1983	城館・都市跡	溝跡・石積施設	卒塔婆	9	(53)	50	7	「南無上行菩薩 他	15C後半～16C後半
福井	福井市	一乗谷朝倉氏	1990	城館跡・城下町跡	廃跡	卒塔婆	2	(32)	(30)	2	・[illegible]× ・□□□□ 他	16C
愛知	西春日井郡清洲町	清洲城下町	1987	城郭・都市跡・集落跡	自然流路・溝跡	板塔婆	9	413	25	1.5	「[illegible]□ □南無阿弥陀仏□ □」他	16C代
愛知	西春日井郡清洲町	清洲城下町	1988	集落跡・城館跡	溝跡・土坑・性格不明遺構	板塔婆	1	(34)	33	1	・「(梵字)」 ・「[illegible]□□南无×	16～17C
滋賀	野洲郡中主町	吉地薬師堂	1986	集落跡	溝跡	卒塔婆	6	(33)	27	4	「南无地蔵菩 他	13C
滋賀	守山市	大宮	1989	旧河道	旧河道	五輪卒塔婆	4	(30)	(15)	15	「南無阿弥陀仏」	14C末前後
京都	京都市	鳥羽離宮跡	1976～1992	離宮跡	溝跡・地衆最下層	卒塔婆・位牌	7	141	18	2	「＜南無阿弥陀仏○」 他	12～17C
京都	京都市	鳥羽離宮跡	1987	離宮跡	溝跡	枠経・塔婆	6	512	25	3	・「＜南无普賢菩薩」 ・「＜南无大日如来」 他	12C
京都	京都市	鳥羽離宮跡	1989	離宮跡	溝跡	供養札	7	(67)	22	3	「＜南無□ 他	1203年
京都	京都市	平安京右京三条二坊八町	1986	都城跡	川跡	板状木製品に墨書	1	650	50	60	「南無光明真言」	12C
大阪	門真市	普賢寺	1984	寺院跡	溝跡	卒塔婆	1	(33)	(47)	2	・×无阿弥陀佛」 ・(梵字) 他	15C後半
大阪	吹田市	五反島	1986	河道跡・鉄砲遺跡	河道跡	笹塔婆・棒経	4	(28)	26	3	×(梵字)為御子浄心浄栄 ×(梵字)四年供養□ 他	14～16C
大阪	大阪市	大阪城跡(2)	1987	近世城下町	大規模なゴミ穴	枠経・呪符	4	(78)	23	0.5	×阿弥陀仏× 他	17C前半
大阪	東大阪市	客坊山遺跡郡	1988	集落跡・古墳群・寺院跡・城跡	泉水	五輪塔形板塔婆	1	97	15	5	・[illegible] ・□舗砂石	中世
大阪	東大阪市	若江	1988～1989	城郭跡・寺院跡・官衙跡・集落跡	内堀跡	五輪形板塔婆	1	559	62	4	「(梵字) 願意文・発願主」	16C後半
大阪	東大阪市	西ノ辻	1992	集落跡	井戸跡	刻書竹製品	1	(18)	(16)	3	・南无大日□ ・之有	13C後半
兵庫	奥保郡太子町	鶴城山	1980	不明	井戸跡	五輪卒塔婆	1	680	10	5	・「省略」 ・「□□□□□佛文明六年六月廿七日孝子敬白」	文明六年(1474)以降

表－7　全国各地の主な笹塔婆出土遺跡（3）

都道府県名	市町村名	遺跡名	調査年	遺跡の種類	出土遺構	遺物名	点数	長さ	幅	厚さ	墨書	時期
兵庫	姫路市	前東代	1983	旧河川跡	旧河道	呪符	1	(116)	20	5	・「＜大日真□ ・「＜尺迦□□	9～12C
兵庫	明石市	藤江別所	1993～1994	集落跡	井戸跡	笹塔婆	1	(220)	23	2	「(梵字)南無×	14C
奈良	奈良市	興福寺旧境内	1986	寺院跡	井戸跡	笹塔婆（五輪塔形）	数点	90	22	1	・「地蔵菩薩本願」 ・「南無地蔵菩薩」　他	14～15C代
奈良	磯城郡田原本町	金剛寺	1987	中世居館・寺院・集落跡	溝跡	卒塔婆	1	1148	102	9	・(梵字)音在薫山名□□	16C後半
奈良	奈良市	西大寺	1989	寺院跡	土坑	木簡	1	267	78	7	「南無阪世音菩薩」	近世
奈良	奈良市	平城京左京三条三坊三坪	1992	都城跡・河道跡	旧河道	笹塔婆	69	(209)	13	10	「南無阿弥陀仏　他	中・近世
奈良	奈良市	元興寺		寺院跡	本堂	笹塔婆	4278	262	26	3	「[illegible]南無阿弥陀仏」他	中世
和歌山	有田郡吉備町	野田地区	1980	寺院跡、水田跡、集落跡	溝跡	笹塔婆（他に塔婆有）	数百	(172)	10	1	「南無阿弥陀仏　他	14C前後
鳥取	鳥取市	天神山	1989	城郭跡	内堀跡	塔婆	1	(100)	25	7	(梵字)　北」	16C
島根	浜田市	古市	1993～1994	集落跡	溝跡	呪符・卒塔婆	1	(400)	55	5	・「□[illegible]為金聖□ □ ・「　八万四千本内	15～16C
岡山	邑久郡邑久町	浜三畑	1982	集落跡	溝跡	五輪卒塔婆	2	124	77	7	「[illegible]×　他	15C前半
広島	福山市	草戸千軒町	1969～1972	集落跡	井戸跡	板塔婆	2	441	37	6	「[illegible]南無阿弥陀仏」　他	14C
広島	福山市	草戸千軒町	1979	集落跡	溝跡	梵経	1	(345)	13	1	南无阿弥陀佛」	14～16C
広島	福山市	草戸千軒町	1979	集落跡	井戸跡	塔婆	1	(325)	20	2	「[illegible]金剛力士□×	15C
広島	福山市	草戸千軒町	1982～1983	集落跡	川跡・井戸跡	五輪塔形板塔婆	2	(282)	20	45	・「[illegible]× ・「[illegible]×　他	15C
広島	福山市	草戸千軒町	1984	集落跡	池跡	墓標・板塔婆	5	(411)	49	5	「[illegible]□南無六道　他	14～16C
広島	福山市	草戸千軒町	1985～1987	集落跡	河川跡・土坑	笹塔婆・塔婆・板塔婆	3	206	20	2	「[illegible]」　他	14～15C
山口	山口市	初瀬	1993	寺院跡	溝跡	笹塔婆（五輪塔形）	16	162	13	0.9	「梵字多数」　他	15C以降
福岡	筑紫郡太宰府町	太宰府学校院跡軍団部	1981	学校跡	溝	墨書木札	1	210	14	4	「南无大般若心経」	10C～中世
佐賀	神埼郡神埼町	城原三本谷南	1990	河川または湿地（池か）跡	落ち込み	卒塔婆	130	135	20	9.5	「＜南无阿弥陀仏」　他	11～12C

報告書抄録

ふりがな	うしろだいせき・おおみちしたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	後田遺跡・大道下遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第49集
編集者名	野尻 侃・丸山晶子・青山 崇・森谷昌央・黒坂広美
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-31 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL0236-72-5301
発行年月日	西暦1997年 10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
後田 うしろだ	山形県 やまがたけん 鶴岡市 つるおかし 大字寺田 おおあざてらだ 字後田 あざうしろだ	6203		昭和63年度登録	38度43分03秒	139度47分58秒	19940509～19940908	14,500	東北横断自動車道酒田線（朝日～酒田間）建設工事
大道下 おおみちした	山形県 やまがたけん 鶴岡市 つるおかし 大字寺田 おおあざてらだ 字大道下 あざおおみちした	6203		昭和63年度登録	38度43分27秒	139度47分56秒	19940509～19940701	5,000	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
後田	集落跡	古墳時代	竪穴住居 1軒	土師器（坏・甕・壺）	中世の溝跡から多量の遺物が出土した。中でも笹塔婆が40点確認され、この周辺で供養等が行われたと考えられる。
		平安時代	掘立柱建物跡 1棟 井戸跡 2基 土坑 5基	須恵器（坏・甕・壺） 赤焼土器（坏・皿・甕） 木製品（井戸枠・鋤）	
		中世	掘立柱建物 4棟 井戸跡 5基 土坑 溝跡	珠洲系陶器（甕・擂鉢） かわらけ・古瀬戸・青磁 木製品（笹塔婆・漆器 井戸枠・曲物）	
		近世	溝跡	近世陶磁器・土製品	
大道下	集落跡	近世	土坑 16基 溝跡 2条	須恵器（坏・甕） 赤焼土器・近世陶磁器 漆器椀	

図　　版

図版1

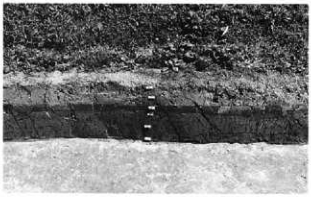
後田遺跡B区全景(北から)

後田遺跡A区全景(空中写真)

図版2

後田遺跡発掘前状況(南から)

表土除去風景(北から)



B区東壁層序(西から)

B区検出状況(西から)

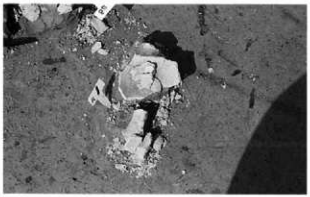
B区検出状況(南から)

図版3

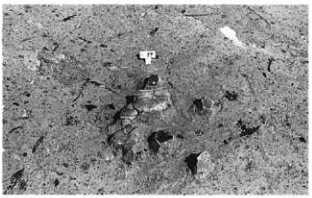
ST1内RP出土状況(東から)

ST1完掘状況(東から)

ST1完掘状況(空中撮影)



RP1出土状況(北から)



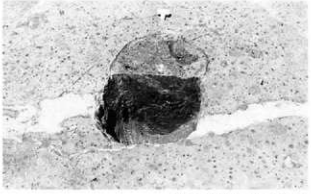
RP77出土状況(西から)

図版4

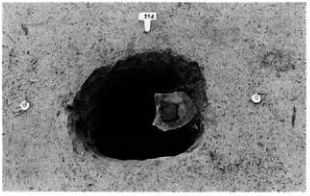
SB6検出状況(東から)

EP85土層断面(南から)

EP89土層断面(東から)

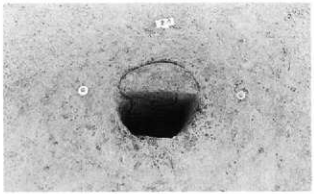


EP88土層断面(南から)

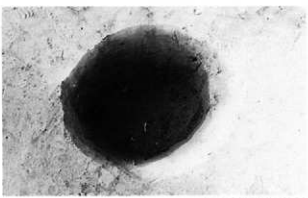


EP214完掘状況(西から)

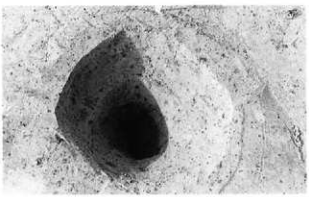
EP209土層断面(南から)



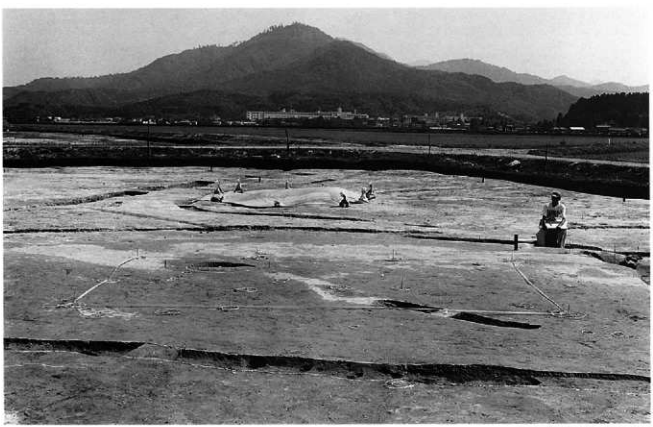
EP210土層断面(東から)



EP209完掘状況(南から)



EP210完掘状況(南から)



SB7検出状況(北から)

図版6

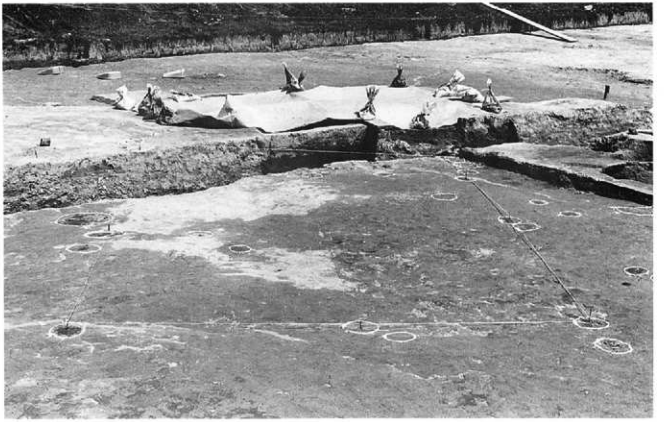
SB8・9検出状況(南から)

EP110土層断面(北から)

EP111E土層断面(北から)

P110完掘状況(南から)

EP109完掘状況(南から)

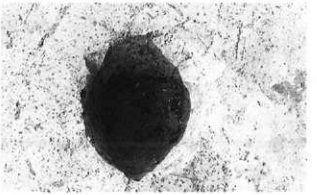


SB10検出状況(北西から)

EP112土層断面(東から)

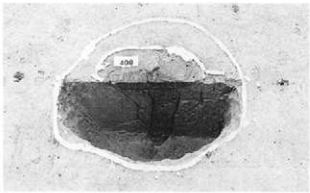
EP191完掘状況(西から)

EP112・113完掘状況(東から)

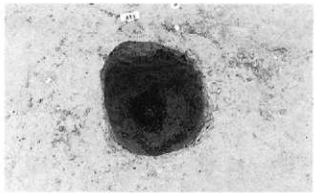


EP196完掘状況(南から)

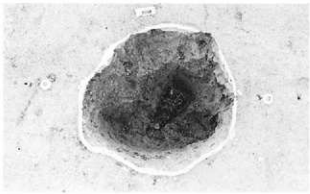
図版8



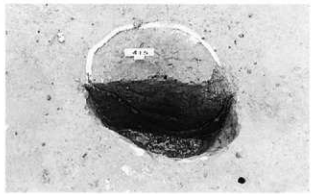
EP409土層断面(南から)



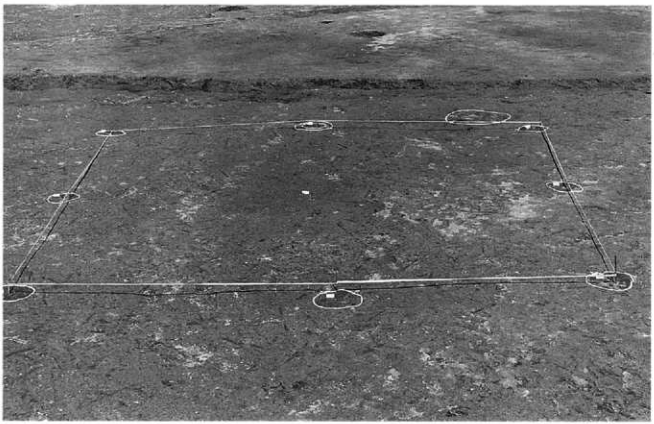
EP411完掘状況(南から)



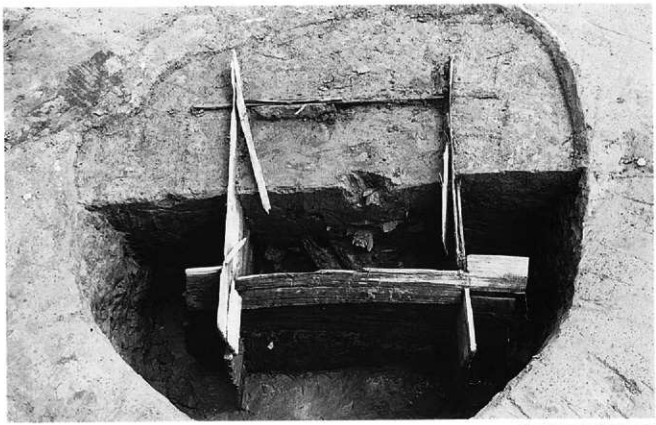
EP409完掘状況(南から)



EP415土層断面(西から)



SB12検出状況(南から)



SE2土層断面(南から)

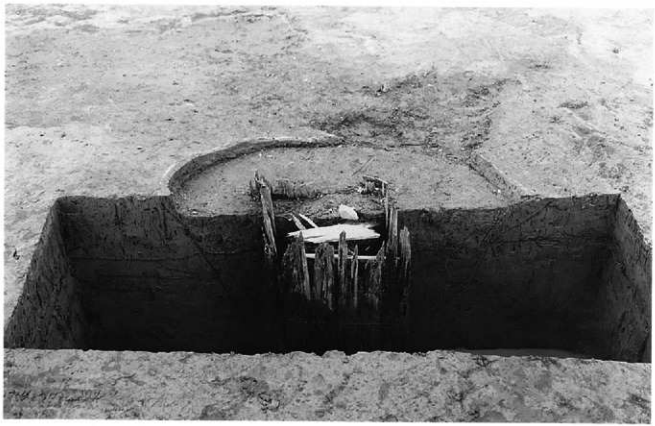
SE2検出状況(西から)

SE2枠内土器出土状況(北東から)

SE2井戸枠検出状況(南から)

SE2土層断面(南から)

図版10



SE4土層断面(南から)

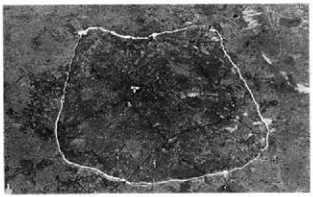
SE4検出状況(南から)

SE30土層断面(南から)

SE30枠外土層断面(南から)

SE30上層断面(南から)

図版11



SE27検出状況(北から)

SE28土層断面(南から)

SE27土層断面(南から)

SE28完掘状況(南から)

SE27完掘状況(南から)

図版12

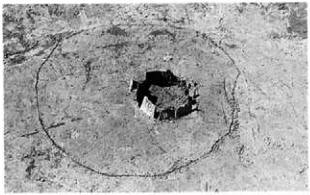
SE45井戸枠検出状況(東から)

SE45上層断面(南東から)

SE45土層断面(東から)

SE45井戸枠検出状況(東から)

SE45完掘状況(東から)



SE313検出状況(東から)

SE313土層断面(南から)

SE313完掘状況(南から)

SE313完掘状況(南から)

SE313土層断面(南から)

図版14

SK43～SK52検出状況(西から)

SK41～SK52完掘状況(南から)

SK51土層断面(東から)

SK48完掘状況(北から)

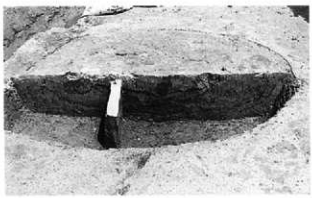
SK49土層断面(南から)

SK50完掘状況(北から)

SK47土層断面(南から)

SK52土層断面(西から)

図版15



SK23土層断面(南から)

RP17出土状況(南から)

SK23完掘状況(南から)

SK61完掘状況(南から)

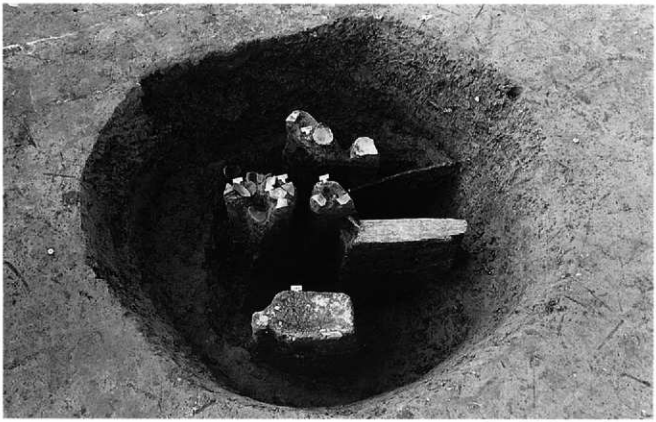
SK68・SD69完掘状況(南東から)

SD69土器出土状況(南から)

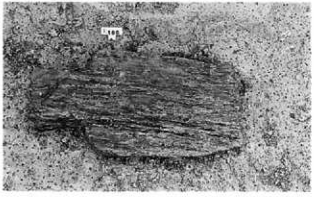
SK68土層断面(南東から)

SK76完掘状況(北から)

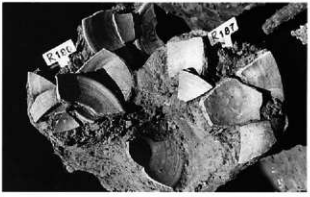
図版16



SK359遺物出土状況(南から)



RW186出土状況(西から)



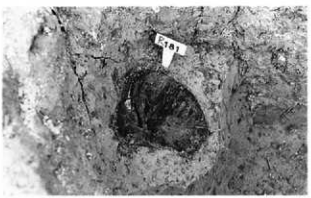
RP187・RP190出土状況(南から)

SK359上層土器出土状況(南から)

SK359完掘状況(西から)

RW181・RP182出土状況(西から)

SK264土層断面(西から)



RW181出土状況(西から)

RP182出土状況(西から)

SK264完掘状況(西から)

SK358土層断面(南から)

SK345土層断面(南から)

SK358完掘状況(南から)

図版18

SD31遺物出土状況(東から)

RW184出土状況(東から)

RP179出土状況(南から)

RP181出土状況(南から)

SD278土層断面(東から)

RP183出土状況(東から)

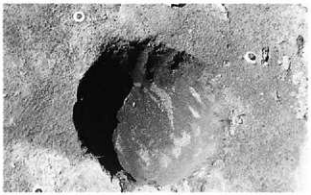
SD278・SK279土層断面(東から)

B区溝跡精査状況(西から)

SP62検出状況(西から)

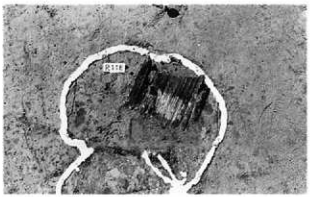
SP84完掘状況(北から)

SP124完掘状況(南から)


SP129完掘状況(南から)

SP151完掘状況(南から)

SP222完掘状況(南から)


SP231検出状況(北から)

EP392土層断面(南から)

図版20

RW170出土状況(北から)

RW2出土状況(西から)

RW90出土状況(北から)

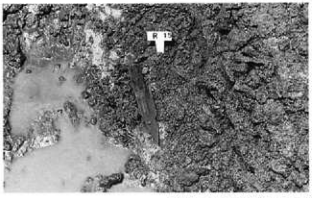
RW148出土状況(北から)

RW141出土状況(西から)

RW4出土状況(北から)

RW11出土状況(南から)

RW18出土状況(北から)



RW15出土状況(南から)

RW83出土状況(南から)

RP114出土状況(南から)

RW157出土状況(南から)

RW163出土状況(南から)

図版22

SG3検出状況(北から)

SG3精査風景(北から)

RX14出土状況(北から)

SG3杭列検出状況(北から)

SG3完掘状況(東から)

SG3土層断面(東から)

SG3土層断面(西から)

SG3土層断面(東から)

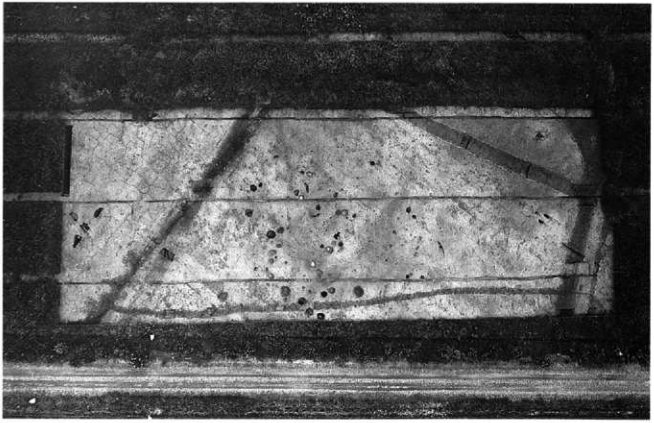
SG3土層断面(西から)

SG3土層断面(西から)

SG3土層断面(東から)

図版24

大道下遺跡全景(北から)



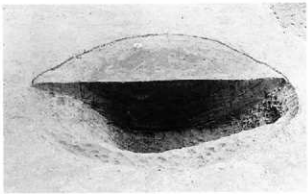
大道下遺跡調査区全景(空中写真)

Dトレンチ検出状況(南から)

Eトレンチ検出状況(北から)

SD22A土層断面(西から)

SD22D土層断面(南から)



SK29土層断面(南から)

SK33土層断面(南から)

SK32土層断面(西から)

SK33完掘状況(東から)

図版26

1

2

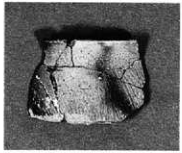
3

4

5

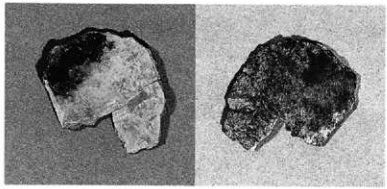
6

7


10

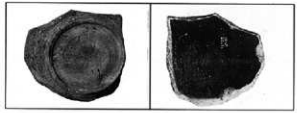
9

8


13

11

12


20

図版27

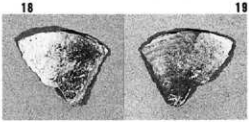
14

15

16

18

19


21

17

23

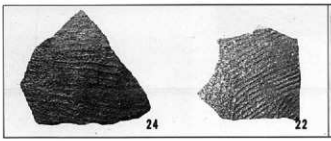
29

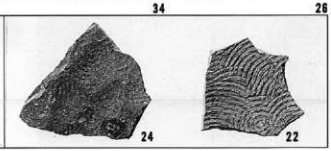
32

25

34

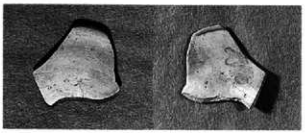
26

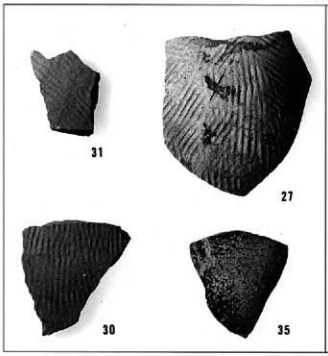

24 22

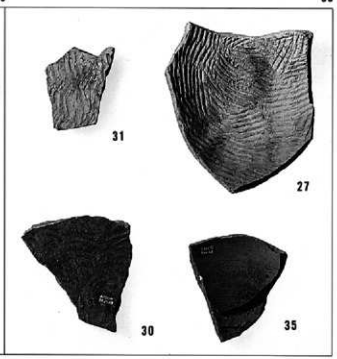

24 22

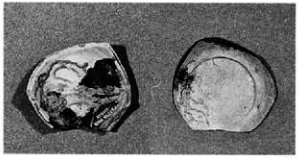
図版28

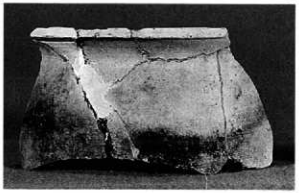
28


33


31
27
30
35


31
27
30
35

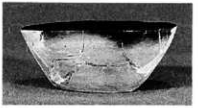

38


39

40

37

42

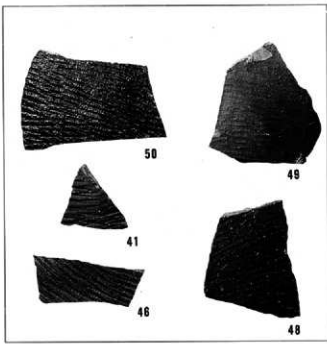

45

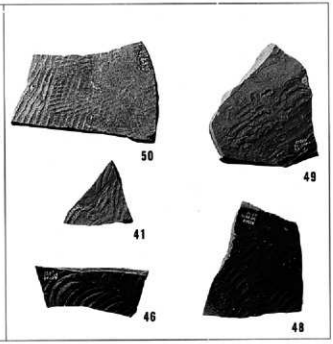
36

43

44

47





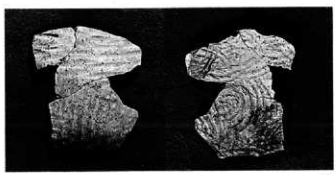
51

59

62

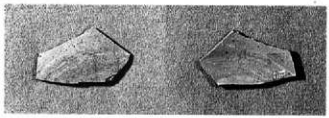
60

63


55

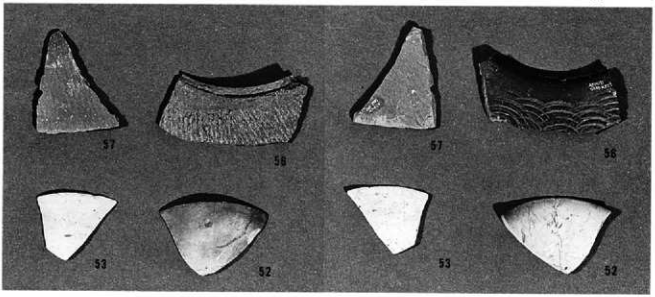
図版30

58



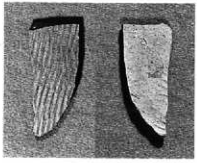
54

61



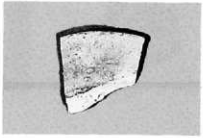
64

65



67

66



69

図版31

70

71

72

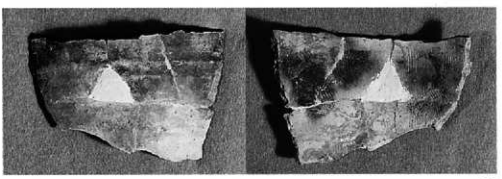
68

76

73

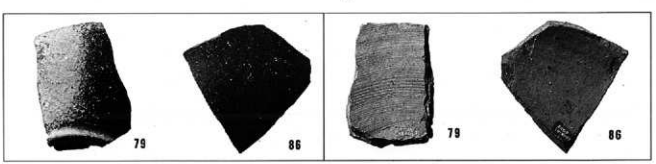
74

75

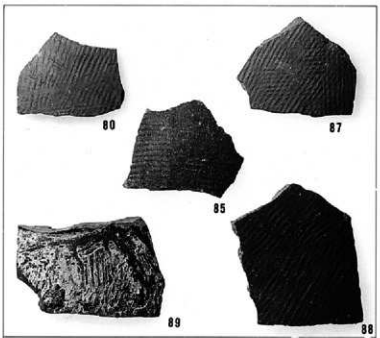

77

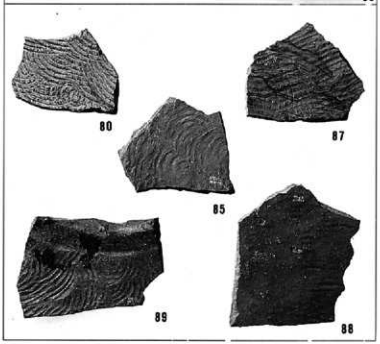
78

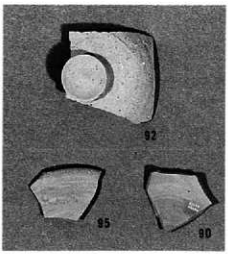
84

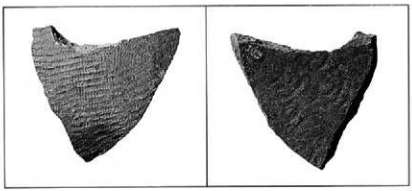

79 86 79 86

図版32





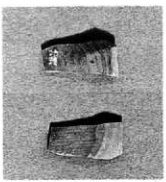




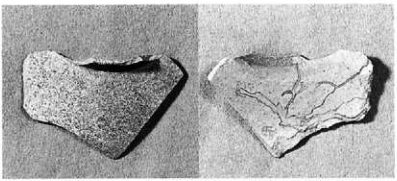
99

97

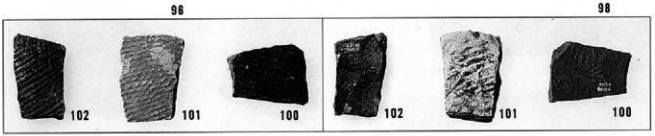
91

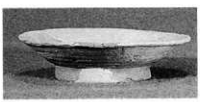


96



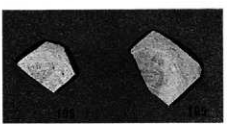
98



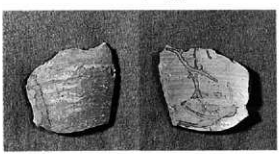


103

104



108



109

図版34

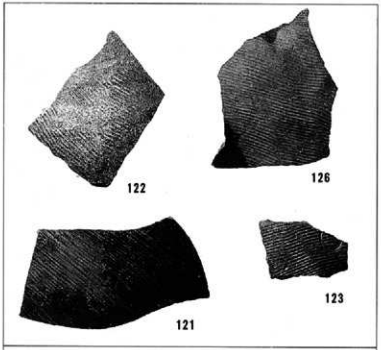
110

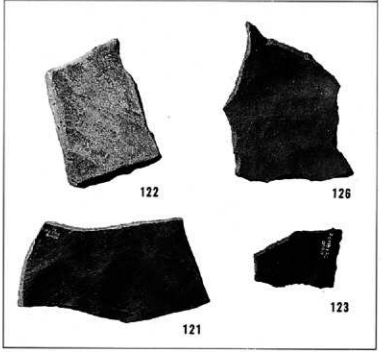
112

111

113

113　墨書

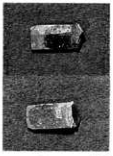




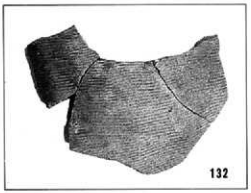
114

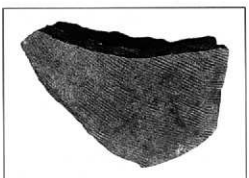
115

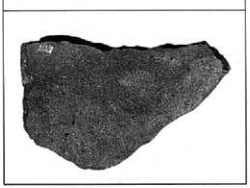
117



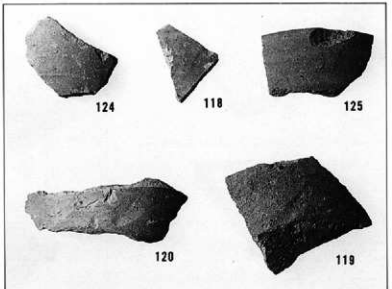
116

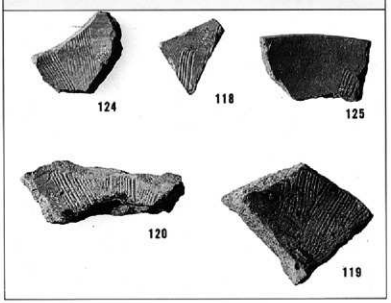

132

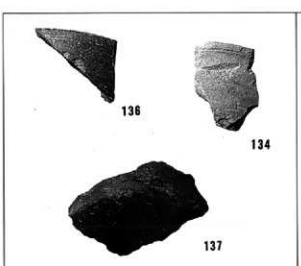


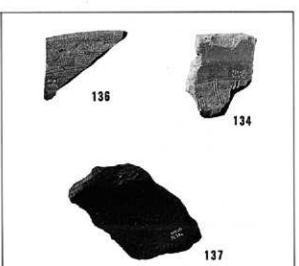


133

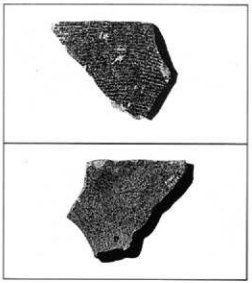

124
118
125
120
119


124
118
125
120
119

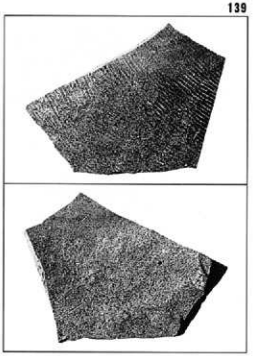

136
134
137


136
134
137

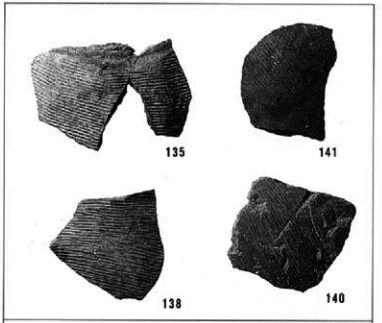
図版36

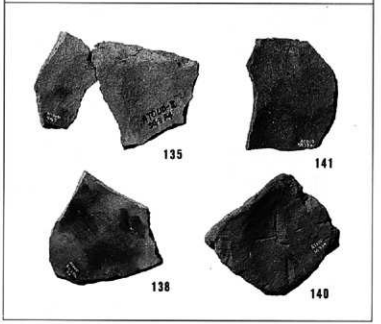


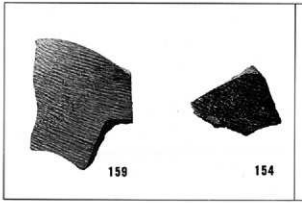
139

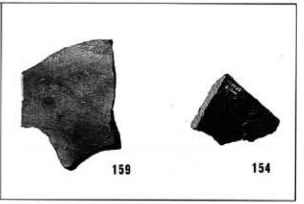


149

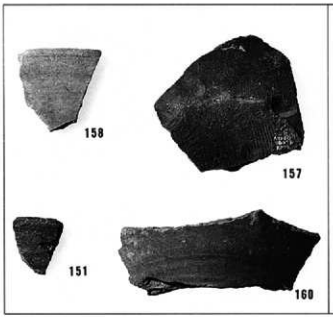


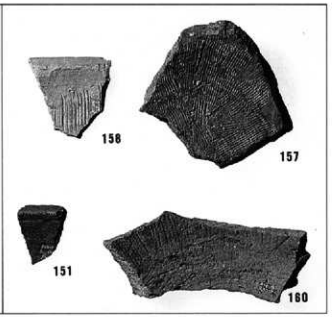


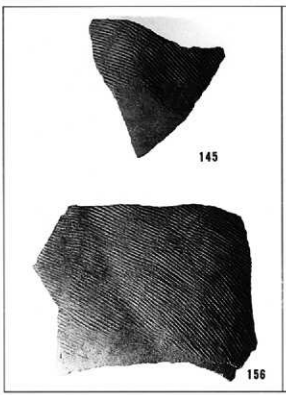


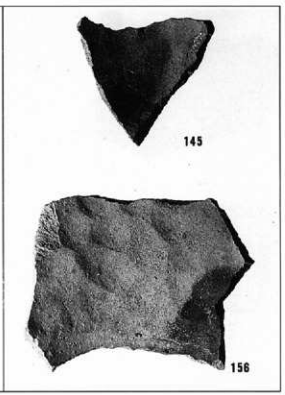


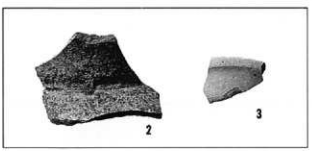
図版37



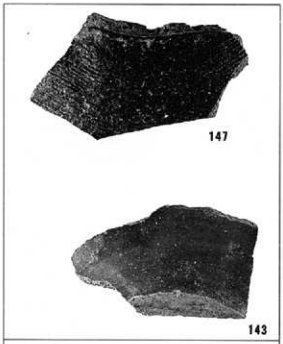


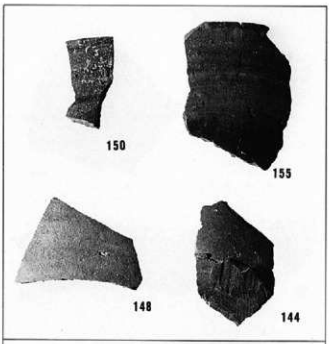


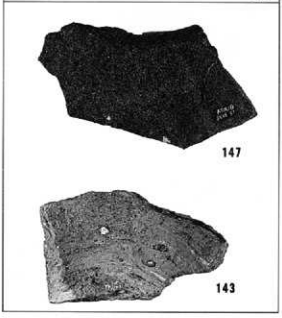


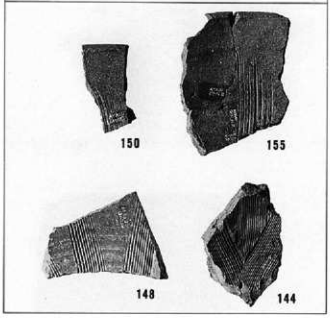


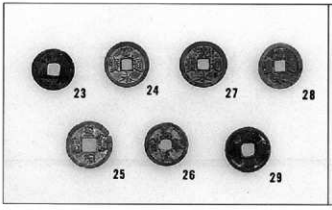
図版38

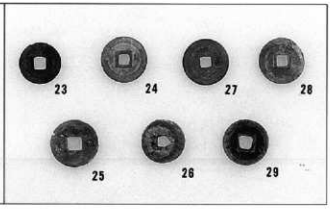

147
143


150
155
148
144

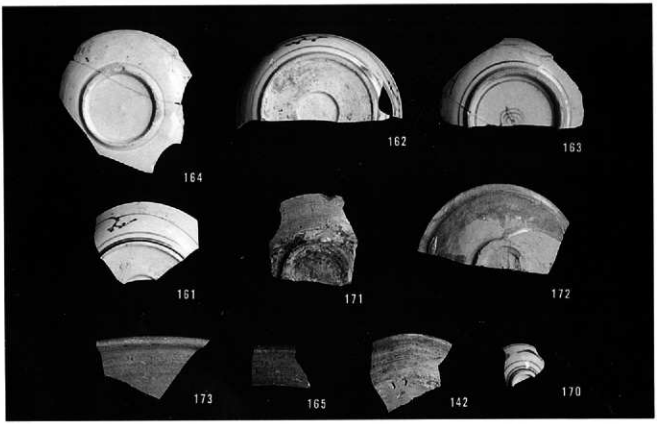

147
143

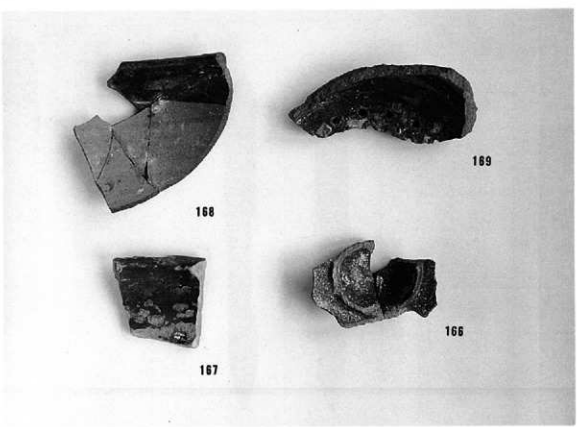

150
155
148
144


23
24
27
28
25
26
29

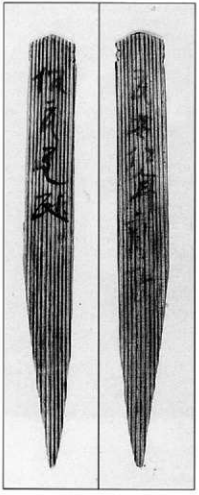

23
24
27
28
25
26
29

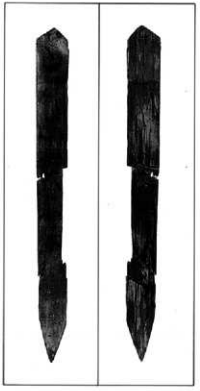
図版39

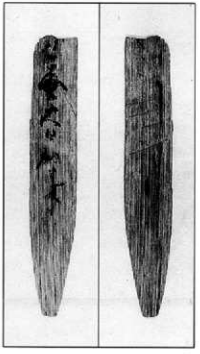


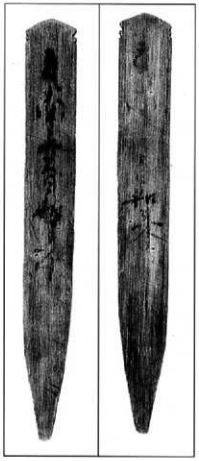


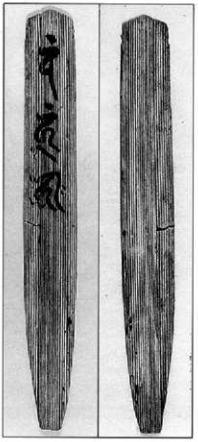
図版40

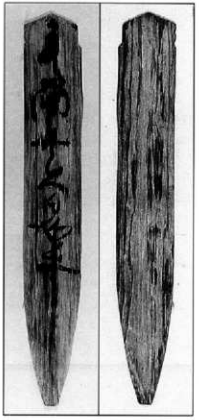

1


2

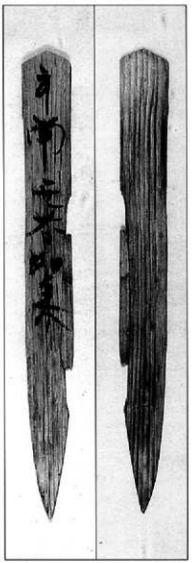

3


4

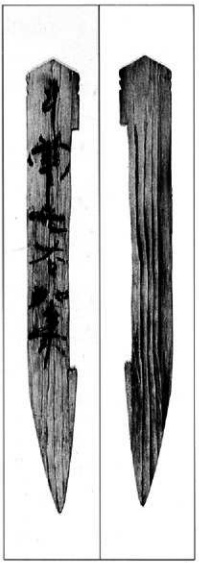

5


6

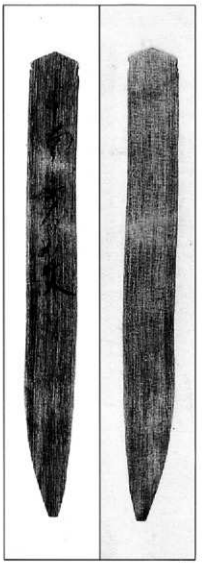
図版41



7



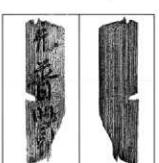
8



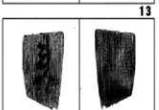
10

11

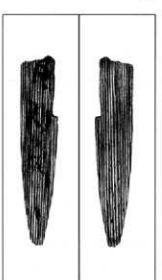
12



13

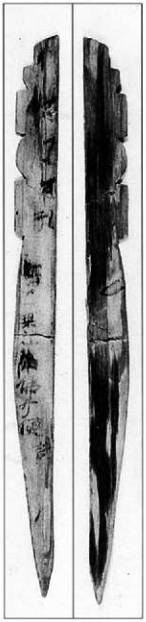


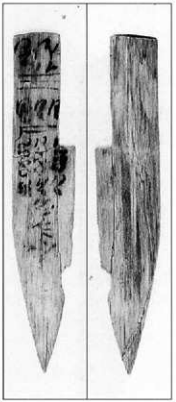
15

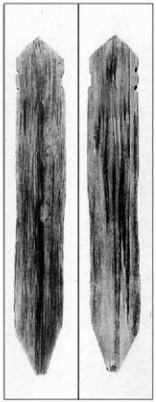


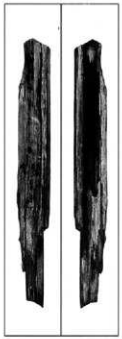
14

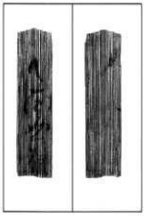
図版42

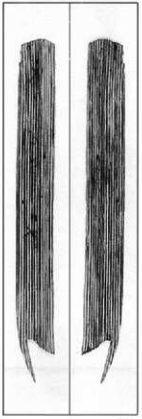

9

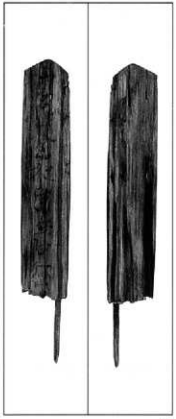

16


17

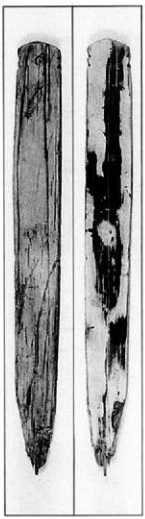

20

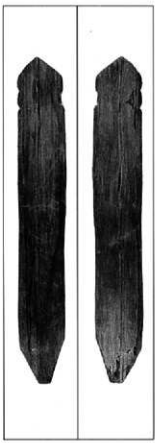

21

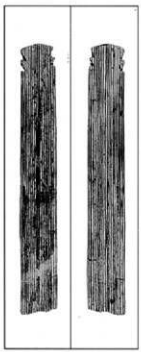

18

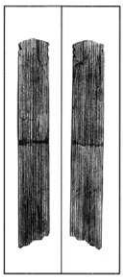

19

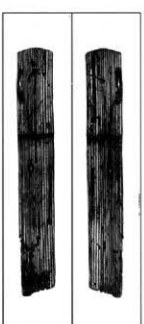
22

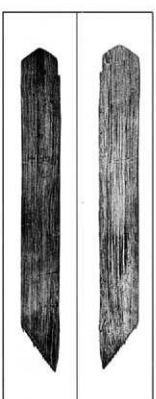

23

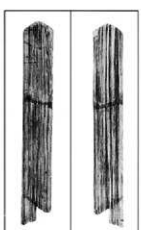

24

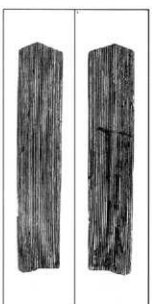

25


26


27

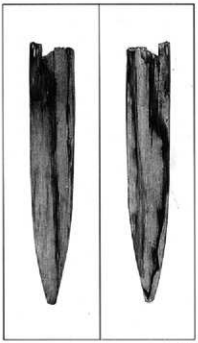

28

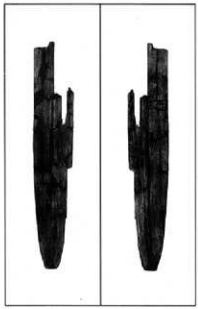

29

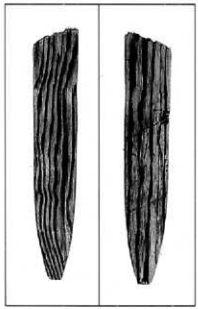

30

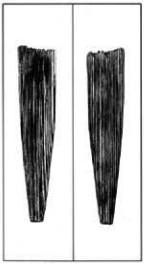
31

図版44

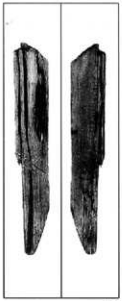

32

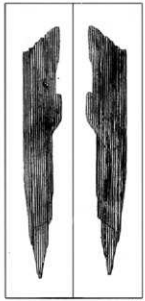

33


34

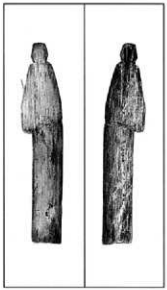

35

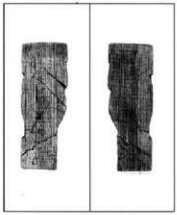
36

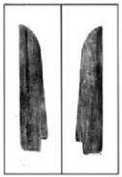

37


38

39

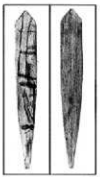

40


41

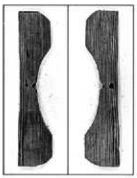


42

43

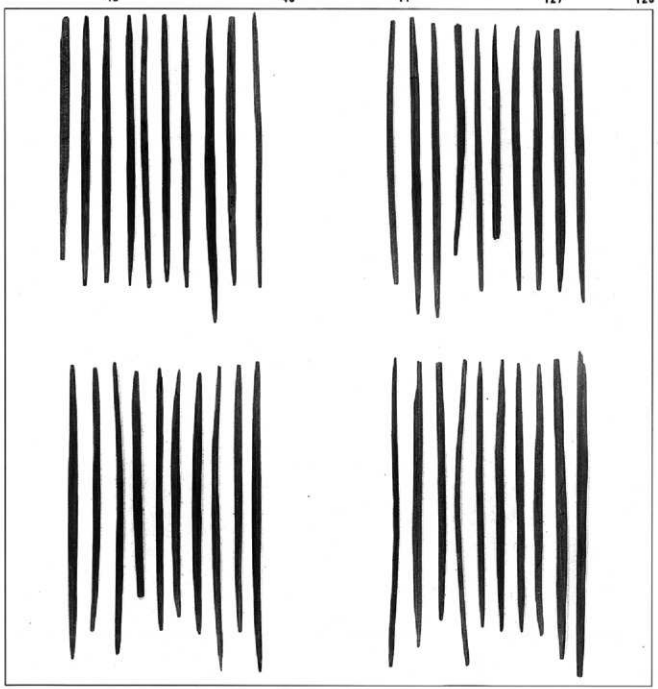


44



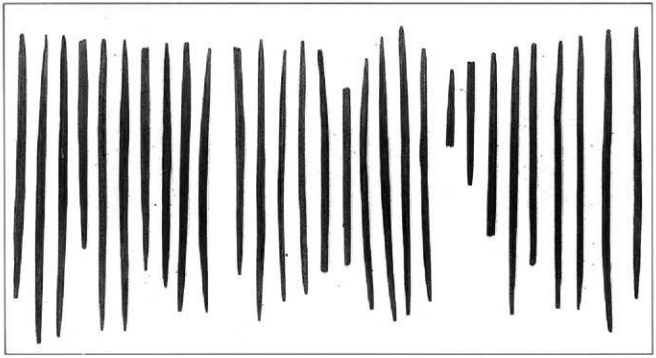
127

128

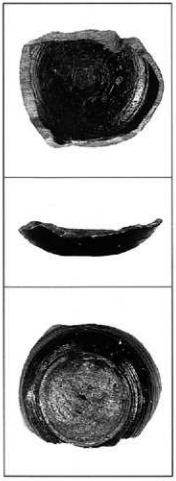


管状木製品

図版46

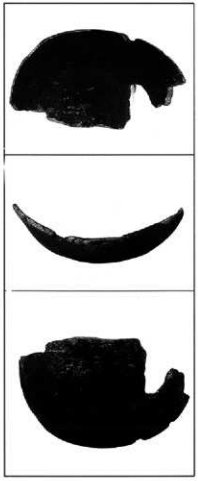


管状木製品

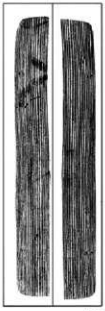


120

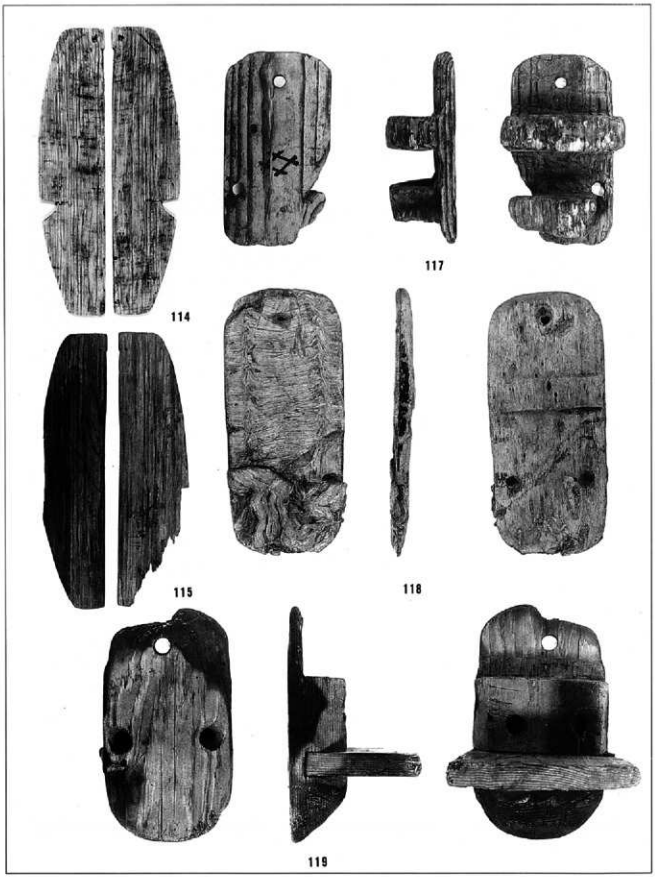
121



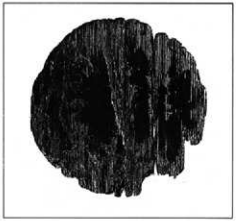
122

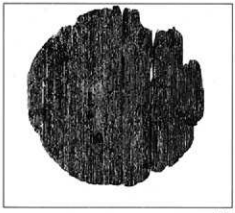


126

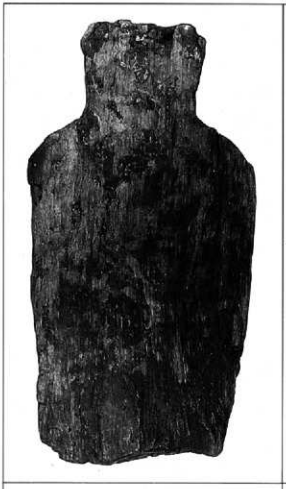

114
117
115
118
119

図版48



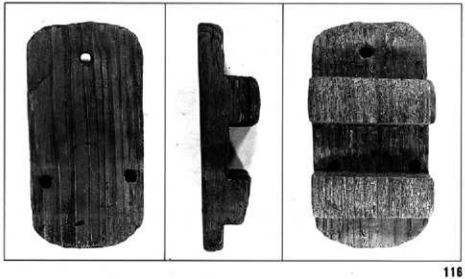


123



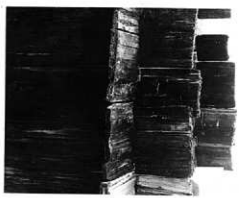
125

124



116

SE2井戸枠上部復元



南東側組合せ部分

134

135

136

129

130

131

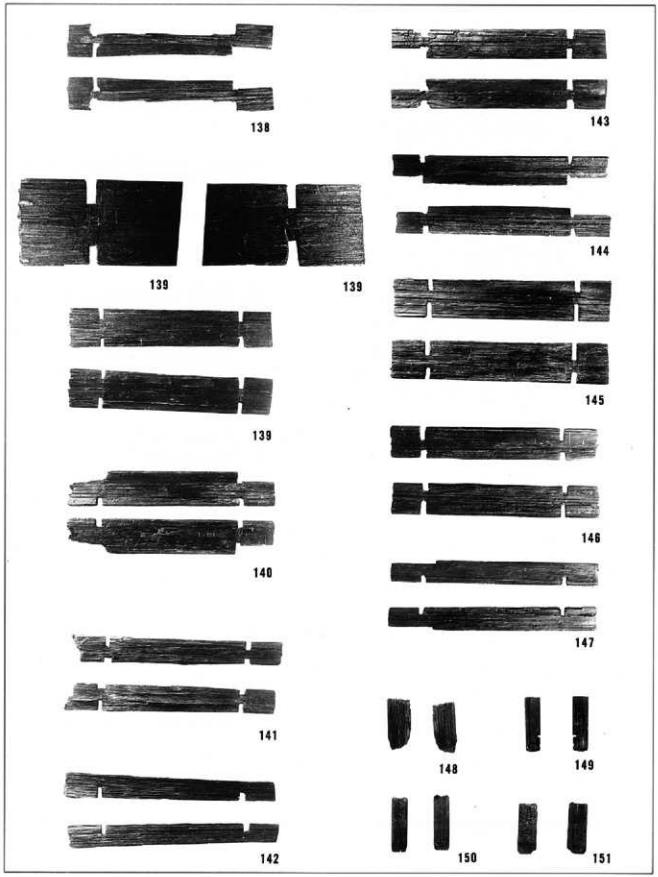
132

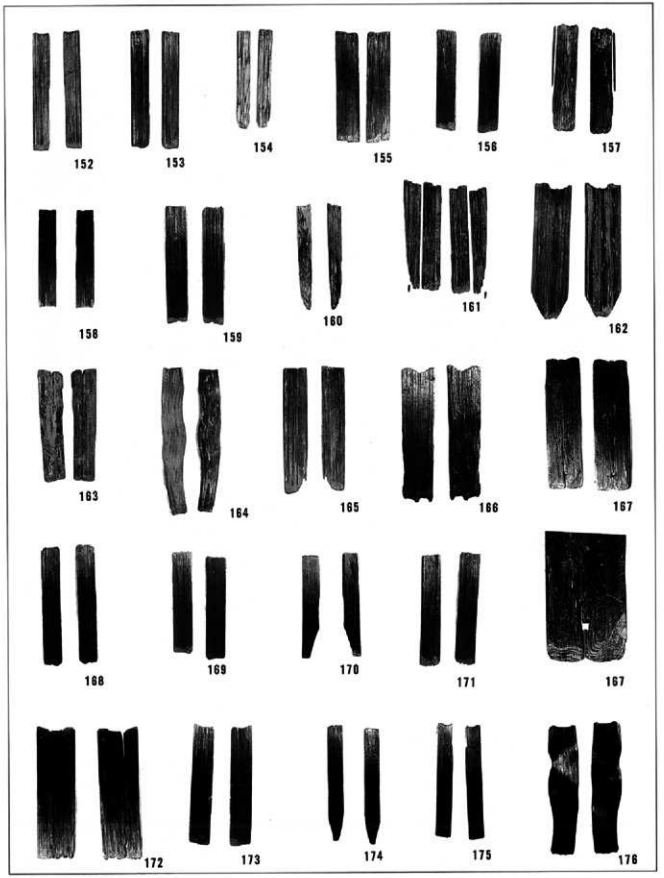
132

133

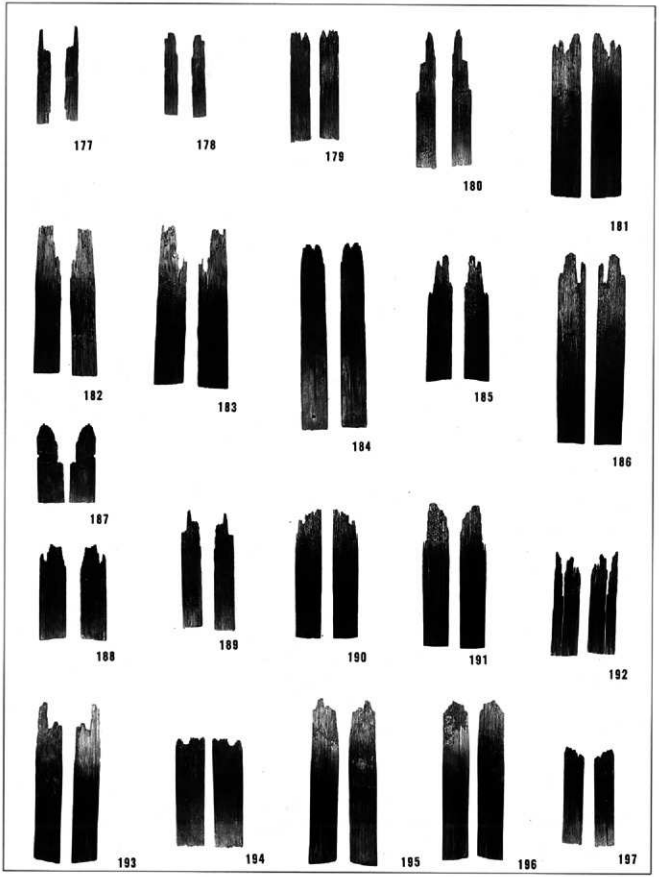
137

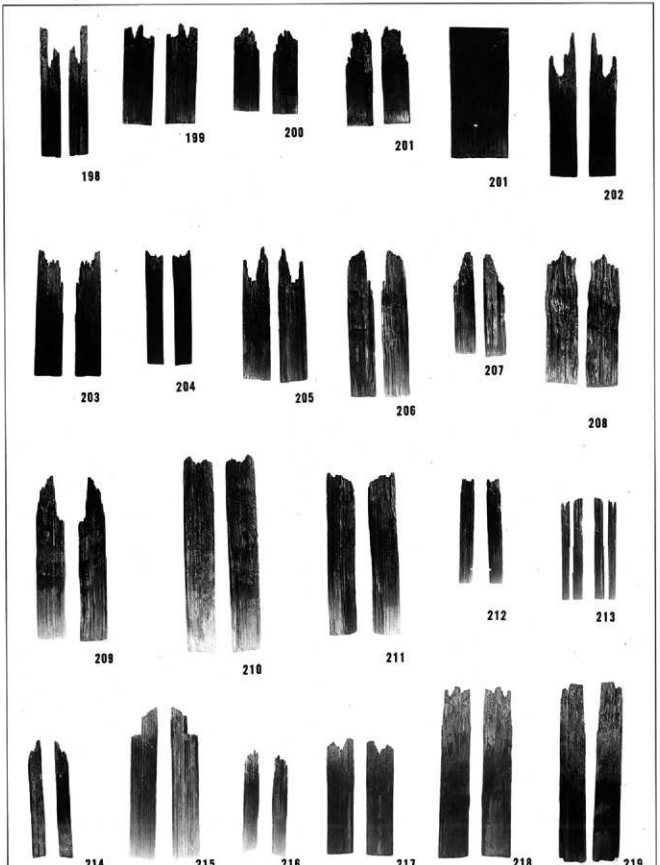
図版50



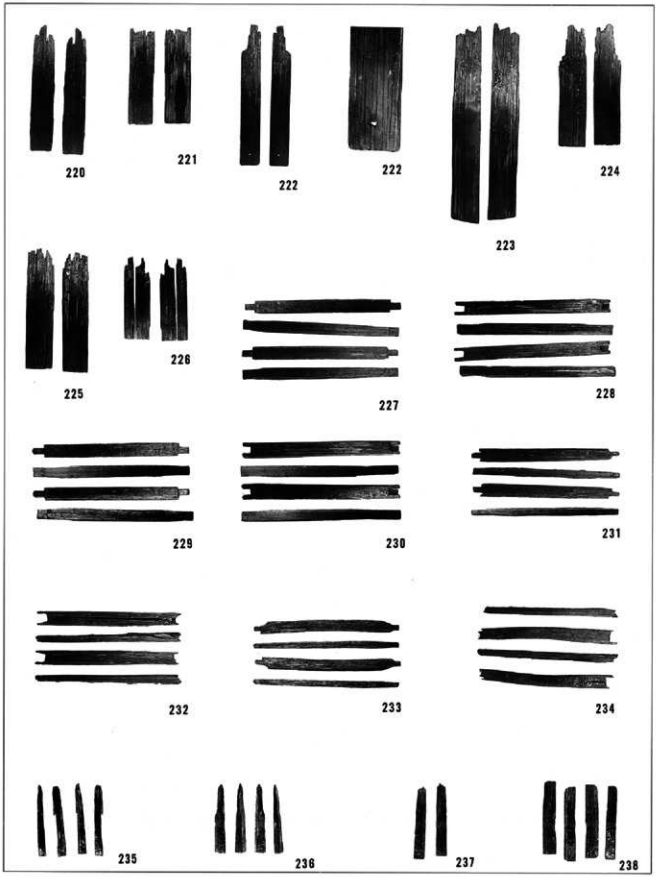

152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
167
172
173
174
175
176

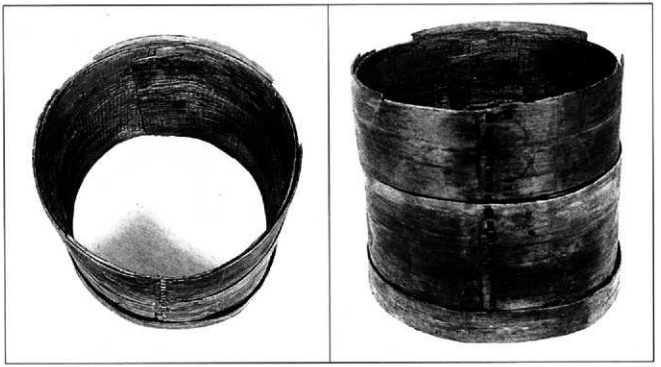
図版52


177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197

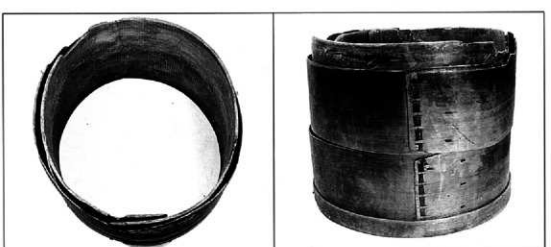

198
199
200
201
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219

図版54

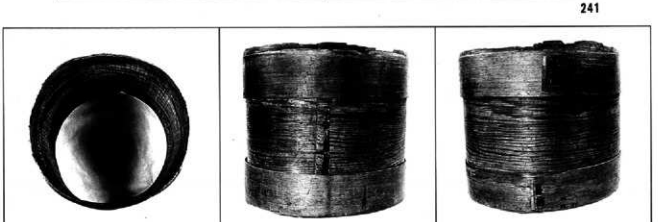

220
221
222
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238



239

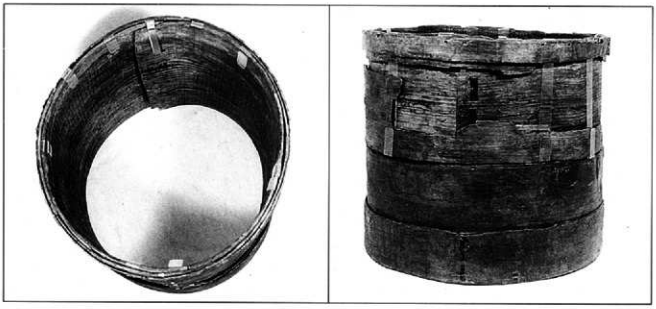


241



242

図版56



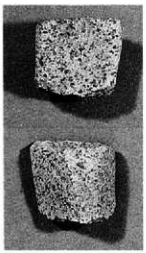
240(上下逆)

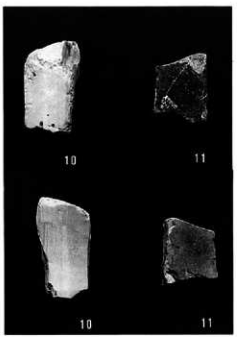
240綴合せ部分

240線刻画

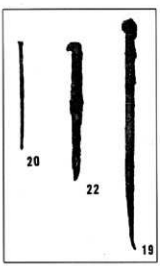
240線刻

7
6


9


10
11
10
11

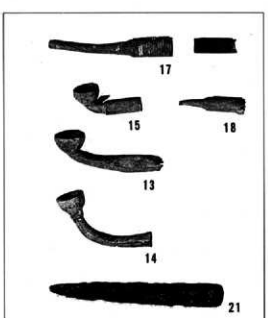
12


20
22
19

8

16

1
2
5
3
4


17
15
18
13
14
21

1
2
5
3
4

付　　編

後田遺跡　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
平成7年3月24日

はじめに

後田遺跡は、出土した遺物から古墳時代から鎌倉時代頃の集落と中世期の墓制を表す遺跡と考えられているが、時期が明らにされていない溝や土坑なども少なくない。その中で一部の遺構には覆土中にテフラと考えられる堆積物が認められている。本報告では、これら堆積物について分析を行ない、テフラであればテフラの同定をする。それによりテフラの噴出年代との関係から遺構の年代について考察する。

また、本遺跡の特徴である中世期の墓制を示す遺物が多量に出土した河道跡や土坑および溝の覆土について花粉分析を行い、当該期の調査地点および周辺地域における古植生について考察する。これには、河道堆積物から出土した材片の樹種同定も行うことにより、古植生の補足資料とする。

さらに、これらの覆土については、リンおよびカルシウムの含量を分析する。日本のように気候が温暖多雨で、土壌の排水性が良好かつ酸性が強いところでは、土壌中の有機物は分解されやすく、その水溶成分は土壌中を下方へ流亡してしまう。すなわち、土坑などの遺構に人または動物の遺体や骨などが埋納されていたとしても、長期間その形状を保つことは稀である。そこで、人を含む動物の骨に多量に含まれ、しかも土壌中を比較的流亡しにくいリン酸(竹迫、1981)を分析し、リン酸とともに骨の主成分であるカルシウムについても分析を行うことにより、人または動物の遺体あるいは骨の存在を検証する。

最後に実際に確認された骨については、その種類や部位を同定し、本遺跡の中世期に関する情報とする。

Ⅰ．試　料

試料は、SD3溝跡をはじめとして土坑や溝など各遺構の覆土より採取した。試料は全部で19点であり、このうちほとんどは土壌試料であるが骨片からなるもの材片を含むものなどもある。各試料の試料番号と注記および質を表1に示す。

Ⅱ．テフラの同定

1．試料の選択

試料番号7、8、9の3点について分析を行う。これらは、いずれも土層断面における観察からテフラからなる堆積物であると考えられている(表1)。

表1　分析試料一覧

試料番号	注記	試料の質	備考	T	P	P-Ca	骨	W
1	RX93 940721	大型動物骨	大小片100片以上				○	
2	SD3　F4　940803	大型動物骨	中小片50片				○	
3	—	大型動物骨	大片数点					
4	SD3　F4　エリア3出土骨	大型動物骨	小片200片					
5	SD3　F3　940727	骨片掘じり黒褐色シルト	大型動物骨片数点			○		
6	SD3　F4　エリア2出土骨	骨片掘じり土壌	小片わずか		○			
7	B区火山灰　SK264 940811	シルト質砂	十和田a純層か？	○				
8	B区　SD278F2　火山灰940906	砂質土壌	十和田a2次堆積か？	○	○			
9	SK29 940715	砂質土壌	軽石？混在	○		○		
10	SK29　土940715	砂質土壌				○		
11	ST1　RP66 土器内土壌	粘土質シルト	土器内の土壌		○	○		
12	SK47F 木製品の上 R17 940720	粘土質シルト			○	○		
13	SK47F 木製品の上 R17 940720	粘土質シルト						
14	SD3　F3　940728	黒褐色土壌	材片5～6点混じる		○			○
15	A区　SD3　Aトレンチ北壁　I層	黒灰色砂質シルト	耕作土		○	○		
16	A区　SD3　Aトレンチ北壁　II層	黒灰色砂質シルト						
17	A区　SD3　Aトレンチ北壁　III層	黒灰色砂質シルト	包含層		○	○		
18	A区　SD3　Aトレンチ北壁　IV層	灰色砂質シルト			○			
19	A区　SD3　Aトレンチ北壁　V層	灰色シルト質粘土			○			

T：テフラ分析　P：花粉分析　P-Ca：リン・カルシウム分析　骨：骨の同定　W：材樹種同定

2．分析方法

試料に水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥物を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラスの産状を調べる。さらに、必要ならば火山ガラスの屈折率の測定を行う。これらの観察および測定結果からテフラの同定を行う。なお、屈折率の測定は、新井(1972)に示された浸液法に従って行う。

3．結　果

各試料の分析結果を表2に示す。3点の試料のうちB区SK264F(試料番号7)には多量の細砂～極細砂径の火山ガラスが含まれる。火山ガラスは、薄手平板状のいわゆるバブル型と気泡の長く伸びたものが集まった繊維束型およびスポンジ状に発泡した軽石型の3形態が混在する。この中では、繊維束型と軽石型が非常に多く、バブル型は少量であった。また、どの形態の火山ガラスもほとんどは無色透明であるが、微量の褐色のものも含まれる。火山ガラスの屈折率は、n1.500～1.505であった。

B区SD278F2(試料番号8)は火山ガラスが微量認められたのみで、SK29(試料番号9)にはスコリア、火山ガラス、軽石のいずれも全く認められない。どちらも黒雲母の細片を多く含み砂分のほとんどは長石や石英粒である。また、SK29(試料番号9)で軽石と指摘されたものは、軽石ではなく、かなり風化の進んだ貝殻片あるいはサンゴのようなものである。

表2　テフラ分析結果

試料番号	スコリア			火山ガラス			軽石		
	量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調	形態	量	色調・発泡度	粒径
7	−			++++	cl>>br	pm>>br	−		
8	−			+	cl	pm,br	−		
9	−			−			−		

++++：多量　+++：中量　++：少量　+：微量　−：なし
cl：無色透明　br：褐色　pm：軽石型　bw：バブル型
w：白色　g：良好

4．考　察

B区SK264F(試料番号7)に認められた火山ガラスは、町田ほか(1981)、Arai et.al.(1986)、町田・新井(1992)等の記載から、十和田カルデラ(To−a：町田ほか，1981；町田・新井，1992)に由来すると考えられる。To−aは、A.D.915年に十和田カルデラから噴出したテフラで、東北地方一帯で認められている。(町田・新井，1992)。B区SK264F(試料番号7)が採取された堆積物は、土坑の覆土中であることと火山ガラスの多さから、降灰時に土坑覆土上に堆積したものが、ある程度の撹乱は受けたにしても、そのまま覆土中に保存されたものと考えられる。したがって、SK264土坑は、To−a降灰以前に構築された可能性が高い。

B区SD278F 2(試料番号8)に認められた火山ガラスは、形態的な特徴からTo−aに由来すると考えられる。しかし、試料の採取された堆積物は、溝の覆土であることとテフラとは由来の異なる砕屑物(黒雲母の細片や石英粒など)が多いことから、To−aの一次降下堆積物ではない。おそらく、降灰後にある時間間隙をもって周囲より取り込まれて溝内に堆積したものと考えられる。ただし、その場合でも、溝はTo−a降灰以前に構築されてうたと考えられる。

試料番号9の採取されたSK29土坑については、テフラが検出されなかったことから、本分析では時期の推定はできない。

Ⅲ．古植生の推定

1．試料の選択

花粉分析の試料は、遺物の出土状況から中世期のものと考えられる河川跡、溝、土器内、土坑の覆土と中世期の包含層を含む自然堆積層の合計9点を選択した。選択した試料は表1に示す通りである。またSD 3F 3(試料番号14)から抽出した材片5点について樹種同定を行う。

2．分析方法

(1) 花粉分析

花粉・胞子化石は、湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、重液分離(臭化亜鉛、比重2.2)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸：濃硫酸=9：1)の順に物理・化学的な処理を施して、試料から分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで投入してプレパラートを

作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の層位的分布図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類を、ハイフォン(-)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

（2）樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3．結　果

（1）花粉化石

結果は、表3・図1に示す。SD3　F4(試料番号6)・SD3　I層(試料番号15)では、花粉化石の保存状態が悪い。特にSD3　F4(試料番号6)では、検出個体数も少ない。

木本花粉化石の出現傾向は、SD3　F4(試料番号6)・B区SD278F2(試料番号8)・SK47F(試料番号12)・SD3　F3(試料番号14)・SD3　V層(試料番号19)とSD3　I層(試料番号15)・SD3　III層(試料番号17)・SD3　IV層(試料番号18)で異なる。前者ではブナ属が最も高率に出現するこの他、マツ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属コナラ亜属・ニレ属ーケヤキ属などを伴う。これに対して後者では、マツ属が最も高率に出現し、スギ属・ハンノキ属・ブナ属・コナラ亜属・ニレ属ーケヤキ属などを伴う。なお、マツ属は単維管束亜属に比べ、複維管束亜属が多く検出される傾向にある。

一方、草本花粉は、全試料を通じて総花粉・胞子数の中で占める割合が高い。中でもイネ科が最も高率に出現し、カヤツリグサ科・クワ科・サナエタデ節ーウナギツカミ節・ナデシコ科・ヨモギ属などを伴う。この他、サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ソバ属・キカシグサ属サンショウモなどが検出される。

（2）樹種

5点の試料は、ハンノキ属が1点、広葉樹(散孔材)が4点である。この内、広葉樹(散孔材の4点は、いずれもハンノキ属よりは大型の木材が割れたものであり、全て同一個体に由来している可能性が高い。以下に、各種類の解剖学的特徴などを記す。

・ハンノキ属(Alnus sp.)　　カバノキ科

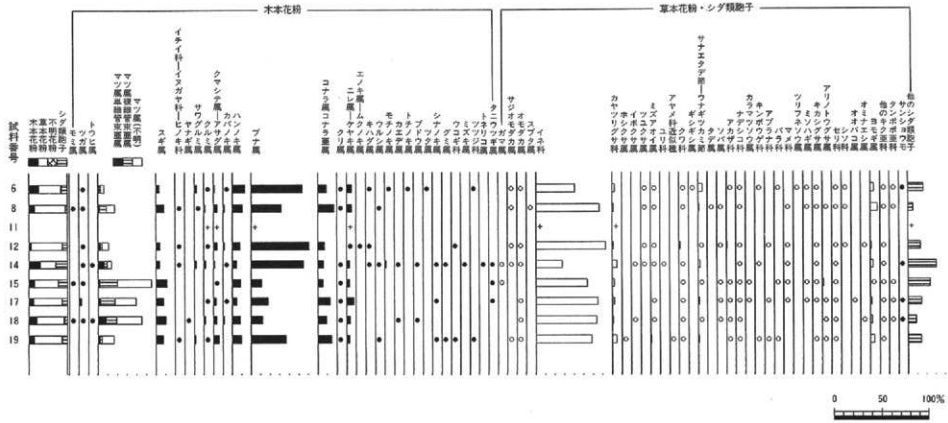


図1　花粉化石群集の層位的分布

出現率は、木本花粉は木本花粉総数を、草木花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を、＋は木本花粉100個体未満の試料において検出された種類を示す。

表 3　花粉分析結果

種類（Taxa）	6	8	11	12	14	15	17	18	19
木本花粉									
モミ属	0	1	0	0	0	1	0	1	0
ツガ属	1	2	0	1	2	2	5	1	0
トウヒ属	0	0	0	0	1	0	0	2	0
マツ属単維管束亜属	3	4	0	5	15	3	5	20	4
マツ属複維管束亜属	3	16	0	4	7	38	32	27	5
マツ属（不明）	7	20	0	14	11	75	48	64	27
スギ属	7	19	0	9	9	24	17	26	17
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	0	1	0	1	1	0	0	0	2
ヤナギ属	0	0	0	0	0	0	0	1	0
サワグルミ属	6	2	0	0	5	0	0	0	3
クルミ属	1	3	1	2	5	0	2	4	2
クマシデ属－アサダ属	3	9	1	8	3	2	7	9	13
カバノキ属	2	3	0	3	2	0	2	4	0
ハンノキ属	29	25	0	17	11	19	11	21	21
ブナ属	115	73	7	130	131	24	39	39	81
コナラ属コナラ亜属	19	40	0	15	14	12	28	22	32
クリ属	2	1	0	0	1	1	2	1	1
ニレ属－ケヤキ属	11	12	1	2	8	7	17	10	7
エノキ属－ムクノキ属	0	0	0	1	0	0	0	0	0
キハダ属	1	0	0	1	1	0	0	0	0
ウルシ属	0	1	0	0	1	0	0	0	1
モチノキ属	2	0	0	0	3	0	0	0	0
カエデ属	0	0	0	0	1	0	0	2	0
トチノキ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ブドウ属	0	0	0	0	1	0	0	1	0
ツタ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0
シナノキ属	0	0	0	0	1	0	1	0	1
グミ属	0	0	0	0	1	0	0	0	1
ウコギ科	0	0	0	1	0	0	0	0	2
ミズキ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0
ツツジ科	1	0	0	0	0	0	0	0	1
トネリコ属	0	0	0	0	1	0	0	0	0
タニウツギ属	0	0	0	0	1	2	1	0	0
草本花粉									
ガマ属	0	0	0	0	1	1	0	0	0
サジオモダカ属	1	1	0	1	1	0	0	0	2
オモダカ属	3	0	0	2	1	0	1	1	1
スブタ属	0	1	0	0	0	0	0	0	0
イネ科	331	1038	22	2475	223	757	1091	735	969
カヤツリグサ科	22	19	1	50	40	32	34	14	80
ホシクサ属	0	0	0	0	0	0	0	0	2
イボクサ属	0	0	0	0	1	0	0	1	0
ツユクサ属	1	1	0	1	6	0	0	0	0
ミズアオイ属	7	6	0	4	3	0	8	2	19
ユリ科	0	0	0	0	1	0	0	0	0
アヤメ科近似種	0	0	0	0	0	0	0	0	1
クワ科	3	2	0	41	1	2	3	2	3
ギシギシ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0
サナエタデ節－ウナギツカミ節	40	18	0	21	17	13	22	9	17
タデ属	0	1	0	0	0	0	0	0	0
ソバ属	0	4	0	1	0	4	10	3	0
アカザ科	1	0	0	41	0	3	1	1	5
ナデシコ科	1	2	0	7	3	1	1	1	6
カラマツソウ属	0	0	0	0	0	2	1	0	0
キンポウゲ科	2	0	0	0	1	0	0	0	1
アブラナ科	0	0	0	5	0	0	2	0	8
バラ科	3	0	0	0	0	1	0	0	1
マメ科	0	1	0	2	1	1	1	0	0
ツリフネソウ属	1	0	0	0	0	0	0	0	0
ミソハギ属	1	1	0	0	0	1	1	0	0
キカシグサ属	1	2	0	1	1	1	2	0	14
アリノトウグサ属	0	9	0	0	0	20	11	3	1
セリ科	6	10	0	8	3	9	9	4	3
シソ科	1	1	0	1	0	0	0	0	0
オオバコ属	0	0	0	0	0	0	1	0	0
オミナエシ属	0	0	0	1	0	0	0	1	0
ヨモギ属	31	123	0	51	23	8	19	23	73
他のキク亜科	2	3	0	2	1	3	1	1	3
タンポポ亜科	1	5	0	0	0	1	3	5	0
不明花粉	18	14	0	14	9	13	25	12	28
シダ類胞子									
サンショウモ	1	0	0	0	1	0	1	1	0
他のシダ類胞子	138	83	42	451	250	337	247	101	235
合計									
木本花粉	215	232	10	214	238	210	217	246	221
草本花粉	460	1248	23	2715	328	860	1222	807	1209
不明花粉	18	14	0	14	9	13	25	12	28
シダ類胞子	139	83	42	451	251	337	248	102	235
総花粉・胞子数（不明花粉を除く）	814	1563	75	3380	817	1407	1687	1155	1665

試料は樹皮がついた小径の枝で、2年分の組織が観察できる。散孔材で、管孔は単独もしくは放射方向に2～4個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は密に対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと、2～3列で40細胞高の組織がやや集合状となる。

・広葉樹(散孔材)

中型の道管が年輪界に一様に分布し、道管径は晩材部に向かって漸減する。道管は単独もしくは2～6個が複合する。道管の穿孔および壁穴は観察できないが、放射組織と道管が交差する部分の壁穴は粗いふるい状となる。放射組織は異性II型、1～4細胞幅、1～30細胞高。

4．考　察

(1) 花粉化石群集の特徴

今回、得られた花粉化石群集は、2つに区分される。1つは、V層および各遺構埋積物がこれに相当し、ブナ属が多産することが特徴である。もう1つは、IV層～I層がこれに相当し、マツ属が多産することが特徴である。このように花粉化石群集は、ブナ属が多産する群集からマツ属が多産する群集へ変化することがよみとれる。ただし、同じ中世期の遺物を包含するIII層と各遺構の埋積物とで異なる群集となっているために、この群集の変化する時期を特定することはできない。どちらの堆積物にも後代の撹乱の影響や再堆積などの過程が考えられる。今後、堆積層が良好に認められる場所において、花粉化石群集の変遷様式を層序学的に検討することにより、本分析の課題も明らかにされるであろう。

(2) 周辺植生

中世期を挟むある時期からある時期までは、調査地点の周辺はブナ属を中心として、コナラ亜属やハンノキ属などから構成される植生であったと考えられる。このうち、花粉化石が最も高率に出現するブナ属は現在の植生で冷温帯林の代表的な森林構成種である。これより、周辺地域は現在でいう冷温帯落葉広葉樹林と類似した植生であったと考えられる。ところで、SD3溝跡より検出された材化石はハンノキ属であり、最外部年輪の形成状況から晩夏～冬の間に成長を止めた2年生の枝であると判断される。このように比較的若い枝が溝跡内部に堆積していることからSD3溝跡の付近にはハンノキ属が生育していた可能性がある。またサワグルミ属・クルミ属・クマシデ属－アサダ属・ニレ属－ケヤキ属など湿った環境に生育する種類を含む分類群が検出されることから、これらの種類が低地に生育していた可能性がある。その後、周辺地域ではマツ属を中心とした植生に変化したと考えられる。日本各地で認められている縄文海進最盛期以降のマツ属花粉化石の増加は、その原因として人間の植生破壊によるマツ二次林の増加が指摘されている(塚田, 1981)。ここでのマツ属の多産も、後述するように低地で畑作が概に実施されていた可能性が高いことを考慮すると、人間の活動が著しくなったために二次林が

周辺に成立したことを反映していると考えられる。

一方、森林植生の変化した時期に関わらず、調査地点の周辺は、主にイネ科を中心にカヤツリグサ科・クワ科・サナエタデ節－ウナギツカミ節・アカザ科・ナデシコ科・ヨモギ属などの草本類が生育しており、比較的開けていたと考えられる。また、畑作植物とされるソバ属が検出されることから、周辺の微高地上などではソバ栽培などの畑作が行われていた可能性がある。そして溝内部あるいはその導水路などには、サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・キカシグサ属・サンショウモなどの水湿生植物が生育していたと考えられる。

Ⅳ．リン・カルシウム分析

1．試料の選択

試料は、墓壙と考えられる土坑覆土３点〔SK29(試料番号９・10)、SK47(試料番号12)〕と墓壙に関わると考えられる土器内の土壌１点〔ST１　R P66(試料番号11)〕および骨片混じりの溝堆積物〔SD　F３(試料番号５)〕、耕作土〔SD３　Ⅰ層(試料番号15)〕、中世の遺物を包含する自然堆積層〔SD３　Ⅲ層(試料番号17)〕各１点ずつの合計７点である。なお、SD３　F３(試料番号５)、SD３　Ⅰ層(試料番号15)、SD３　Ⅲ層(試料番号17)の３点は含量対比のための対照試料である。

2．分析方法

リン、カルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会(1986)、土壌養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部芸化学教室(1957)などを参考として、以下の操作工程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる(風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間)により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダールフラスコにとり、はじめに硝酸(HNO_3) 5 mℓを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)10 mℓを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100 mℓに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾度あたりのリン含量(P_2O_5 mg/g)とカルシウム含量(CaO mg/g)を求める。

3．分析結果

結果を表４に示す。以下に各試料の結果を述べる。

・SD３　F３(試料番号５)

リン酸含量は、14.64P_2O_5 mg/gと下記の対照試料より著しく高い値を示したが、カルシウム含

量は、4.02CaOmg/gであり、下記の対照試料と同じ値を示した。

・SD 3　Ⅰ層・Ⅲ層(試料番号15・17)

リン酸含量は、SD 3　Ⅰ層(試料番号15)が2.29P_2O_5mg/g、SD 3　Ⅲ層(試料番号17)が1.44P_2O_5mg/g、カルシウム含量は、SD 3　Ⅰ層(試料番号15)が6.42CaOmg/g、SD 3　Ⅲ層(試料番号17)が2.92CaOmg/gを示した。試料番号17の採取された自然堆積物のⅢ層に比べ、試料番号15の採取された耕作土のⅠ層はリン酸、カルシウム含量が高い値を示す。

・SK29(試料番号9・10)

リン酸含量は、試料番号9で1.05P_2O_5mg/g草灰質の試料番号10で0.97P_2O_5mg/gであり、対照試料とほぼ同じ値であった。

カルシウム含量は、試料番号9で48.57CaOmg/g、試料番号10で4.13CaOmg/gであり試料番号9ではⅠ層やⅢ層の試料よりも著しく高い値を示した。

・ST 1 RP66(試料番号11)

リン酸含量は、1.80P_2O_5mg/g、カルシウム含量は3.49CaOmg/gであり、Ⅲ層の試料とほぼ同じ値を示した。

・SK47F(試料番号12)

土坑覆土のリン酸含量は0.89P_2O_5mg/g、カルシウム含量は3.55CaOmg/gであり、Ⅲ層の試料とほぼ同じ値を示した。

表4　リン・カルシウム分析結果

試料番号	リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaOmg/g	土色・土性	備　考
5	14.64	4.02	2.5Y3/2.5黒褐～暗オリーブ褐・L	SG 3 河川跡堆積物(動物 骨片、白色物質混在)
9	1.05	48.57	2.5Y4/2暗灰黄・L	SK29覆土(白色物質混在)
10	0.97	4.13	2.5Y2/1黒・L	SK29覆土(草炭質)
11	1.80	3.49	2.5Y4/3オリーブ褐・CL	ST 1　RP66土器内土壌
12	0.89	3.55	2.5Y3/1黒褐・CL	SK47F 土坑覆土
15	2.29	6.42	2.5Y3/3オリーブ褐・CL	SD 3　Ⅰ層(耕作土)
17	1.44	2.92	2.5Y3/3オリーブ褐・CL	SD 3　Ⅲ層(包含層)

注.(1)土　色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修，1967)による。
(2)土　性：土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性の判定法による。CL…壌土(わずかに砂を感じるが、かなりねばる。)
L…壌土(ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。)

4．考察

土壌中に本来含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量についての報告事例(Bowen,1983；Bolt Bruggenwert,1980；川崎ほか,1991；天野ほか,1991)によれば、天然賦存量の上限は約3.0P_2O_5mg/g 程度と推定され、また、人為的な影響を受けた既耕地では5.5P_2O_5mg/g(黒ボク土の平均値、川崎ほか, 1991)という報告例が有る。これまでの当社における分析調査では、6.0P_2O_5mg/g前後の値を越える場合には骨片が混在していることもあり、人骨によるリン酸富化であることが明らかに認められている。一方、カルシウム含量の天然賦存量は普通1～50CaOmg/g(藤貫, 1979)とされるが、その範囲はリン酸よりも明らかに大きい。したがって、これを著しく越える数値が得られた場合にはカルシウムの富化を確実に指摘できるがこのようなケースはごくまれである。

今回の分析結果では、SD３ F３(試料番号５)でリン酸含量が、SK29(試料番号９)でカルシウム含量が著しく高い値を示し、リン酸、カルシウムの局所的な濃集が認められる。ただし、これらの濃集は、両試料ともに認められた白色物質の存在による可能性がある。本分析では、それらの物質の成分を調査するためにX線回析を行った。その結果、SD３ F３(試料番号５)に混在する物質はリン酸第一鉄(藍鉄鉱)であり、SK29(試料番号９)に混在する物質は炭酸カルシウムおよび水酸化カルシウム(消石灰)であった。リン酸第一鉄については、同じ試料中に多くの骨片が出土していることから、堆積時あるいはその後の環境条件によって骨から流亡したリン酸が土壌中の鉄分と再結晶して生成された可能性も考えられる。炭酸カルシウムについては、主成分が炭酸カルシウムである貝殻やサンゴに由来するものかまたは、骨から流亡した成分が再結晶したことなどが考えられる。ただし、骨から流亡したものであれば、同時にリン酸含量も高い場合が多いはずである。今回の結果では、SK29(試料番号９)のリン酸含量は低い値であるといえるから、カルシウムが骨起源である可能性は低いといえる。また、水酸化カルシウムについては、一般的には工業的に生産されるものであり、自然環境下で生成される可能性は低い。本分析で認められた水酸化カルシウムが人為的なものであるとしても、現時点ではその由来はわからない。今後、類例の調査等により検討する必要がある。

以上、本分析では土坑覆土および土器内土壌ともにリン酸とカルシウムの局所的な濃集は認められず、両成分を多く含む物質の痕跡は指摘できない。したがって、これらの遺構または遺物が墓制に関わるものであったことを支持する結果は得られなかったといえる。

Ⅴ．骨の同定

1．試料の選択

試料は、土坑状遺構RX93(試料番号1)および溝跡SD３ Ｆ４(試料番号2)の２ケ所の遺構から検出された骨片多数である。土壌と混在した状態で６袋あり、その内２袋を選択した。他の試料は細片化すぎて同定試料に不敵であった。但し、試料番号３は所属が不明なため、同定試料の対象としなかった。試料の詳細および当社で観察した状態を表５に示した。

表５　骨同定試料一覧

番号*	採取場所他	試料の状況（観察所見）	同定対象
1	RX93　940721	大型動物骨。大・小片くずれて100片以上。	○
2	SD3　F4　940803	大型動物骨。中～小片くずれて50片くらい。	○
3	ラベルなし	大型動物骨。大片数点。	
4	SD3　F4　エリア３	大型動物骨。小片くずれて200片以上。	
5	〃	土壌中にわずかに骨の小片混る。	
6	SD3　F4　エリア２	土壌中にわずかに骨の小片混る。	

＊便宜上、当社にて付した。

2．方法

試料番号１・２の同定試料は、水洗選別を行い、土壌分を除去した。得られた骨類は、同定可能と判断したものを対象に同定する。

3．結果

結果は、試料番号毎に以下に述べる。

1）試料番号１(RX93)

一括して取り上げられているが二つの部位なるものである。

・ウシ　Bos taurusの角突起部

本標本は現長90㎜、径35×25㎜(元の部分で推定)の断面楕円形を呈するもので、先に行くほど細くなっている様子からウシの角突起と推定される。本来もう少し膨らみのあるものであるが押しつぶされている様子が窺われる。元はこれよりもやや長いものであったはずである。雌の個体で、骨質が弱いところからまだ若い個体のものではなかったかと思われる。

・ウシ　Bos taurusもしくはウマ　Equus caballusのような大型獣類の四肢骨片である。破損がはげしく部位を確認できる程度に修復することはできなかった。大腿骨あるいは脛骨のような骨で、骨質の薄いところから若い個体ではなかったかと推測される。

2）試料番号２(SD３ Ｆ４)

ウシ　Bos taurus若しくはウマ　Equus caballusと思われる大型獣類である。骨は著しく破損していたが、同一の骨のものと思われる。もう少し原状が残されて採取されていれば、多少なりとも復元も可能であったが、現状では部位を確認できる程度の復元はできなかった。部位として推定されるのは腕骨のような骨ではないかと考えられる。

<引用文献>

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信(1991)中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』,p.28-36.

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究－．第四紀研究,11,p.254-269.

Arai,F.,Machida,H.,Okumura,K.,Miyauchi,T.,Soda,T.,and Yamagata,K.(1986) Catalog for Late Quaternary Marker-Tephras in Japan II-Tephras occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. *Geographical Reports of Tokyo Metropolitan University*,21,p.223-250.

Bowen,H.J.M.(1983)『環境無機化学－元素の循環と生化学－』.浅見輝男・茅野充男訳,297p.,博友社 [Bowen,H.J.M.(1979)*Environmental Chemistry of Elements*].

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.(1980)『土壌の化学』.岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳,309p.,学会出版センター [Bolt,G.H.and Bruggenwert,M.G.M.(1976) *SOIL CHEMISTRY*],p.235-236.

土壌標準分析・測定法委員会編(1986)『土壌標準分析・測定法』.354P.,博友社.

土壌養分測定法委員会編(1981)『土壌養分分析法』.440p.,養賢堂.

藤貫　正(1979)カルシウム.地質調査所化学分析法,50：p.57-61,地質調査所.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久(1991)九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量.農林水産省農林水産技術会議事務局編『土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発』,149p.：p.23-27.

木下　忠(1981)『埋甕－古代の出産習俗』.考古学選書18,262p.,雄山閣.

京都大学農学部農芸化学教室編(1957)『農芸化学実験書　第１巻』.411p.,産業図書.

町田　洋・新井房夫・(1992)「火山灰アトラス」.276p.,東京大学出版会.

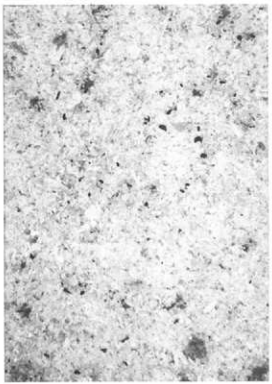
町田　洋・新井房夫・森脇　広(1981)日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,p.562-569.

塚田松雄(1981)過去一万二千年間－日本の植生史　II.新しい花粉帯.日本生態学会誌,31,p.201-215.

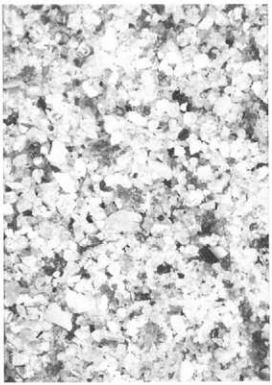
農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.

ペドロジスト懇談会編(1984)『土壌調査ハンドブック』.156p,.博友社.

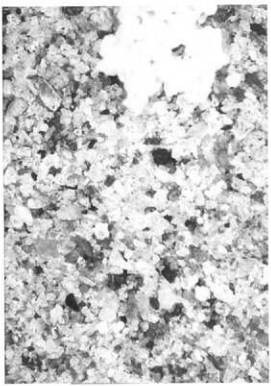
図版1　試料中の砂分の状況および火山ガラス



1.砂分の状況（試料番号7）　1.0mm



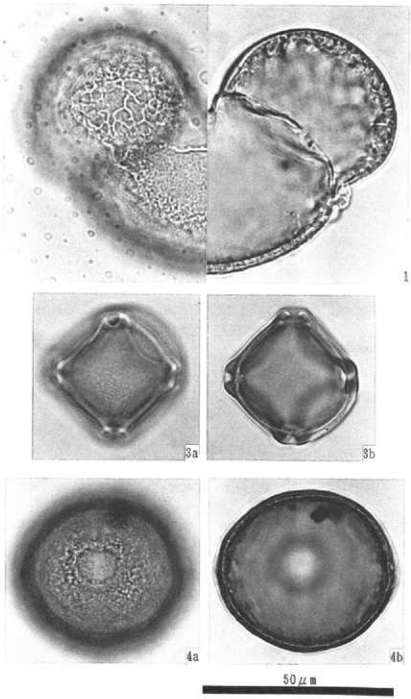
2.砂分の状況（試料番号8）　1.0mm



3.砂分の状況（試料番号9）　1.0mm

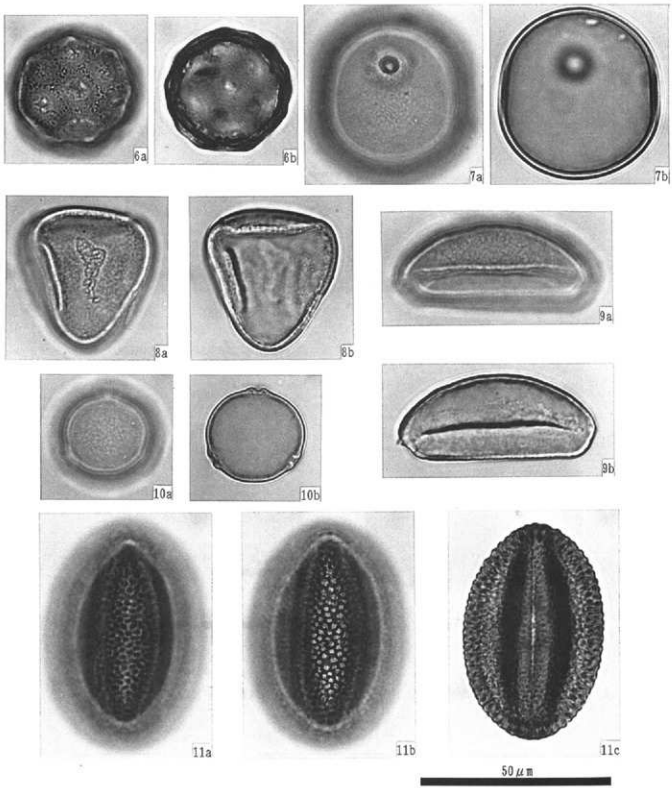
4.火山ガラス（試料番号7）　0.5mm

図版2　花粉化石（1）



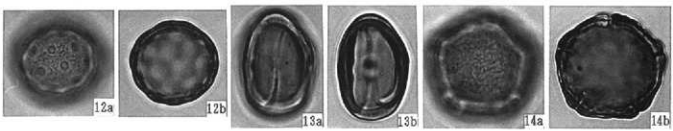
1. マツ属複維管束亜属（試料番号8）
2. スギ属（試料番号8）
3. ハンノキ属（試料番号8）
4. ブナ属（試料番号8）
5. コナラ属コナラ亜属（試料番号8）

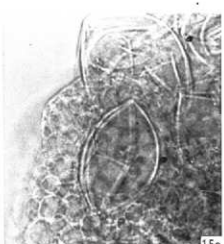
図版3　花粉化石（2）

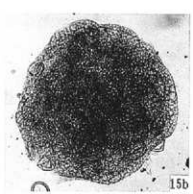


6. サジオモダカ属（試料番号12）
7. イネ科（試料番号8）
8. カヤツリグサ科（試料番号12）
9. ミズアオイ属（試料番号8）
10. クワ科（試料番号12）
11. ソバ属（試料番号17）

図版4　花粉化石（3）





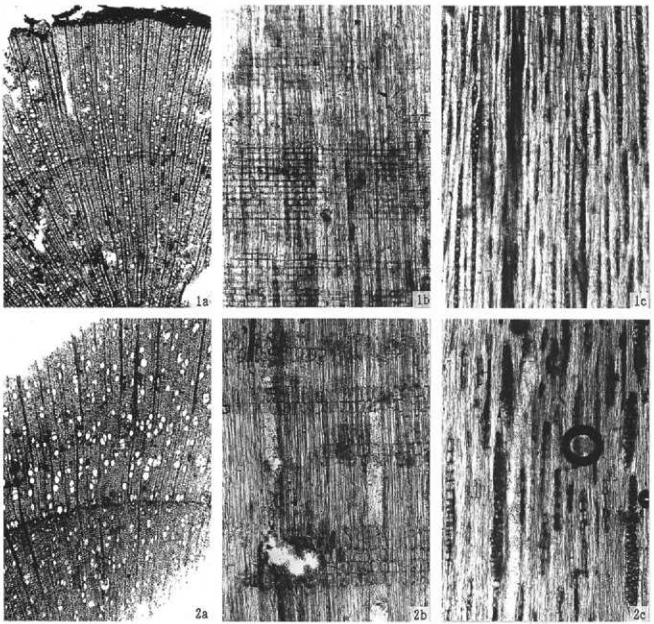


100 μm
(15b)

50 μm
(12-15a)

12. アカザ科（試料番号12）
13. キカシグサ属（試料番号19）
14. アリノトウグサ属（試料番号15）
15. サンショウモ（試料番号17）

図版5　試料番号14中の木材



1. ハンノキ属
2. 広葉樹（散孔材）
a：木口，b：柾目，c：板目

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第49集

後田遺跡
大道下遺跡
第2次発掘調査報告書

1997年10月31日発行
発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話　0236-72-5301
印刷　藤庄印刷株式会社